

## 夜航詩話卷之四

伊勢津阪孝綽君裕著

男達有功校

詩人動爲妄語、處富有而言窮愁、居鄉里而言羈旅、不老曰老、無病曰疾、流淚斷腸等字、皆輕用之、何其孟浪也、明鄭善夫詩、專做少陵、林貞恆譏之曰、時非天寶、地遠拾遺、徒託于悲哀激越之音、可謂無病而呻矣、施及後世、此弊尤其清、人沈歸愚曰、點染風花、何妨少爲失實、若小小送別、而動欲沾巾、聊作旅人、而便云萬里、登陟培塿、比擬華嵩、偶遇庸人、頌言良哲、以至本居泉石、更懷遷世之思、業處歡娛、忽作窮

詩人は動まがすれば妄語を爲す、富有に處りて窮愁を言ひ、郷里に居て羈旅を言ひ、老いずして老ま曰ひ、病無きに疾ま曰ふ、流淚・斷腸等の字皆な輕がろしく之を用ゆ、何ぞ其れ孟浪なる、明の鄭善夫の詩、専ら少陵に倣ふ、林貞恆之を譏りて曰、時は天寶に非ず、地は拾遺に遠し、徒らに悲哀激越の音に託す、病無くして呻うなくま謂ふ可し、施しひて後世に及び、此の弊尤も甚し、清人沈歸愚曰、風花を點染する、何ぞ少しく實を失ふを爲すを妨げん、若し小々の送別にして、動もすれば巾を沾さんま欲し、聊か旅人ま作りて、便ち萬里ま云ひ、培塿まに登陟して、華嵩に比擬し、偶々庸人に遇ひ、頌して良哲ま言ひ、以て本ま泉石に居り、更に遷世の思を懷まき、業まに歡娛まに處り、忽ち窮途の哭まを作すに至る、

途之哭、準此立言、皆爲失體、記曰、志之所至、詩亦至焉、本乎志、以成詞、惡有數者之患、此尤中今日詩人之膏肓矣、

明人李廷彥獻百韻詩于一上官、其間有句云、舍弟江南沒、家兄塞北亡、上官惻然憫之曰、不意君家凶禍重併如此、廷彥曰、實無此事、但圖對屬親切耳、上官笑而納之、王齊宗爲大原掾、高才不羈、好詞、嘗作青玉案、望江南小詞、以嘲帥與監司、監司大怒責之、齊宗應聲答曰、某居下位、常恐被人譏、只是會填青玉案、何曾敢做望江南、請問馬初監、時馬初監者、適與齊宗並坐、惶恐亟自辯訴、既退、詰齊宗曰、某舊不知子、乃以某爲證、何也、齊宗笑曰、且借公

此に準して言を立つる、皆な體を失す爲す、記に曰、志に至る所、詩も亦至る、志に本つき以て詞を成さば、惡んど數者の患ひ有らん、此れ尤も今日詩人の膏肓に中れり、

明人李廷彥、百韻詩を一上官に獻す、其の間に句有り云ふ、舍弟は江南に沒し、家兄は塞北に亡す、上官惻然として之を憫みて曰、意はさりき君の家の凶禍重併此の如くならんとは、廷彥曰、實は此の事無し、但だ對屬の親切を圖るのみ、上官笑つて之を納る、王齊宗、大原の掾に爲る、高才不羈にして詞を好む、嘗て青玉案、望江南小詞を作り、以て帥と監司を嘲る、監司大いに怒り、之を責む、齊宗聲に應じて答へて曰、某、下位に居り、常に人に譏せられんことを恐る、只、是れ會て青玉案を填す、何ぞ會て敢て望江南を做さん、請ふ馬初監に問へ、時に馬初監は適、齊宗と並び坐す、惶恐亟に自ら辯訴す、既に退き齊宗を詰りて曰、某舊き子を知らず、乃ち某を以て證と爲すは何ぞや、齊宗笑つて曰、且らく公を借りて韻を趁ふ、幸に多く怪む

趁韻幸勿多怪、皆大可笑事、又王荆公戲取人姓字、倒用爲句云、馬子山、驕山子、馬馬給事、字子山、山子馬、穆王八駿馬名、久之人對曰、錢衡水盜水、衡錢、時錢某爲水衡令、因謝曰、止欲作對、實非盜也、見貢父詩話、尤可絕倒也、

東軒筆錄、程師孟知洪州、於府中作靜堂、自愛之、無日不到、作詩題於石云、每日更忙須一到、夜深長是點燈來、李元規見而笑曰、此乃是登溷詩乎、遜齋閒覽、錢昭度咏方池云、夜深卻被寒星映、恰似仙翁一局碁、人笑曰、此正謂一局黑全輸也、荆湖近事、張仲達詠鷺鷥云、滄海最深處、鱸魚脚得歸、張文寶讀之曰、佳則佳矣、爭奈鷺

勿れ、皆な大に笑ふ可き事なり、又王荆公戲に人の姓字を取、倒用して句を爲りて云ふ、「馬子山は山子馬に驕る」と、馬給事、字は子山、山子馬は穆王八駿馬の名、之を久うして人對して曰、「錢衡水は水衡錢を盜む」と、時に錢某、水衡令たり、因つて謝して曰く、止だ對を作さんぞ欲す、實は盜みしに非ずと、貢父詩話に見ゆ、尤も絶倒すべきなり。

東軒筆錄に、程師孟、洪州に知たり、府中に於て靜堂を作り、自ら之を愛し、日こして到らざるは無し、詩を作り石に題して云ふ、「毎日更に忙し須らく一たび到るべし、夜深くして長く是れ燈を點じて來る」と、李元規見て笑つて曰く、此は乃ち是れ溷に登るの詩か、遜齋閒覽に、錢昭度、方池を咏じて云ふ、「夜深くして卻つて寒星に映せらる、恰も似たり仙翁一局の碁」と、人笑つて曰く、此れ正に一局黒の全輸を謂ふなりと、荆湖近事に、張仲達、鷺鷥を詠じて云ふ、「滄海最も深き處、鱸魚脚み得て歸る」と、張文寶、之を讀みて曰く、佳は則ち佳なり、争で奈せん鷺鷥

驚背脚太長也、藝苑雌黃、石敏若詠雪、有燕南雪花大於掌、冰柱懸簷一千丈之句、豪則豪矣、安得爾高屋耶、古今詩話、韋楚老詩云、十幅紅綃圍夜玉、十幅紅綃爲、爾不及四五尺、如何伸足右難見於詩人玉屑中、拈出以資解頤、

模糊作模爛漫作煖、徧考字書、從無此字、蓋因糊從米爛從火、模漫左文從而訛耳、模樣俗作樣、樣音象、木名、亦因模字而誤也、蓑笠作叢、斟酌作斟、規矩作規、皆同弊也、焦氏筆乘、俗於聯字有因上誤下者、有因下誤上者、駟僮誤以僮从馬作駟、髻黻誤以髻从齒作齧、蹴鞠誤以鞠从足作踳、此類甚多、皆一時趁筆之誤、後多沿其失、

は驚脚太だ長しと、藝苑雌黃に、石敏若、雪を詠じて、燕南の雪花より大なり、氷柱簷に懸る一千丈の句有り、豪は則ち豪なり、安んぞ爾き高屋を得んやと、古今詩話に、韋楚老の詩に云ふ、十幅の紅綃、夜玉を圍むと、十幅の紅綃を爾き爲さば、四五尺に及ばず、如何ぞ足を伸ばさんと、右、詩人玉屑中に難見す、拈出し以て解頤に資す。

模糊を模に作り、爛漫を煖に作る、徧く字書を考ふるに、從て此の字無し、蓋、糊は米に從ひ、爛は火に從ふに因り、模漫の左文從つて訛するのみ、模樣俗に樣に作る、樣は音象、木の名なり、亦模の字に因りて誤れるなり、蓑笠を叢に作り、斟酌を斟に作り、規矩を規に作る、皆な同弊なり、焦氏筆乘、俗に聯字に於て上に因り下を誤る者有り、下に因り上を誤る者有り、駟僮誤つて僮を以て馬に从ひ、髻黻誤つて髻を以て齒に从ひ、蹴鞠に作る、蹴鞠、誤つて鞠を以て足に从ひ、踳に作る、此の類甚だ多し、皆な一時筆を趁ふの誤りなり、後多く其の失に沿ひて、改

而不改耳、是亦不可不知也。

謾、音縮、謾、松風清肅之貌、世說、世目李元禮謾、謾如勁松下風、是也、近日詩客咏松壽人、訛作稷稷、比比皆是、音義俱別、不知何謂、或曰、松高貌、譬說耳、蓋童蒙之時、因詩材之書、承鹵莽之弊、遂不知改也、如銜盃用含字亦然、雖諸老先生、往往襲謾、是故余爲童生、教詩、併糾字畫之謬、必審示其正體、若苟訛以傳、訛及長、則一成而不可變也。

南宋時、閩中鄭昂者、假東坡名、作老杜事實一編、其所引事、皆無根據、反用杜詩見句、增減爲文、而託爲古人語、謂之僞蘇注、今千家注蘇曰者、是也、朱子文集詳辯之、

めざるのみ、是れ亦知らざる可からざるなり。

謾は音縮、謾々は松風清肅の貌なり、世説に、世に李元禮を目して謾々として勁松下の風の如しと、是れなり、近日の詩客松を咏じ人を壽し、訛つて稷々に作る、比々皆是なり、音義俱に別なり、何の謂なるを知らず、或ひと曰、松の高き貌と、譬説のみ、蓋、童蒙の時、詩材の書に因り、鹵莽の弊を承け、遂に改むるを知らざるなり、銜盃に含の字を用ふるが如き、亦然り、諸老先生も雖、往々謾を襲ふ是の故に余童生の爲めに、詩を教ふるに、併せて字畫の謬を糾し、必ず審かに其の正體を示す、若し苟も訛以て訛を傳へば、長ずるに及び、則ち一たび成りて變ずるべからざるなり。

南宋の時、閩中の鄭昂といふ者、東坡の名を假り、老杜事實一編を作る、其の引く所の事、皆な根據無く、反つて杜詩の見句を用ひ、増減して文を爲し、而して託して古人の語と爲す、之を僞蘇注と謂ふ、今千家注の蘇曰といふ者は是れなり、朱子文集に詳に

洪容齋嚴滄浪劉須溪馬貴與楊用脩等亦力辯其妄然猶襲謬不已誤後學殊甚余見明一統志載梁何遜爲揚州法曹咏廡舍梅花丘瓊山故事成語考舉晉阮孚囊空羞澁之語淵鑑類函亦竝載之此皆不省僞蘇捏造誤取爲故實耳頃讀焦氏筆乘曰杜詩有就用成語爲句者不分桃花紅錦用漢李夫人不分桃花惱人病眼詩卷長留天地間用魏劉楨將此卷長留天地間明年此會誰能健用晉阮瞻明年此會知誰是強健文采風流今尙存用羊祐想其風流文采宛然尙存昏黑應須到上頭用隋常琮對煬帝問到寶山之語其餘猶舉十數件喜以爲得異聞不知皆

之を辯ず、洪容齋嚴滄浪劉須溪馬貴與楊用脩等亦力めて其の妄を辯ず、然れども猶ほ謬を襲ひて已まず、後學を誤る殊に甚だし、余、明一統志を見るに、梁の何遜が揚州法曹に爲り、廡舎の梅花を咏するを載す、丘瓊山の故事成語考に、晉の阮孚の囊空羞澁の語を舉げ、淵鑑類函亦竝に之を載す、此れ皆な僞蘇の捏造を省みず、誤り取りて故實と爲すのみ、頃ころ焦氏筆乘を讀むに、曰、杜詩に成語を就用して句を爲す者あり、「不分桃花紅錦に勝る」は、漢の李夫人の「不分桃花人の病眼を惱ます」を用ひ、「詩卷は長く天地の間に留る」は、魏の劉楨の「此の卷を將つて長く天地の間に留む」を用ひ、「明年此の會誰か能く健」は、晉の阮瞻の「明年此の會、知る誰か是れ強健なる」を用ひ、「文采風流今尙ほ存す」は、羊祐の「其の風流文采を想ひ、宛然として尙ほ存す」を用ひ、「昏黑應に上頭に到るべし」は、隋の常琮の煬帝の問に對へ寶山に到るの語を用ふ、其餘、猶ほ十數件を舉げ、喜ひて以て異聞を得たりと爲す、知らず皆な僞蘇の

僞蘇妄語也。夫如何遜阮孚等猶借古人之名。至梁張褒隋常琮併人名亦杜撰之。而斯文鉅公如瓊山弱侯尙受其欺。如作唐詩訓解者不足責矣。

清河書畫舫有張某不負碧山樓記取僞蘇張褒碧山不負吾之語尤可笑也。

劉禹錫蘇州詩春城三百九十橋夾岸朱欄隔柳條杜牧江南春南朝四百八十寺多少樓臺烟雨中十字作枕音吳越方言蓋語急故以平聲呼之二詩在其地所作故就而用其音蓋亦以滑稽行之耳故江南詩人則不敢平用慎其襲鄉音貽笑大方也斯知用方言叶音但遊其地姑爲戲可爾若他處不可藥用陸龜蒙詩蜀酒時

夜航詩話卷之四

妄語なるを、夫れ何遜阮孚等の如き、猶ほ古人の名を借る、梁の張褒、隋の常琮に至りては、人名を併せて亦之を杜撰す、而して斯文の鉅公、瓊山弱侯の如き、尙ほ其の欺を受く、唐詩訓解を作る者の如きは責むるに足らず。

清河書畫舫に、張某不負碧山樓の記あり、僞蘇張褒碧山、吾に負かずの語を取る、尤も笑ふ可し。

劉禹錫の蘇州の詩に、春城三百九十橋、岸を尤む朱欄柳條を隔つ、杜牧の江南春に「南朝四百八十寺、多少の樓臺烟雨の中」、十字、枕音しん作す、吳越の方言なり、蓋、語急なり、故に平聲を以て之を呼ぶ、二詩は其地に在りて作る所、故に就いて其音を用ふ、蓋、亦滑稽を以て之を行ふのみ、故に江南の詩人は則ち敢て平用せず、其郷音を襲ひ笑を大方に貽おこすを慎むなり、斯れ知る方言を用ひ音を叶ふは、但だ其地に遊び姑く戲を爲して可なるのみ、若し他處にては藥用すべからず、陸龜蒙の詩

傾瓶、吳鍛徧發坵、自注、瓶瀟、賈反、從蜀呼、亦是也、豈可於他方強用此音乎、蔡寬夫詩話曰、詩人用事有乘語意到處輒從其方言用之者、亦自一體、但不可以爲常耳、吳人以作爲佐音、韓退之方橋詩、非閣復非船、可居兼可過、君欲問方橋、方橋如此作、是用吳音也、如淮楚之間、以十爲忱音、故白樂天有云、綠浪東西南北水、紅欄三百九十橋、亦蘇州作不知當時所呼通爾、老學菴筆記曰、汴京里巷間人謂十爲譏、宋文安公宮詞云、三十六所春宮館、一一香風送管絃、鼉以道詩亦云、煩君一日殷勤意、示我十年感遇詩、則詩家亦以十爲譏矣、此皆明就其地用方音、可以戒孟浪借口

に、「蜀酒時に漢を傾け、吳鍛徧く坵を發す」と、自注に、瓶、瀟賈反、蜀呼に從ふと、亦是なり、豈に他方に於て強ひて此の音を用ふ可けんや、蔡寬夫詩話に曰、詩人の事を用ふる、語意の到る處に乘じ、輒ち其方言に從ひて之を用ふる者あり、亦自ら一體なり、但、以て常と爲す可からざるのみ、吳人は作を以て佐音と爲す、韓退之の方橋の詩に「閣に非ず復た船に非ず、居る可く兼ねて過ぐ可し、君、方橋を問はん」と欲せば、方橋此の如く作す」と、是れ吳音を用ふるなり、淮楚の間の如き、十を以て忱音と爲す、故に白樂天云ふあり、「綠浪東西南北の水、紅欄三百九十橋」と、亦蘇州の作知らず當時呼びて通する所のみ、老學菴筆記に曰、汴京里巷間の人は、十を謂ふて譏と爲す、宋文安公の宮詞に云、「三十六所春宮館、一一香風管絃を送る」と、鼉以道の詩も亦云ふ、「君を煩す一日殷勤の意、我に示す十年感遇の詩」と、則ち詩家も亦十を以て譏と爲す、此れ皆其地に就き方音を用ふるを明にす、以て孟浪口を借る者を戒む可きなり、留青

者也、留青日札曰、蓋十當音旬、古人以十日爲旬、故如此讀、牽強曲說耳。

凡一題而賦數首者、不唯宜各換意境、亦須格局變化、不肯雷同、譬如觀演劇、每齣改觀、若篇篇體裁同一機軸、略無變易、令人欠伸耳、觀少陵秋興八首、何將軍山林十首、首尾布置、有起有結、每章各有主意、或賦景、或寫情、錯綜變化、用正用奇、不可方物也、余最愛王弇州衛河八絕、爲人講以諭之、蓋一張一弛、寬猛相濟、雖伎藝亦然。

一聯賦景、一聯寫情、最律詩正法、若通篇疊景、欠變化手段、不善詩矣、李夢陽曰、疊景者、意必二、濶大者、半必細、此最律詩三

日札曰、蓋十は當に音旬なるべし、古人十日を以て旬と爲す、故に此の如く讀むと、牽強曲説のみ。

凡そ一題にして數首を賦するは、唯宜く各、意境を換ふべきのみならず、亦須く格局變化し、肯て雷同せざるべし、譬へば演劇を觀るが如し、毎齣觀を改む、若し篇々體裁同一の機軸にして、略ほ變易無くんば、人をして欠伸せしむるのみ、少陵の秋興八首、何將軍山林十首を觀るに、首尾布置、起あり結あり、章毎に各主意あり、或は景を賦し、或は情を寫し、錯綜變化、正を用ひ、奇を用ひ、方物す可からざるなり、余は最も王弇州の衛河八絶を愛し、人の爲めに講し、以て之を譯す、蓋一張一弛、寬猛相濟ふ、伎藝と雖、亦然り。

一聯は景を賦し、一聯は情を寫す、最も律詩の正法なり、若し通篇景を疊み、變化の手段を欠くは、詩を善くせざるなり、李夢陽曰、景を疊む者は、意必ず二、濶大なる者は、半ば必ず細、此れ最

昧如浮雲連海岱、平野入青徐、孤嶂秦碑  
 在荒城魯殿餘、前景高目、後景感懷也、如  
 詔從三殿下、碑到百蠻開、野館穠花發、春  
 帆細雨來、前半濶大、後半工細也、唐法律  
 甚嚴、惟杜變化莫測、亦惟杜、此訣亦不可  
 不知也。

詩忌犯同字、然義不同、不爲重複、謂之傍  
 犯、劉禹錫贈樂天第三句、雪裏高山頭白  
 早、第五句于公必有高門慶、自注高山本  
 高于門使之高、二字故殊、古之詩流曉此  
 蓋恐後人嫌兩用高字、故言上高字是高  
 低之高、下高字則擡高之高、然俱音居勞  
 反、但其義微異、便與別字同矣、若音義並  
 異者、或一句中複用、宋之問、禁靜鐘初徹、

も律詩の三昧なり、「浮雲は海岱に連り、平野は青徐に入る、孤  
 嶂秦碑在り、荒城魯殿餘る」の如き、「前景は高目、後景は感懷な  
 り」、「は三殿より下り、碑は百蠻に至りて開く、野館穠花發き、  
 春帆細雨來る」の如き、前半は濶大にして、後半は工細なり、唐  
 の法律甚だ嚴なり、惟、杜は變化測る莫し、亦惟、杜のみ、此の  
 訣も亦知らざる可からざるなり。

詩は同字を犯すを忌む、然れども義同じからずんば重複を爲さ  
 ず、之を傍犯と謂ふ、劉禹錫の樂天に贈る第三句に、「雪裏高山  
 頭白早し」と、第五句に、「于公必ず高門の慶あらん」と、自注に、  
 高山は本より高し、于門は之をして高からしむ、二字故に殊なり、  
 古の詩流此を曉る、蓋、後人の兩たび高の字を用ふるを嫌ふを  
 恐る、故に言ふ、上の高の字は是れ高低の高、下の高の字は則ち  
 擡高之高、然れども、俱に音は居勞の反、但其義微しく異なり、  
 便ち別字と同じ、若し音義並に異ならば、或は句中に複用す、宋  
 之問の「禁靜に鐘初めて徹し、更疎にして漏定に長し」と、羅郊

更疎漏更長、羅縑愁上中橋橋上望、是也、或韻中分押、李嶠咏雪頸聯、地疑明月夜、山似白雲朝、落句、大周天關路、今日海神朝、孫逖寒食有懷京洛起頭、天津御柳碧遙遙、軒騎相從半下朝、結尾、坐見司空掃西第、看君侍從落花朝、陸游柯山道上起聯、道路如繩直、郊園似砥平、落句、江村好時節、及我疾初平、但如樂天渭村退居詩、少睡知年長、端愛覺夜長、韓稚圭九日詩、年來飲興衰難強、漫有高吟力尙強、一聯句脚竝押、恐不可法也、又項斯詩、疎放長如此、何人長得尋、下長自注去聲、二句俱於第三字竝用、亦恐未穩也。

東坡送江公著詩、忽憶釣臺歸洗耳、又云、

夜航詩話卷之四

の「愁て中橋々上に上りて望む」は、是れなり、或は韻中に分押す、李嶠の雪を咏する頸聯に、「地は明月の夜かき疑ひ、山は白雲の朝に似たり」と、落句に「大周天關の路、今日海神朝す」と、孫逖の寒食京洛を懷ふありの起頭に、「天津の御柳碧遙々、軒騎相從ひ半は朝を下る」と、結尾の「坐ながら見る司空西第を掃ふを、看る君が侍從落花の朝」、陸游の柯山道上起聯に、「道路は繩直の如く、郊園は砥平に似たり」、落句に「江村好時節、我が疾の初めて平なるに及ぶ」と、但、樂天の渭村退居の詩の如き、「少睡年の長きを知り、端愛夜の長きを覺ゆ」と、韓稚圭の九日の詩に「年來の飲興衰へて強ひ難く、漫に高吟有り力尙ほ強し」と、一聯の句脚に竝に押す、恐らくは法さす可からず、又項斯の詩に、「疎放長く此の如し、何人か長く尋ぬるを得ん」と、下の長は去聲と自注す、二句俱に第三字に於て竝用す、亦恐らくは未だ穩ならざるなり。

東坡の江公著を送る詩に、「忽ち憶ふ釣臺歸りて耳を洗ふ」、又

亦念人生行樂耳、自注二耳義不同、故得重用、然同音重押、抑不可以爲常也、王右丞徐太師挽詞起聯、功德冠群英、彌綸有大名、頌聯就第優遺老、來朝詔不名、亦如禹錫兩用高字之例、歟、又上張令公排律、步蒼青瑣闥、方憶畫輪車、市閱千金字、朝開五色書、致君光帝典、薦士滿公車、車字重押、公車爲署名、故不妨歟、然至如奉和聖製送朝集使第六句、褰帷向九州、結句垂象滿中州、則全無別意矣、盧照鄰長安古意、別有豪華稱將相、轉日回天不相讓、意氣由來排灌夫、專權判不容蕭相、將相直爲官稱、蕭相乃人之稱號、故用重押歟、抑或趁筆之誤耳、詩人玉屑、歷舉重押之

云、「亦念ふ人生行樂せん耳」云、自注に、「二の耳の義同からず、故に重用するを得、然れども同音の重押は、抑も以て常と爲す可からず、王右丞の徐太師の挽詞の起聯に、「功德郡英に冠し、彌綸大名有り」云、頌聯に、「第に就き遺老を優し、來朝詔して名いはず」云、亦禹錫が高の字を兩用するの例の如きか、又た張令公に上る排律に、「步蒼青瑣の闥、方憶畫輪の車、市には閱す千金の字、朝には開く五色の書、君に致し帝典を光らし、士を薦めて公車に滿つ」云、車の字重押す、公車は署名たり、故に妨げざるか、然れども聖製朝集使を送るを奉和する第六句、「褰帷九州に向ふ」結句、「象を垂れ中州に滿つ」の如きに至つては、則ち全く別意なし、盧照鄰の長安古意に、「別に豪華の將相と稱する有り、日を轉じ天を回らし相讓らず、意氣は由來灌夫を排し、專權判して蕭相を容れず」云、將相は直に官稱たり、蕭相は乃ち人の稱號なり、故に重押するか、抑、或は筆を趁ふの誤りのみ、

例、文選古詩凡十、杜詩韓詩各九、因謂詩人如此、疊用韻者甚多、皆意到卽押耳、然以余觀之、皆是古人失點檢處、學者藉爲口實、傲疊之過矣。

李逢吉送令狐楚七律下半云、獨憶忘機陪出處、自憐何力繼翻飛、那堪兩地生離緒、蓬戶長扃行旅喧、去何字僅五字、使用那字、王績排律第三韻、經移何處竹、別種幾株梅、第五韻、院果誰先熟、林花那後開、亦何那復用、李攀龍春色那堪愁裏望、絨書何意病中聞、一聯中對用、又李賀病骨猶能在、人間底事無、何須問、牛馬拋擲任、巢盧、白居易、孔窮緣底事、顏天有何辜、亦底何復用、蓋不妨也。

詩人玉屑に重押の例を歴舉す、文選の古詩凡七十、杜詩韓詩各九、因りて謂ふ、詩人此の如く韻を應用するもの甚だ多し、皆意到らば卽ち押すのみ、然れども余を以て之を觀るに、皆是れ古人の點檢を失する處、學者藉りて口實を爲す、傲疊の過なり。

李逢吉の令狐楚を送る七律の下半に云、「獨り憶ふ忘機、出處に陪し、自ら憐む何の力か繼いで翻飛す、那堪へん兩地離緒を生じ、蓬戶長扃行旅喧し」云、何の字を去るに僅に五字にして、便ち那の字を用ふ、王績の排律第三韻に、「經に移す何の處の竹ぞ、別に種う幾株の梅」云、第五韻に、「院果誰か先づ熟す、林花那ぞ後に開く」云、亦、何那復用す、李攀龍の「春色那ぞ堪へん愁裏の望、絨書何の意ぞ病中に聞く」云、一聯中に對用す、又李賀の「病骨猶ほ能く在り、人間底事無し、何ぞ須ひん牛馬に問ふを、拋擲して巢盧に任す」云、白居易の「孔窮底事に緣る、顏天何の辜か有る」云、亦た底何復用す、蓋妨げざるなり。

同訓字見一句中、如李白孤雲獨去閑、懸知樂客遙、李涉、永夜長相憶、許渾、路遠遙相認、賈島、桐竹遠庭匝、白居易、溪繞妓堂廻、乍到忽如歸、岑參、俯聽聞驚風、劉禹錫、作佛幾時成、員南溟、年和知歲稔、僧貫休、祇應唯道在、杜甫、天宇清霜淨、礎潤休全濕、柴門空閉鎖、松筠、江閣遙賓許、爲迎雲物不殊鄉、國異、孟浩然、向夕波搖明月動、劉長卿、卻使容華翻誤身、薛能、峨嵋乖約負、支郎、李紳、苛政尙存猶惕息、李山甫、玉桂影搖鳥鵲動、劉滄、一點青山翠色危、元稹、老去那能競底名、山遙遠樹纔成、點白居易、時呼張丈喚殷兄、非因斜日無由見、段文昌、正與休師方話舊、朱慶餘、解到上

同訓の字、一句中に見ゆ、李白の「孤雲獨り去て閑なり」、「懸に知る客を樂む遙なり」、李涉の「永夜長く相憶ふ」、許渾の「路遠くして遙に相認む」、賈島の「桐竹庭を透りて匝る」、白居易の「溪は妓堂を繞りて廻る」、「乍も到り忽ち歸るが如し」、岑參の「俯聽して驚風を聞く」、劉禹錫の「佛も作る幾時か成る」、員南溟の「年和き歳の稔るを知る」、僧貫休の「祇應に唯道の在るべし」、杜甫の「天宇清霜淨く」、「礎潤ひ全濕を休む」、「柴門空しく閑ちて松筠を鎖さす」、「江閣賓を邀へ爲に迎ふを許す」、「雲物殊ならず鄉國異なり」、孟浩然の「夕に向ひ波は搖き明月動く」、劉長卿の「卻て容華をして翻つて身を誤らしむ」、薛能の「峨嵋約に乖き支郎に負く」、李紳の「苛政尙ほ存し猶ほ惕息す」、李山甫の「玉桂影は搖きて鳥鵲動く」、劉滄の「一點の青山翠色危し」、元稹の「老去て那ぞ能く底の名を競はん」、「山は遙にして遠樹纔に點を成す」、白居易の「時に張丈を呼び殷兄を喚ぶ」、「斜日に因るに非ずんば見るに由無し」、段文昌の「正に休師と

頭能幾人張祐、妃子偷行上密隨、李商隱、  
 況是難逢值臘中、杜牧、投轄暫停留酒客、  
 許渾、夢裏還家不當歸、褚載、衣濕乍驚露、  
 霧露、皮日休、醉鄉無貨沒、人爭陸龜蒙、真  
 仙若降如相問、老僧成雙便作門、僧皎然、  
 柳巷任疎容、馬入齊己、閑居祇是但焚香、  
 翁卷、看松見鶴來、張耒、旅枕無眠夢客勞、  
 綠葉陰陰護翠枝、歐陽脩、繞郭雲烟匝幾  
 重、蘇軾、獨憑欄檻倚崔嵬、湖上青山翠作  
 堆、楊萬里、倦喚胡牀小住些、范成大、鶴鳴  
 喚歸斗未沒、姜夔、看見鷺黃上柳條、潘枋  
 不止但爭三十里、王琮、絕憐寒景太蕭條、  
 王穉登、雨暗湖昏不繫舟、趙訪、樓觀濕空  
 倚玉臺、皆似覺、意重要不害於理、抑亦可

夜航詩話卷之四

方に舊を話す」ミ、朱慶餘の「解いて上頭に到る能く幾人ぞ」。張祐の「妃子は偷行し上は密隨す」、李商隱の「況んや是れ逢ひ難く臘中に值ふ」、杜牧の「轄を投じ暫く停り酒客を留む」、許渾の「夢裏家に還り當に歸るべからず」、褚載の「衣は濕ひ乍驚く霧露に露ふを」、皮日休の「醉鄉貧無く人の争ふ没し」、陸龜蒙の「真仙若し降り如し相問はど」、老僧雙を成し便ち門こ作る」、僧皎然の「柳巷疎に任し馬を容れて入る」、齊己の「閑居祇是れ但香を焚く」、翁卷の「松を見て鶴の來るを見る」、張耒の「旅枕眠る無く客夢勞す」、綠葉陰々として翠枝を護る」、歐陽脩の「郭を繞る雲烟匝る幾重ぞ」、蘇軾の「獨り欄檻に憑り崔嵬に倚る」、湖上の青山翠、堆を作す」、楊萬里の「倦んで胡床を喚び小しく住るここ些」、范成大的「鶴は鳴き喚び歸り斗未だ没せず」、姜夔の「看見鷺黃の柳條に上るを」、潘枋の「止だ但、三十里を争ふのみならず」、王琮の「絶た憐む寒景太蕭條」、王穉登の「雨暗く湖昏くして舟を繫がす」、趙訪の「樓は空に憑り玉臺に倚るを觀る」ミ、皆意重るを覺ゆるに似たり、要は理に害せず、

見其所指義各有別矣。班史、谷永曰、陛下當盛壯之隆、枚乘曰、馬方駭鼓而驚、杜延年曰、晉獻被納、訪之譏、申生蒙無罪之辜、漢人文章亦有如此下語者、未必爲贅也、但梁元帝詩、斜陽落高春、既言斜陽、復用高春、頭上安頭、不啻贅也、至於謝莊夕天、霽晚氣、輕霞澄暮陰、一聯中三見晚意、無乃明人諛語所謂關門閉戶掩柴扉、一個孤僧獨自歸乎、如謝靈運、晚開夕颺、急晚見朝日、暎沈約、夕行聞夜鶴、晨征聽曉雞、楊用脩、辨其似復非復、吾未敢以爲然也、楊誠齋詩話載、孫仲益作、上梁文云、老蟾駕月上、千巖紫翠之間、一鳥呼風、嘯萬木丹青之表、周茂振曰、既呼又嘯、易嘯爲響、

抑も亦其指す所の義各、別あるを見る可し、班史に谷永曰く、陛下盛壯の隆に當る、枚乘曰く、馬方に鼓に駭きて驚く、杜延年曰、晉獻は誘を納るの譏を被り、申生は罪無きの辜を蒙る、漢人の文章も亦此の如く語を下す者あり、未だ必しも贅を爲さざるなり、但、梁の元帝の詩に、「斜陽は高春に落つ」と、既に斜陽と言ひ、復た高春を用ゆ、頭に安ず、疊に贅なるのみならず、謝莊の「夕天晚氣霽れ、輕霞暮陰に澄む」に至りては、一聯の中に三たび晚意を見る、乃ち明人の諛語に謂はるる「門を關ち戸を閉ち柴扉を掩ひ、一個の孤僧獨り自ら歸る」といふものなる無からんか、謝靈運の「曉に夕颺の急なるを聞き、晚に朝日の暎を見る」、沈約の「夕に行きて夜鶴を聞き、晨に征きて曉雞を聞く」の如きは、楊用脩は其復に似て復に非ざるを辯ずれども、吾は未だ敢て以て然りと爲さざるなり。

楊誠齋詩話に載す、孫仲益、上梁文を作りて云ふ、老蟾月に駕し、千巖紫翠の間に上り、一鳥風に呼び、萬木丹青の表に嘯く、周茂振曰、既に呼び又嘯く、嘯を易へて響と爲さん、此れ

此宜鑒也。

用事失照管、貽笑不小、故雖爛熟、亦須檢看、西清詩話云、用事雖了、在心目間、亦當就時討用、則記牢而不誤、端格言也、李義山爲詩文、座上書冊、排比滿前、以資考用、時人謂之類祭魚、楊大年爲文章、所用故事、常令子弟諸生檢討出處、每段用小片紙錄之、文旣成、則粘綴所錄而蓄之、時人謂之衲被、歐陽永叔爲文、雖至熟故事、亦檢出處、然後下筆、黃魯直亦自言、每作詩文、不厭檢閱、余嘗以爲名匠製作、縱手揮霍、取諸腹笥而已、不如我輩、每作一詩一文、必將此題之書籍、無所不搜焉、及見四君子之勤、亦未必爲羞也。

宜しく鑒むべきなり。

事を用ひて照管を失へは笑を貽すこと小ならず、故に爛熟すも雖、亦須く檢看すべし、西清詩話に云ふ、事を用ひ心目間に在らず、雖、亦當に時に就て討用すべし、則記すること半くして誤らず、端に格言なり、李義山の詩文を爲るや、座上書冊排比し前に滿ち、以て考用に資す、時人之を類祭魚と謂ふ、楊大年、文章を爲る、用ふる所の故事は、常に子弟諸生をして出處を檢討せしむ、每段、小片紙を用ひて之を録す、文旣に成れば、則ち録する所を粘綴して之を蓄ふ、時人之を衲被と謂ふ、歐陽永叔の文を爲る、至熟の故事と雖、亦出處を檢して、然る後に筆を下す、黃魯直も亦自ら言ふ、詩文を作る毎に、檢閱を厭はず、余嘗て以爲らく、名匠の製作、手を縱にして揮霍し、諸を腹笥に取るのみ、我輩一詩一文を作る毎に、必ず此題の書籍を將りて、搜らざる所無きが如きにあらず、四君子の勤むるを見るに及び、亦未だ必ずしも羞むべきなるなり。

晏子以二桃殺三士事本荒唐、後人演爲梁父吟、尤無意味、而武侯好吟之、殊不可解也、蓋古詩有梁父吟者、想亦採薇歌之類、故武侯好吟之以遺時世之感、後世亡其辭、只傳其名爾、於是好事者取晏子春秋事、僞作以欺世也、或以爲武侯自作、讀書之不精耳、傳文明言好爲梁父吟、其爲古歌審矣、彼其出師二表之手、雖隄中、豈作如是惡詩哉。

王元美寄余德甫詩、身在青氈偷不惜、酒酣黃犢坐何妨、此用王荆公眠分黃犢草、坐占白鷗沙之句、歇後語也、左祖明詩者、絕不見宋詩、故是等句、自然不能解也、然直以黃犢爲草、亦英雄欺人耳。

晏子、二桃を以て三士を殺す、事は本も荒唐なり、後人演して梁父の吟を爲す、尤も意味なし、而して武侯好んで之を吟す、殊に解す可からざるなり、蓋古詩に梁父の吟といふ者あり、想ふに亦採薇歌の類なり、故に武侯好んで之を吟じ、以て時世の感を遺る、後世其辭を亡し、只、其名を傳ふるのみ、是に於て事を好む者、晏子春秋の事を取り、僞作して以て世を欺くなり、或は以て武侯の自作を爲すは、書を讀むの精からざるのみ、傳文明に好んで梁父の吟を爲すと言ふ、其の古歌たる審なり、彼、其の出師二表の手、隄中を雖、豈に是の如き惡詩を作らんや。

王元美の余德甫に寄する詩に、「身は在り青氈あざ偷ぬすまるも惜しからず、酒酣にして黃犢坐する何ぞ妨げん」と、此れ王荆公の「眠りは分つ黃犢の草、坐は占白鷗の沙」の句を用ふ、歇後の語なり、明詩に左祖する者は、絶えて宋詩を見ず、故に是等の句は自然解する能はざるなり、然れども、直に黃犢を以て草と爲すも、亦英雄人を欺くののみ。

佩文韻府、往往間雜叶韻、或取仄音爲平聲、西人但以朝廷所撰、敝衽而莫敢議、拈詩韻者、不可不辨也、又典故字面、宜審舉出處、或只引詩句而已、擇焉不精、語焉不詳、連城之瑕、爲可惜耳。

張平子歸田賦、仲春令月、時和氣清、明指二月、謝康樂因之、故曰、首夏猶清和、芳草亦未歇、言時序四月猶餘二月景象、唐人誤刪去猶字、而以四月爲清和、白香山、孟夏清和月、東都開散官、錢仲文、花萼敗春多寂寞、葉陰迎夏已清和、皮襲美、曉入清和、尙袷衣、夏陰初合掩雙扉、是也、司馬溫公、四月清和雨乍晴、亦襲唐詩之誤耳、非自溫公始也、或曰、何遜詩、麥候始清和、乃

佩文韻府は、往往叶韻を間雜し、或は仄音を取りて平聲を爲す。西人但し朝廷の撰する所なるを以て、衽を敎めて敢て議する莫し、詩韻を拈る者は、辨せざる可からざるなり、又典故の字面は、宜しく審に出處を擧ぐべし、或は只詩句を引くのみ、擇んで精からず、語つて詳ならず、連城の瑕、惜む可しを爲すのみ。

張平子の歸田賦に、仲春令月、時和氣清と、明に二月を指すなり、謝康樂之に因る、故に曰、首夏猶は清和、芳草も亦未だ歇まず、時序に四月は猶ほ二月の景象を餘すを言ふ、唐人誤りて猶の字を刪去し、而して四月を以て清和と爲す、白香山の「孟夏清和の月、東都開散の官」、錢仲文の「花萼春に敗れて多くは寂寞、葉陰夏を迎へて已に清和」、皮襲美の「曉清和に入りて尙は袷衣、夏陰初めて合して雙扉を掩ふ」と、是れなり、司馬溫公「四月清和雨乍晴、亦襲唐詩の誤りを襲ふのみ、温公より始るに非ざるなり、或ひは曰、何遜の詩に、「麥候始めて清和」と、乃

謂五月、蓋不必指定時節、泛言春夏之間、不寒不熱之候耳、楊萬里首夏卽事、不寒不熱恰清和、是也。

西土之俗甚好華飾、婦人居樓、率施青漆、故謂之青樓、後世遂爲妓館之稱、陳思王美女篇、青樓臨大路、晉樂府西洲曲、望郎上青樓、駱賓王帝京篇、大道青樓十二重、竝謂姬妾所居、樂府青樓曲、亦詠少婦戀夫已、後人作此曲、竟賦娼女事、失其旨矣、梁劉邈詩、娼女不勝愁、結束下青樓、殆稱妓居之始、李白對舞青樓妓、杜牧、贏得青樓薄倖名、皆專稱北里也。

蒼謂灰慘色、與青綠義異、蒼蒼竹蒼蒼等語、皆有黯慘之意、故壽人詩忌用之、蒼

ち五月を謂ふ、蓋、必しも時節を指定せず、泛く春夏の間、寒からず熱からざるの候を言ふのみ、楊萬里の首夏卽事に、「寒からず熱からず恰も清和」と、是れなり。

西土の俗甚た華飾を好む、婦人居る所の樓、率ね青漆を施す、故に之を青樓と謂ふ、後世遂に妓館の稱と爲る、陳思王の美女篇に、「青樓大路に臨む」、晉樂府西洲曲に、「郎を望み青樓に上る」、駱賓王の帝京篇に、「大道青樓十二重」と、竝に姬妾の居る所を謂ふ、樂府青樓曲も亦少婦の夫を戀ふを詠するのみ、後人此曲を作り、竟に娼女の事を賦すは、其旨を失へり、梁の劉邈の詩に「娼女愁に勝へず、結束して青樓を下る」と、殆んど妓居を稱するの始なり、李白の「對舞す青樓の妓」、杜牧の「贏得たり青樓薄倖の名」、皆専ら北里を稱するなり。

蒼は灰慘色を謂ふ、青綠と義異れり、蒼蒼竹蒼々等の語は、皆黯慘の意あり、故に人を壽する詩に之を用ゆるを忌む、蒼髮蒼

髣蒼顏竝謂老衰之色、尤宜避也、詩秦風  
 蕭蕭蒼蒼白露爲霜、釋文云、蒼蒼物老之  
 狀、蓋光澤盡而蒼白也、故柳文蠅鞭說、煥  
 湯以濯之則速、然枯蒼然白、劉訥言、諧噱  
 錄、齊主客郎中李恕謂盧詢祖曰、盧郎聰  
 明必不壽、答曰、見丈人蒼蒼在髣、差以自  
 安、歐陽詹山中老僧詩、秋深頭冷不能剃、  
 白黑蒼然髮到眉、劉克莊、心向奏篇尤暴  
 白、髮因時事欲蒼髣、宋景文詩、十八年前  
 玷玉堂、當時綠髣已蒼蒼、其義可見、已蒼  
 鼠蒼、皆謂老物、醫書格致餘論、人之色白  
 不若黑、嫩不若蒼、是蒼與嫩反對、所以有  
 嘲疆之意也、聊齋志異、九姑之聲清以越、  
 六姑之聲緩以蒼、謂老實也、又酉陽雜俎、

顔は竝に老衰の色を謂ふ、尤も宜く避くべし、詩の秦風に、「蕭  
 蕭蒼々、白露霜と爲る」と、釋文に云ふ、蒼々は物老いるの状な  
 りと蓋、光澤盡きて蒼白なり、故に柳文蠅鞭の説に、湯に煥し以  
 て之を濯へば、則ち速、然れども枯れて蒼然として白しと、劉訥  
 言の諧噱録に、齊主客郎中李恕、盧詢祖に謂つて曰、盧郎聰明必  
 壽ならず、答へて曰、丈人蒼々の髣に在るを見て、差、以て自ら  
 安すと、歐陽詹の山中老僧の詩に、「秋深く頭冷にして剃る能は  
 ず、白黒蒼然として髮、眉に至る」と、劉克莊の「心、奏篇に向つて  
 尤も暴白、髮は時事に因りて蒼髣ならん」と欲す、宋景文の詩  
 に、「十八年前、玉堂に玷す、當時綠髣已に蒼々」と、其義見る可  
 きのみ、蒼鼠蒼、皆老物を謂ふ、醫書の格致餘論に、人の色白  
 きは黒きに若かず、嫩は蒼に若かず、是れ蒼と嫩と反對なり、  
 嘲疆の意有る所以なり、聊齋志異に、九姑の聲、清にして以て  
 越、六姑の聲、緩にして以て蒼と、老實を謂ふなり、又酉陽雜俎  
 に、狼の大き狗如くにして蒼色と、蒼馬・蒼牛・蒼狗・蒼蠅、皆此

狼大如狗蒼色蒼馬蒼牛蒼狗蒼蠅皆因  
 此可類推也。蒼蠅與青蠅別、灰色無光最大、青蠅深碧含光、俗並稱爲蒼蠅。  
 春色曰青青謂嫩鮮也、秋色曰蒼蒼謂慘  
 澹也、謝眺詩寒城一以眺、平楚正蒼然、岑  
 參詩秋色從西來蒼然滿關中、宋人梅花  
 詩北風萬木正蒼蒼、獨占新春第一芳、可  
 見正與青青相反、故鬱蒼與鬱蔥其義大  
 異、猶杳之與迴也、夜蒼蒼月蒼蒼謂物色  
 不分明、猶云渺茫也、太白詩愁雲蒼慘寒  
 氣多、柳文西山記蒼然暮色自遠而至、並  
 謂含愁黯澹也、陳子昂野樹蒼烟斷、津樓  
 晚氣孤、蒼烟生烟也、劉長卿楚國蒼山古  
 幽州白日寒、蒼山寒山也、要之皆蒼老之  
 義、又爾雅釋天、春爲蒼天、亦謂其杳靄也、

に因りて類推す可し。蒼蠅は青蠅と別なり、灰色にして光無く最  
 も大、青蠅は深碧にして光を含む俗並に稱  
 して蒼蠅  
 と爲す。

春色を青青と曰ふ、嫩鮮を謂ふなり、秋色を蒼蒼と曰ふ、慘澹を  
 謂ふなり、謝眺の詩に、「寒城一たび以て眺む、平楚正に蒼然」、  
 岑參の詩に、「秋色西より來り、蒼然として關中に滿つ」、宋人梅  
 花の詩に、「北風萬木正に蒼蒼、獨り占む新春第一の芳」、見る  
 可し正に青青と相反す、故に鬱蒼は鬱蒼と其の義大に異れり、  
 猶ほ杳と迴とのことし、夜蒼々、月蒼々、物色の分明ならざるを  
 謂ふ、猶ほ渺茫と云ふがことし、太白の詩に、「愁雲蒼慘として  
 寒氣多し」、柳文西山の記に、蒼然たる暮色遠きよりして至  
 ること、並に愁を含みて黯澹たるを謂ふなり、陳子昂の「野樹蒼烟  
 斷え、津樓晚氣孤なり」、蒼烟は生烟なり、劉長卿の「楚國蒼山  
 古り、幽州白日寒し」、蒼山は寒山なり、之を要するに皆蒼老  
 の義なり、又爾雅の釋天に、春を蒼天と爲す、亦其杳靄たるを  
 謂ふなり。

萬歲之稱、起於周末、當時慶賀之際、上下通稱之、猶自稱朕尊卑共之、宋許觀東齋記事、歷舉其語、文繁不錄、自漢以來、始專爲至尊之祝、人臣不得稱萬歲、凡王侯以下皆稱千歲、庶人則稱百廿歲矣、蓋自漢武山呼故事、遂獨祝天子、下乃避之也、後漢書韓棧傳、和帝幸長安、大將軍竇憲來會、時憲威振天下、尙書以下議欲拜之、伏稱萬歲、棧正色曰、夫上交不諂、下交不驕、禮無人臣稱萬歲之制、議者皆慙而止、明末逆璫魏忠賢、權傾朝廷、諛者稱九千九百歲、可見雖竇魏之勢、尙不得犯也、稱謂之分、其嚴矣乎、金章宗時、禁伶人不得以歷代帝王爲戲、及稱萬歲、犯者抵罪、是大

萬歲の稱は周末に起る、當時慶賀の際、上下通じて之を稱す、猶ほ自ら朕と稱し、尊卑之を共にするがごとし、宋許觀の東齋記事に其語を歴舉す、文繁ければ録せず、漢より以來、始めて專はら至尊の祝と爲り、人臣は萬歲と稱するを得ず、凡そ王侯以下皆千歲と稱す、庶人は則ち百二十歲と稱す、蓋漢武山呼の故事より、遂に獨り天子を祝し、下は乃ち之を避くるなり、後漢書韓棧傳に、和帝、長安に幸す、大將軍竇憲來り會す、時に憲の威天下に振ふ、尙書以下之を拜し、伏して萬歲と稱せんを欲するを議す、棧色を正して曰、夫れ上交は諂はず、下交は驕れず、禮に人臣萬歲と稱するの制無しと、議者皆慙ちて止む、明末逆璫魏忠賢、權、朝廷を傾く、諛者九千九百歲と稱す、見るべし、竇魏の勢と雖、尙ほ犯すを得ず、稱謂の分、其れ嚴なるかな、金の章宗の時に、伶人に禁じ、歷代帝王を以て戲と爲し、及び萬歲と稱するを得ざらしめ、犯す者は罪に抵る、是れ大尊の壽言は、戲謂と雖、敢て瀆さざるなり、馮異・馬援・王望等の傳中に軍士皆萬

尊壽言、雖戲謔不敢瀆也、如馮異馬援王望等傳、中軍士皆稱萬歲、則軍旅之事爲國家稱賀也、或因此以爲人臣不嫌稱萬歲、則不解事之甚矣、莊綽雞肋編云、廣南里俗、歲除爆竹、軍民環聚、大呼萬歲、尤可駭也、蓋爆竹呼萬歲、其義效軍中之壽、然猶以爲可駭矣、此方人作壽詞、或不諱其義、動敢稱萬歲、不學之過也、但萬年萬壽似不妨、陳思王筮篋引、主稱千金壽、寶奉萬年酬、謂寶明祝我、潘岳閑居賦稱萬壽、以獻觴、謂上父母壽、此例頗多、不能遍舉、故事譚載、大中臣能宣、人日吏部親王第咏松、一座推稱擅場、及還家、向父賴基誦之、有萬歲之語、大被噴云、今世稱國雅宗

歳を稱するが如きは、則ち軍旅の事にして、國家の爲に稱賀するなり、或は此に因り、以て人臣も萬歳を稱するを嫌はずと爲すは、則ち事を解せざるの甚しきなり、莊綽の雞肋編に云ふ、廣南の里俗に、歳除爆竹し、軍民環聚して、大に萬歳を呼ぶ、尤も駭く可しと、蓋爆竹して萬歳を呼ぶは、其義、軍中の壽に效ふ、然れども猶ほ以て駭く可しと爲す、此方の人、壽詞を作り、或は其義を諱らず、動もすれば敢て萬歳を稱す、不學の過なり、但、萬年萬壽は妨げざるに似たり、陳思王の筮篋引に、主は千金の壽を稱す、寶に萬年の酬を奉ずと、寶明我を祝するを謂ふ、潘岳の閑居の賦に、萬壽を稱し以て觴を獻ずと、父母の壽を上るを謂ふ、此の例頗る多し、舉ぐるべき能はず。

故事譚に載す、大中臣能宣、人日に吏部親王の第に松を咏ず、一座推して擅揚を稱す、家に還るに及び、父賴基に向つて之を誦す、萬歳の語あり、大に噴るるに云ふ、今世國雅の宗匠を稱する

匠者猶或犯此僭何耶。

顏氏家訓云、北面事親、別舅擣渭陽之詠、堂上養老、送兄賦、柏山之悲、皆大失也、陳思王武帝誄、遂深永蟄之思、潘岳悼亡賦、乃愴手澤之遺、是方父於蟲、匹婦於考也、舉此一隅、觸塗宜慎、夫名義之嚴、在家庭之間、不可苟且也、況王公侯伯之際、尤宜名正言順、豈可率爾下筆乎、余爲是事、三令五申久矣。

李綽尙書故實云、今謂進士登第爲遷鶯者久矣、蓋自伐木詩、伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶、出自幽谷、遷于喬木、又曰、嚶其鳴矣、求其友聲、竝無鶯字、頃歲省試、早鶯求友詩、又鶯出谷詩、別書固無證據、豈非誤歟、余按、

者も猶ほ或は此僭を犯すは、何ぞや。

顏氏家訓に云、北面して親に事へ、舅に別れて渭陽の詠を擣し、堂上に老を養ひ、兄を送りて柏山の悲を賦す、皆大失なり、陳思王の武帝の誄に、「遂に永蟄の思を深くす」、潘岳の悼亡の賦に、「乃ち手澤の遺を愴む」、是れ父を蟲に方べ、婦を考に匹ふなり、此一隅を舉ぐ、塗に觸れて宜く慎むべし、夫れ名義の嚴なる、家庭の間に在りても、苟且にす可からず、況んや王公侯伯の際は、尤も宜しく名正しく言順ふべし、豈、率爾に筆を下すべけんや、余是の事の爲めに三令五申する、こゝ久し。

李綽の尙書故實に云、今進士の登第を謂ふて遷鶯を爲す、こゝ久し、蓋伐木の詩よりす、「木を伐る丁々、鳥鳴く嚶々、幽谷より出で、喬木に遷る」、又曰、「嚶として鳴く、其友を求むる聲」、竝に鶯の字無し、頃歲省試に、早鶯、友を求むる詩、又鶯出谷を出づる詩、別書固より證據無し、豈誤に非ずや、余按するに伐

伐木詩、初不指其何鳥也、凡鳥朋類相喚者亦多矣、不獨鶯也、然出谷遷喬、似謂鶯爾、故後人遂以爲鶯也、荳草因詩注北堂而傳、會于母、高唐雲雨爲楚襄王事、陽春白雪稱寡和之歌、凡如是類、皆訛以襲訛可也。

杜詩奉使虛隨八月槎、唐彥謙亦云、烟橫博望乘槎水、此蓋唐人所慣用、然據史記漢書、竝無張騫乘槎之事、張華博物志、止載近世有人居海上、每年八月見槎來、不<sub>レ</sub>失期、遂齋糧乘之、到天河、宗懷作荆楚歲時記、乃附會窮河源、與到天河、以爲張騫事、後人遂襲其杜撰耳、尙書故實記、司馬道士承禎白雲車事、末云、至文宗朝、并張

木の詩初めより其何の鳥たるを指さず、凡そ鳥、朋類相喚ぶ者亦多し、獨り鶯のみならざるなり、然れども谷を出で喬に遷るは、鶯を謂ふに似たり、故に後人遂に以て鶯を爲すなり、荳草は詩注の北堂に因りて、母に傳會す、高唐雲雨は楚の襄王の事たり、陽春白雪は、寡和の歌を稱す、凡そ是の如きの類、皆訛以て訛を襲ふて、可なり。

杜詩に「使を奉じ虚しく隨ふ八月の槎」云、唐彥謙も亦云、「烟は横ふ博望の槎に乗る水」云、此れ蓋唐人の慣用する所、然れども史記漢書に據るに、竝に張騫槎に乗るの事無し、張華の博物志に「<sup>た</sup>近世人あり海上に居り、毎年八月槎の來るを見るに、期を失はず、遂に糧を齎<sup>かま</sup>し之に乗り天河に到るを載す、宗懷、荆楚歲時記を作り、乃ち河源を窮むるに、天河に到るを附會し、以て張騫の事爲す、後人遂に其杜撰を襲ふのみ、尙書故實に、司馬道士承禎、白雲車の事を記す、末に云、文宗の朝に至り、張騫

鷺海槎同取入内、不知是物果爲何等、殊可怪也。

清人王家駿詩、衣因亂疊痕常縞、書爲頻翻卷不齊、宛然諸生舍中光景、金步元舉詩、囊空漸覺錢餘賸、衣敝翻饒虱滿身、抑更甚焉。

明何仲默謂、宋人尙不能解唐人詩、以之解三百篇、真是枉事、善哉其言之也、蓋詩主於性情、而宋儒以理說、故取風人妙義、牽強傅會、唐賢良工苦心、往往埋沒理窟矣、其解三百篇、不免於高叟之固不足怪也。

蕉中遨頭日祭少陵詩序曰、四月十九日、浣花遨頭日也、按譜大曆五年、公年五十

の海槎を并せ、同じく取りて内に入る、知らず是の物果して何等爲すや、殊に怪む可し。

清人王家駿の詩に、「衣は亂疊に因り痕常に縞し、書は頻翻の爲めに卷齊はずし」、宛然諸生舍中の光景なり、金の步元舉の詩に、「囊は空しく漸く覺ゆ錢・賸を餘すを、衣は敝れて翻つて饒し、身に滿つし」、抑も更に甚し。

明の何仲默謂ふ、宋人尙ほ唐人の詩を解する能はず、之を以て三百篇を解す、眞に是れ枉事と、善いかな、其の之を言ふや、蓋、詩は性情を主とす、而して宋儒は理を以て説く、故に風人の妙義を取り、牽強傅會す、唐賢良工の苦心、往々理窟に埋沒せり、其三百篇を解する、高叟の固を免れざる、怪むに足らざるなり。

蕉中遨頭の日に少陵を祭る詩の序に曰、四月十九日、浣花遨頭日なり、譜を按するに、大曆五年、公年五十九、春、潭州に在り、夏

九、春在潭州、夏四月避臧玠亂入衡州、欲如柳州、至耒陽暴卒、則遊頭之日、疑是忌辰也、余院藏公畫像是日設供祭之、此說臆度失考、按蜀記梵安寺乃杜甫舊宅、在浣花、去城十里、大歷中、節度使崔寧妻冀國夫人任氏亦居之、後捨爲寺、人爲立廟于其中、每歲四月十九日、衆遊樂于此、又費著歲華紀麗譜、四月十九日浣花、佑聖夫人誕日也、太守出窄橋門、至梵安寺、謁夫人祠、就宴于寺之設廳、既宴登舟、觀諸軍騎射、倡樂導前、泝流至百花潭、觀水嬉競渡、官舫民船乘流上下、或暮霽水濱、以事遊賞、最爲出郊之勝、浣花遊頭由緣如此、少陵之卒、在十月之交、余詳諸杜

四月臧玠の亂を避け衡州に入り、柳州に如かんぞ欲し、耒陽に至り暴に卒す、則ち遊頭の日は、疑ふらくば是忌辰なり、余の院に公の畫像を藏す、是日供を設け之を祭るこ、此說臆度にして考を失す、按ずるに蜀記に、梵安寺は乃ち杜甫の舊宅にして、浣花に在り、城を去る十里、大歷中、節度使崔寧の妻冀國夫人任氏も亦之に居る、後捨て、寺を爲す、人爲に廟を其中に立て、每歲四月十九日、凡そ三日、衆此に遊樂すこ、又費著の歲華紀麗譜に、四月十九日浣花は、佑聖夫人の誕日なり、太守、窄橋門を出で、梵安寺に至り、夫人の祠に謁し、就て寺の設廳に宴す、既に宴し舟に登り、諸軍の騎射を觀る、倡樂前に導き、流に泝り、百花潭に至り、水嬉競渡を觀る、官舫民船流に乗じて上下し、或は水濱に暮霽し、以て遊賞を事す、最も郊を出づるの勝たり、浣花遊頭の由緣此の如し、少陵の卒は十月の交に在り、余、諸を杜律の解に詳にす、其證尤も明なり、文海披沙に載す、陳子昂は

律解其證尤明、文海披沙載、陳子昂、閬州人、州有陳拾遺廟、訛爲十姨、遂更廟貌爲婦人像、崇奉甚嚴、温州有杜拾遺廟、亦訛爲杜十姨、塑婦人像、又以五髭鬚相公無婦、移以配之、五髭鬚者、卽伍子胥也、拾遺之官誤、人身後如此、子昂屈爲婦人、猶可、獨奈何令子美爲鴟夷子皮妾也、今以任夫人誕日爲公忌辰祭之、不亦可笑哉。

五雜俎曰、牛女之事、始於齊諧記、武丁之妄言、成於博物志、乘槎之浪說、千載之下、婦人女子傳爲口實、可也、文人墨士、乃習爲常語、使天上列宿、橫被污、不亦可怪之甚耶、余少讀斯語、絕不咏二星事、老杜已自洞曉詩云、牽牛出河西、織女處其東、

閬州の人なり、州に陳拾遺の廟あり、訛りて十姨を爲し、遂に廟貌を更め、婦人の像を爲し、崇奉甚だ嚴なり、温州に杜拾遺の廟あり、亦訛りて杜十姨を爲し、婦人の像を塑し、又、五髭鬚相公の婦無きを以て、移して之に配す、五髭鬚とは、卽ち伍子胥なり、拾遺の官、人の身後を誤ること此の如し、子昂屈して婦人を爲る、猶可なり、獨り奈何んぞ子美をして鴟夷子皮の妾たらしむるや、今、任夫人の誕日を以て、公の忌辰を爲して之を祭る、亦笑ふ可きにあらずや。

五雜俎に曰、牛女の事は、齊諧記、武丁の妄言に始り、博物志の槎に乗るの浪説に成る、千載の下、婦人女子傳へて口實を爲すは可なり、文人墨士乃を習ひて常語を爲し、天上の列宿をして横に汚穢を被らしむ、亦怪な可きの甚しきならずや、余少くして斯の語を讀み、絶えて二星の事を咏せず、老杜已自洞曉の詩に云、牽牛河西に出で、織女其東に處り、萬古永く相望む、

萬古永相望、七夕誰見同、神光竟難候、此事終朦朧、颯然精靈合、何必秋遂通、又紀貫之歌、麻固土加斗、彌禮土慕彌越奴、他那巴佗巴、速羅爾那氣奈農、他迭屢南屢遍施、皆譏世俗之妄也。

仁齋先生七夕歌、左加施羅爾、他箇伊比速免迭、他那巴佗農、古餘比那氣奈遠、速羅爾他追羅牟、辭婉趣幽、更優於紀使君、信豪傑之士、無所不能哉。

蠶海錄云、天之色蒼蒼然也、而稱曰丹青絳霄、河漢曰絳河、蓋觀天以北極爲標準、仰而見之者、皆在北極之南、故借南之色以爲喻、五雜俎非之謂、天無色、借日以爲色、故稱丹青者、從日言耳、不然彼稱青

七夕誰れか同を見ん、神光竟に候ひ難く、此事終に朦朧、颯然として、精靈合す、何ぞ必しも秋遂に通せん、又紀の貫之の歌に「麻固土加斗、彌禮土慕彌越奴、他那巴佗巴、速羅爾那氣奈農、他迭屢南屢遍施」ミ、皆世俗の妄を譏るなり。

仁齋先生七夕の歌に「左加施羅爾、他箇伊比速免迭、他那巴佗農、古餘比那氣奈遠、速羅爾他追羅牟」ミ、辭婉にして趣幽に、更に紀使君に優る、信に豪傑の士、能せざる所無きかな。

蠶海錄に云ふ、天の色は蒼々然たり、而して稱して丹青絳霄、曰ひ、河漢を絳河、曰ふは、蓋、天を觀るに北極を以て標準と爲し、仰ぎて之を見る者は、皆北極の南に在り、故に南の色を借りて以て喻と爲す、五雜俎に之を非として謂ふ、天には色無し、日を借りて以て色と爲す、故に丹青を稱するものは、日に從ひて言ふのみ、然らずんば、彼の青天銀漢と稱するものは、又豈

天銀漢者、又豈指北斗之北哉、余謂此亦以五十步笑百步者也、蓋丹霄絳河、稱其鮮明、猶紅泉紅塵之紅、紫虛紫淵之紫耳。知章騎馬似乘綰、眼花落井水底眠、言醉墜井中就便安眠也、蓋井幸寬廣者、賴水淺得不溺、井底坐水以睡、故曰「水底眠、不以辭害意可也、京師森維良、豪飲無量、以篆刻遊四方、嘗在讚之丸龜、夜醉歸、墜橋岸有古松、臨水橫出、繚枝糾輪、平如展篋、賴爲其所承、就便熟睡、及旦、人見大驚、喚醒而救之、徵松幾飼魚、歎矣、故余贈維良詩有「半宵松上眠之句、此亦不知其樹之狀、則謂松上安可臥耶、如曲阜勝果寺大井、圍徑六十丈、見元人楊奐東游記、措大

夜航詩話卷之四

北斗の北を指さんやと、余謂ふ此れも亦五十歩を以て百歩を笑ふ者なり、蓋、丹霄絳河は、其鮮明を稱す、猶ほ紅泉紅塵の紅、紫虛紫淵の紫のごときのみ。

「知章、馬に騎る船に乗るに似たり、眼花、井に落ちて水底に眠る」と、醉ふて井中に墜ち、就いて便ち安眠するを言ふなり、蓋、井幸に寬廣なる者にして、賴に水淺くして溺れざるを得たり、井底水に坐して以て睡る、故に水底に眠ると曰ふなり、醉を以て我を害せずして可なり、京師の森維良、豪飲量無し、篆刻を以て四方に遊ぶ、嘗て讚の丸龜に在り、夜醉ふて歸り、橋より墜つ、岸に古松あり、水に臨みて横出し、繚枝糾輪、平なること篋を展ぶるが如し、賴に其れが爲めに承けられ、就いて便ち熟睡す、旦に及び人見て大に驚き、喚び醒まして之を救へり、松微くんば、幾んど魚鱗に飼せん、故に余、維良に贈る詩に「半宵松上に眠る」の句あり、此れも亦其樹の狀を知らずんば、則ち謂ふ松上安んぞ臥す可けんやと、曲阜の勝果寺の大井の如き、圍徑六十丈

眼孔不宏、所謂蟹螯擬甲營穴、以爲凡井皆僅容身、故異議紛紜、真井蛙之見矣、五雜俎云、武帝如廁見衛青解者、必曲爲之說、此殊可笑、史之記此、政甚言帝之慢大臣、以見其敬黜耳、若非溷廁、史何必書衛青、公主馬前奴也、官卽富貴、帝狎之久矣、北齊文宣令宰相楊愔進廁籌、武帝之如廁見大將軍、亦何足怪、石崇廁上有絳紗帳、大牀茵蔕甚麗、兩婢持香囊、則帝王之廁可知、豈比窮措大糞穢狼籍蠅蛆縱橫、而不可屈大將軍一見乎、以說類附錄之、亦可以發矣。

詩家稱武藏爲武昌武陵、尤爲不倫、前已言之、元人攜李願淵白恃才傲物、嘗入京

ま、元人楊奐の東游記に見ゆ、措大眼孔まろ宏からず、謂はゆる蟹螯、甲を擬し穴を營み、以爲らく凡そ井は皆僅に身を容るる、故に異議紛紜たり、真に井蛙の見なり、五雜俎に云、武帝廁に如き衛青を見る、解者必ず曲けて之が説を爲す、此れ殊に笑ふべし、史の此を記す、政に甚しく帝の大臣を慢するを言ひ、以て其の黜を敬するを見はすのみ、若し溷廁に非ずんば、史何ぞ必ずしも書せん、衛青は公主の馬前の奴なり、官は卽ち富貴なるも、帝之に狎るゝ久し、北齊の文宣、宰相楊愔に廁籌を進めしむ、武帝の廁に如き、大將軍を見るも、亦何ぞ怪むに足りん、石崇廁上に絳紗帳、大茵蔕ありて、甚だ麗し、兩婢香囊を持す、則ち帝王の廁知るべし、豈窮措大の糞穢狼籍蠅蛆縱横するに比し、而して大將軍の一見を屈す可からざらんや、説の類するを以て之を附録す、亦以て發すべし。

詩家、武藏を稱して武昌、武陵と爲す、尤も不倫と爲す、前已に之を言へり、元人、攜李の願淵白、才を恃み物に傲る、嘗て京に

獻燕都賦、輸長元復初不喜曰、今大朝、四海一統、六合一家、燕蓋昔時戰國名、何燕之稱淵白慚恨而歸、見輟耕錄、夫燕本北京舊名、然猶嫌之、其可以異邦邊疆小邑、而稱我朝主大都也哉、明王鑿修姑蘇志、成楊循吉曰、志修于本朝、當稱蘇州姑蘇、吳王臺名、豈可以此名志乎、鑿大稱善、驟改之、其不可亂如是、況妄肖漢士擬其地名乎。

邵康節云、富貴如將、智力求、仲尼年少合封侯、世人不解青天意、空使身心半夜愁、蘇文忠公云、耕田欲雨刈欲晴、去得順風來者怨若使、人人禱輒得、造物應須日千變、二詩可作對軸、爲合錄之、嘗見荊州記

入り燕都の賦を獻す、輸長元復、初め喜ばずして曰、今大朝は、四海一統、六合一家、燕は蓋昔時戰國の名なり、何ぞ燕を之れ稱せん、淵白慚恨して歸る、輟耕錄に見ゆ、夫れ燕は本北京の舊名なり、然れども猶ほ之を嫌ふ、其れ異邦の邊疆の小邑を以て我が朝主の大都を稱す可けんや、明の王鑿、姑蘇志を修す、成楊循吉曰、志、本朝に修す、當に蘇州と稱すべし、姑蘇は吳王の臺の名なり、豈此を以て志に名く可けんや、鑿大に善しと稱し、驟に之を改む、其亂る可からざる是の如し、況や妄に漢士に肖せ、其地名に擬するをや。

邵康節云、「富貴如し智力を將て求めば、仲尼年少合さし侯に封ぜらるべし、世人青天の意を解せず、空しく身心をして半夜に愁へしむ」と、蘇文忠公云、「田を耕すに雨を欲し刈るに晴を欲す、去るに順風を得ば來る者は怨む、若し人々をして禱りて輒ち得しめば、造物應に須らく日に千變すべし」と、二詩對軸と作す可し、爲に之を合録す、嘗て荊州記を見るに、云ふ、宮亭湖廟

云、宮亭湖廟神、能使湖中分風、而帆南北、亦希有之事也。

程伊川云、某素不作詩、亦非是禁止不作、但不欲爲此閑言語、且如今稱能詩、無如杜甫、如云穿花蛺蝶深深見、點水蜻蜓款款飛、如此閑言語、道出做甚、某所以不曾作詩、此與吹皺一池春水、干卿何事、同一沒趣人、頭巾氣極矣、朱子則不然、編小學書、初取樂府杜詩、其答劉子澄謂、古樂府及杜子美詩、可取者多、令其喜諷咏、易入心、最爲有益、今本無載、豈憚煩而刪之歟、平生與楊誠齋陸放翁吟詠甚多、嘗同張南軒遊南岳、唱酬至百餘篇、笑曰、吾二人得無荒於詩乎、又愛僧祖可鼓琴絕句、大

の神、能く湖中に風を分ちて帆を南北せしむ、亦希有の事なり。

1101

程伊川云、某、素き詩を作らず、亦是れ禁止して作らざるに非ず、但此の閑言語を爲すを欲せず、且つ如今詩を能くす、稱するは、杜甫に如くはなし、「花を穿つ蛺蝶深々に見へ、水に點する蜻蜒款々として飛ぶ」と云ふが如き、此の如き閑言語、道ひ出だして甚なをな做すや、某、曾ち詩を作らざる所以なり、此れ、吹フエき皺しわむ一池の春水、卿が何事に干すと、同一の沒趣人、頭巾ケツの氣極れり、朱子は則ち然らず、小學書を編す、初め樂府杜詩を取とる、其の劉子澄に答ふるに、謂ふ、古樂府及び杜子美の詩取るべき者多し、其れをして喜びて諷咏せしめば心に入り易く、最も益ありと爲す、今本載する無し、憚おそりて之を刪れるか、平生、楊誠齋陸放翁と吟詠甚だ多し、嘗て張南軒と同く南岳に遊び、唱酬百餘篇に至り、笑つて曰、吾が二人、詩に荒む無きをと得んやと、又、僧祖可の琴を鼓する絶句を愛し、大書して石に庭

書刻石于庭、眞與伊川冰炭矣。

朱子集中詩題云、巢居之集、以中有學仙侶、吹簫弄明月、爲韻、既而賦詩者頗失期、於是令最後者具禮以當罰、乃稍集、獨敦夫圭甫、違令後至、衆白罰如約、飲罷、又以蒼茫望海路、歲晚將無獲分韻、烹得將字、此其風流可觀也、山棲志載、朱文公每經行處、聞有佳山水、雖迂途數十里、必往遊焉、攜酒一壺、銀盃大幾容半升、時飲一盃、登覽竟日、未嘗厭倦、此亦可以想其雅韻也。

五雜俎云、爛柯山中有數松、盤孳蹙縮、形勢殊詭、余嘗過之、歎其生於荒僻、無能賞者、又去十數武、石碣表於道周、大書曰、戰

に刻す、眞に伊川と冰炭なり。

朱子集中の詩題に云ふ、巢居の集、中に仙を學ぶ侶有り、簫を吹きて明月を弄すを以て韻と爲す、既にして詩を賦する者頗る期を失す、是に於て最後の者に禮を具へ以て罰に當らしむ、乃ち稍集る、獨り敦夫圭甫、令に違ひ後れ至る、衆白す、罰、約の如くせん、飲罷み、又蒼茫望海路を望み、歲晚將に獲る無からん、すを以て韻を分つ、烹、將の字を得たり、此れ其風流觀る可し、山棲志に載す、朱文公、經行する處、佳山水あるを聞くと、迂途數十里と雖、必ず往きて遊ぶ、酒一壺を攜へ、銀盃の大き幾んど半升を容るものにて、時に一盃を飲み、登覽日を竟へ、未だ嘗て厭倦せず、此れ亦以て其雅韻を想ふべきなり。

五雜俎に云、爛柯山中に數松あり、盤孳蹙縮、形勢殊に詭なり、余嘗て之を過ぎ、其荒僻に生じ、能く賞する者無きを歎す、又去ること十數武、石碣もて道周に表し、大書して戰龍松と曰ふ、朱

龍松朱晦翁筆也、乃知古人識鑿、其先得我心若此、而必鑄題以表之、則今人不能、亦不暇也、此其風流雅尚亦可見已、又見其集云予少好古金石文字、家貧不能有其書、獨時取歐陽子所集錄、觀其叙跋辯證之辭、以爲樂、遇適意時、恍然若手摩挲其金石、而目了其文義也、於是始祛其囊、得先君子所藏、與熹後所增益者、凡數十種、雖不多、皆奇古可玩、悉皆標飾、因其刻石大小、施橫軸、縣之壁間、坐對、循行臥起、恆不去目前、不待披篋、篋卷舒把玩而後爲適也、此亦不必以玩物爲興志、後世道學者流不知此趣、何耶。

朱子食梨詩、珍實渾疑露結成、春葩況是

晦翁の筆なり、乃ち知る古人識鑿、其れ先づ我心を得たること此の若し、而して必ず鑄題して以て之を表す、則ち今人は能はず、亦暇あらざるなり、此れ其風流雅尚、亦見る可きのみ、又其集を見るに云、予少くして古金石の文字を好む、家貧にして其書を有する能はず、獨、時に歐陽子の集錄する所を取り、其叙跋辯證の辭を觀て、以て樂み爲し、適意の時に遇へば、恍然として手に其金石を摩挲し、而して目に其文義を了するが若し、是に於て始めて其の囊を祛き、先君子の藏する所を、熹の後に增益する所の者を得たり、凡そ數十種、多からず、雖、皆奇古玩ぶ可し、悉く皆標飾し、其石に刻する大小に因り、横軸を施し、之を壁間に縣く、坐對、循行臥起、恆に目前を去らず、篋卷を披き、卷舒把玩するを待ちて、而して後ち適き爲さざるなり、此れ亦必ずしも物を玩ぶを以て志を喪ふと爲さず、後世の道學者流此趣を知らざるは何ぞや。

朱子梨を食ふ詩に、珍實渾て疑ふ露結んで成るかき、春葩況ん

雪儲<sub>積</sub>、乍驚磊落堆盤出、旋剖輕盈照骨明、盧橘漫勞誇夏熟、柘漿未許析朝醒、啖餘更檢桐君錄、快果知非浪得名、本草謂梨爲快果、盧橘夏熟見蜀都賦、柘漿析朝醒、見漢禮樂志、余嘗抄錄示人曰、此宋人詩、試料誰作、咸曰、形容之妙、結構之巧、非陸放翁、則楊誠齋、余曰、乃朱文公先生也、衆未肯信、出集本示之、舉座膛若、楊大年梨詩、繁花如雪早傷春、千樹封侯未是貧、漢苑謾傳盧橘賦、驪山誰識荔枝塵、九秋青女霜添味、五夜方諸月溜津、楚客狂醒嘲已解、水風猶自獵汀蘋、亦爲時脍炙、可謂聯璧矣。

朱子兩詩、孤燈耿寒焰、烈此一臆幽、臥聽

や是れ雪積を儲ふ、乍ち驚く磊落盤に堆くして出で、旋剖いて輕盈骨を照して明なり、盧橘漫に勞す夏熟に誇り、柘漿未だ許さず朝醒を析くを、啖餘更に檢す桐君錄、快果知る浪りに名を得るに非ず、本草に梨を謂ふて快果と爲す、盧橘夏熟するは、蜀都賦に見ゆ、柘漿、朝醒を析くは、漢禮樂志に見ゆ、余嘗て抄録し人に示して曰、此れ宋人の詩なり、試に誰の作なるを料れ、咸曰、形容の妙、結構の巧、陸放翁に非んば、則ち楊誠齋なりと、余曰、乃ち朱文公先生なりと、衆未だ肯て信ぜず、集本を出し之を示せば、座を舉げて膛若たり、楊大年の梨の詩に「繁花雪の如く早く春に傷み、千樹封侯未だ是れ貧ならず、漢苑謾に傳ふ盧橘の賦、驪山誰か識らん荔枝の塵、九秋青女霜味を添へ、五夜方諸月津に溜る、楚客狂醒嘲已に解け、水風猶ほ白ら汀蘋に獵す」と、亦時に脍炙せらる、聯璧と謂ふ可し。

朱子の兩の詩に、「孤燈・寒焰耿か、此の一臆の幽を照らす、臥し

簷前雨浪浪殊未休。直是王右丞佳境。又醉下祝融峰。作我來萬里駕長風。絕壑層雲許盪胸。濁酒三杯豪氣發。朗吟飛下祝融峰。讀之令人盪胸。不意朱子而作此放膽豪吟。若匿名示人。疑李謫仙作。不然決爲明李何李王輩詩矣。

山崎闇齋詠秋鶯云。居諸代謝四時中。霜染林園復見紅。忽有金衣公子至。秋風聲裏聽春風。此翁滿腔子皆頭巾氣。不意有若雅咏也。然集中唯此一首。其餘無復足觀者。

劉宋劉顯父人稱爲劉郎。劉禹錫玄都觀詩自稱曰劉郎。本此蓋以其爲道觀桃花。擬天台仙女之居。以劉晨再入天台言之。

て聽く簷前の雨、浪々殊に未だ休まず」と、直に是れ王右丞の佳境なり、又酔ふて祝融峰を下る作に、「我は來り萬里・長風に駕す、絶壑層雲許、盪胸を盪す、濁酒三杯豪氣發し、朗吟飛び下る祝融峰」と、之を讀めば人をして胸を盪せしむ、意はざりき朱子にして此の放膽豪吟を作さんとは、若し名を匿し人に示さば、李謫仙の作か疑はん、然らずんば決す明李王輩の詩と爲さん。

山崎闇齋、秋鶯を詠じて云、「居諸代謝四時の中、霜染めて林園復た紅を見る、忽ち金衣公子の至るあり、秋風聲裏に春風を聽く」と、此翁滿腔子皆頭巾氣なり、意はざりき若の「こき雅咏あらんとは、然れども集中唯此の一首のみ、其餘は復觀るに足る者無し。

劉宋の劉顯父、人稱して劉郎と爲す、劉禹錫の玄都觀の詩に、自ら稱して劉郎と曰ふは、此に本づく、蓋、其道觀の桃花たるを以て天台仙女の居に擬す、劉晨再び天台に入るを以て之を言ふ、

故特用郎字郎猶增也。杜牧赤壁詩、周郎亦取曲有誤周郎顧之語、以襯二喬之句、唐人之詩主於性情、以滑稽出之、所以爲妙也。

方秋崖深雪偶談云、本朝諸公喜爲議論、往往不深諳唐人主於性情、使雋永有味、然後爲勝。杜牧之赤壁詩、折戟沈沙鐵未銷、細將磨洗認前朝、東風不與周郎便、銅雀春深鎖二喬、許彥周不諳此老以滑稽玩弄、每每反用其鋒、輒雌黃之、謂孫氏霸業係此一舉、宗社存亡、生靈塗炭、皆置不問、只恐捉了二女、可見措大不識好惡、豈非與癡人言不應及於夢也。余最愛寶庠新入諫林喜內子至一絕、一旦悲歡見孟

故に特に郎の字を用ゆ、郎は猶ほ増のごとし、杜牧赤壁の詩の周郎も、亦た曲誤り有らば周郎顧るの語を取り、以て二喬の句に襯す、唐人の詩は、性情を主とし、滑稽を以て之を出たす、妙たる所以なり。

方秋崖の深雪偶談に云、本朝諸公喜みて議論を爲す、往々深く唐人が性情を主とし、雋永味有らしめ、然る後勝れりご爲すを諳らず、杜牧の赤壁の詩に、「折戟沙に沈みて鐵未だ銷せず、細に磨洗を將て前朝を認む、東風、周郎の與に便せんすんば、銅雀春深くして二喬を鎖さん」と、許彥周、此の老が滑稽を以て玩弄し、毎々其鋒を反用するを諳らず、輒ち之を雌黃して、孫氏の霸業は此の一舉に係る、宗社の存亡、生靈の塗炭、皆置て問はず、只二女を捉了せんを恐るご、見る可し措大好惡を識らずご謂ふ、癡人ご言ひて應に夢に及ぶべからざるに非ずや、余最も寶庠が新に諫林に入り内子の至るを喜ぶ一絶を愛す、「一旦悲歡孟光を見る、十年辛苦滄浪に伴ふ、知らず筆硯封事に縁るを、

光十年辛苦伴滄浪、不知筆硯緣封事、猶問傭書日幾行、使彥周評此、則以竇氏內爲不解事婦人矣、此在當時尤藥石之言也、如太白蘇臺覽古亦唯思西施而已、彥周不譏之何耶、元末張士誠部將呂珍守紹興、參軍陳庶子賦詩寄之云、見說錦袍酣戰罷、不驚越女採荷花、呂情人誦罷忽大怒曰、吾爲主人守邊疆、萬死鋒鏑間、豈務愛女子而不驚之耶、見則必殺之、癡人前說夢、有如是狂悖、不徒可笑也。

楊升菴云、大抵人自情中生、焉能無情、但不過甚而已、天之風月、地之花柳、與人之歌舞、無此不成、三才善哉其言之也、何必絕欲忘情、漠然如仙佛、而後爲君子哉、靖

猶ほ問ふ傭書日に幾行ぞと、彥周をして此を評せしめば、則ち竇氏の内を以て事を解せざる婦人を爲さん、此れ當時に在りて、尤も藥石の言なり、太白の蘇臺覽古の如き、亦唯だ西施を思ふのみ、彥周之を譏らざるは何ぞや、元末張士誠の部將呂珍、紹興を守る、參軍陳庶子詩を賦し之に寄せて云ふ、「説くを見る錦袍酣戦し罷み、驚かさず越女の荷花を採るを」と、呂、人を情ひ誦し罷みて忽ち大に怒りて曰、吾、主人の爲めに邊疆を守り、鋒鏑の間に萬死す、豈女子を愛するを務めて、之を驚かさざらんや、見れば則ち必ず之を殺さんと、癡人の前に夢を説く、是の如き狂悖有り、徒に笑ふ可きのみにあらざるなり。

楊升菴云、大抵人は情中より生ず、焉を能く情無からん、但、過甚ならざるのみ、天の風月、地の花柳と、人の歌舞と、此れなくんば三才を成さずと、善いかな其之を言ふや、何ぞ必ずしも欲を絶ち情を忘れ、漠然として仙佛の如くにして而る後君子と爲さんや、靖節、寂寞東籬、閑情一賦有り、廣平、梅花を詠す、其心

節寂寞東籬有閑情一賦廣平詠梅花不  
 害其心似鐵情之不可以已哉今道學者  
 流譏說著情便欲努目吾不知其何謂也  
 清人王敬亭見袁倉山示過古墓詩袁不  
 覺其佳王曰君且閉目一想余前言瞑坐  
 觀想詩境抑何暗相照合耶。

咏物詩題前陪筆起得突然題後餘波結  
 得悠然的是好詩李東陽麓堂詩話云唐  
 律多於聯上著工夫如雍陶白鷺鄭谷鷓  
 鴒詩二聯皆學究之高者至于起結即不  
 成語矣如杜子美白鷹起句錢起湘靈鼓  
 瑟結句若奏金石以破蟋蟀之鳴豈易得  
 哉學者必知此訣斯可以言詩矣。

贈答詩賦與子姪門生書號名如山山谷庭

夜航詩話卷之四

の鐵に似たるを害せず情の以て已む可からざるかな今道學  
 者流鐵に情を説著すれば便ち努目せん欲す其れ何の謂  
 なるを知らざるなり。

清人王敬亭袁倉山を見て古墓を過ぐる詩を示す袁其佳を  
 覺らず王曰君且らく目を閉ちて一想せよ余前に瞑坐して  
 詩境を觀想するを言ふ抑何ぞ暗に相照合するや。

咏物の詩は題前の陪筆起し得て突然題後の餘波結び得て  
 悠然的是れ好詩李東陽の麓堂詩話に云ふ唐律は多く聯上に  
 於て工夫を著く雍陶の白鷺鄭谷の鷓鴣の詩の如き二聯皆學  
 究の高きもの起結に至りては即ち語を成さず杜子美の白鷹  
 の起句錢起の湘靈鼓瑟の結句の如き金石を奏し以て蟋蟀の  
 鳴を破るか若し若得易すからんや學者必ず此の訣を知らば  
 斯に以て詩を言ふ可し。

贈答の詩賦子姪門生に與ふるに書を著す山谷庭堅の如き

堅是也。朋友書姓名拜，尊長用再拜。古人以再拜爲敬之至。君父之尊，亦止再拜。漢魏表文皆書稽首再拜，可見已。禮至末世，而繁。宋明書笱多稱百拜，非實禮也。然今公侯於天子，大夫立於其君，不稱百拜，恐爲失敬。不容不從衆已，余於蒼瓊錄爲詳其說，不必一槩執拗可也。

呈師詩文書表號先生，或稱尊師表號老先生，若加姓不敬也。凡上尊長，皆不稱姓禮也。

歐公詩話：「袖中諫草朝天去云，進諫必以章疏，無用箋之理，是一字破綻，失名義大矣。今人文字末多書某拜稿者，夫寄人須謹淨書，用箋非禮也。稿而拜書，又且押

是れ也。朋友に姓名拜を書し、尊長に再拜を用ひ、古人再拜を以て敬の至り爲し、君父の尊も亦た止<sup>た</sup>再拜、漢魏表の文皆稽首再拜書す、見る可きのみ、禮は末世に至りて繁なり、宋明の書笱多く百拜を稱す、實禮に非ざるなり、然るに今公侯の天子に於ける、大夫士の其君に於ける、百拜と稱せずんば、恐らくは失敬爲さん、衆に従はざるべからざるのみ、余、蒼瓊錄に於て爲に其說を詳にす、必ずしも一槩に執拗せずして可なり。

師に呈する詩文に表號先生と書し、或は尊師表號老先生と稱す、若し姓を加へば不敬なり、凡そ尊長に上る、皆姓を稱せざるは禮なり。

歐公詩話に「袖中の諫草朝天去るを嗤ふて云ふ、諫を進むは必ず章疏を以てし、箋を用ふるの理無し、是れ一字の破綻、名義を失ふこと大なり、今人は文字の末に某拜稿と書する者多し、夫れ人に寄するには須く謹んで淨書すべし、箋を用ふるは非禮なり、稿にして拜書し、又且つ押印す、一敬一慢、謂れ無き

印、一敬一慢、無謂甚矣。

唐人宴會賦詩、有同用一字爲韻者、陳子昂正月晦日宴高正臣林亭、凡二十一人、皆以華字爲韻、重宴凡九人、皆以池字爲韻、長孫正隱、上元夜、效小庾體、凡六人、皆以春字爲韻、張九齡送陳學士還江南、同用徵字、王維瓜園詩、同用園字爲韻、韻任多少、杜甫王侍御高使君同過、共用寒字、又章梓州水亭、同用荷字、韓愈送嚴大夫、同用南字、德宗重陽日賜宴曲江亭、因詔可、中書門下簡定文詞士三五十人、應制同用清字、明日內於延英進來、又中和節日宴百僚、奉詔同用春字、韓文送鄭尙書序、公卿大夫士、苟能詩者、咸相率爲詩、以

こと甚し。

唐人の宴會に詩を賦す、同じく一字を用ひ韻を爲す者あり、陳子昂、正月晦日に高正臣の林亭に宴す、凡そ二十一人、皆華字を以て韻を爲す、重宴凡そ九人、皆池字を以て韻を爲す、長孫正隱、上元の夜、小庾體に效ふ、凡そ六人、皆春字を以て韻を爲す、張九齡の陳學士の江南に還るを送る、同じく徵字を用ひ、王維の瓜園の詩に、同じく園字を用ひて韻を爲す、韻は多少に任す、杜甫の王侍御高使君同過、共に寒字を用ひ、又章梓州水亭に同じく荷字を用ひ、韓愈の嚴大夫を送る、同じく南字を用ひ、德宗の重陽の日曲江亭に賜宴し、因て詔す、中書門下、文詞の士三五十人を簡定し、制に應じ、同じく清字を用ひ、明日内、延英に於て進み來る可しと、又中和節日百僚を宴す、詔を奉じ同じく春字を用ふ、韓文の鄭尙書を送る序に、公卿大夫士、苟も詩を能くする者は咸に相率るて詩を爲り、以て朝政を美し、以て公の南

美朝政、以慰公南行之思、韻必以來字者、所以祝公成政而來歸疾也、今人專分韻各探一字、不復知有是法也。

嚴維集有酒語聯句各分一字、言限韻各作一聯也、宴席餘興、時或爲之、亦可以盡歡矣。

宴會賦詩取古人句分字、作家相遇爲之可也、諺所謂烏學鷺鷥、何其不知量也、蓋仄韻供古詩之用、非近體所宜也、故得仄韻者、自非能作古詩手、徒苦人耳、夫五七言律七言絕句、必押平韻爲正、若用仄韻變體耳、故或以古詩格行之、說見于前、此方詩人尤不習側體、偶席間拈之、勉強辛苦寒賁、安能得足、書吟箋者耶、故曰、徒苦

行の思を慰む、韻は必ず來の字を以てするものは、公の政を成して來り歸るの疾きを祝する所以なりと、今人專ら韻を分ち、各一字を探り、復是法有るを知らざるなり。

嚴維集に、酒語聯句各一字を分つ有り、韻を限り各一聯を作るを言ふなり、宴席餘興の時、或は之を爲すも、亦以て歡を盡すべし。

宴會に詩を賦し、古人の句を取り字を分つ、作家相遇ひ之を爲す可なり、諺に謂はゆる烏、鷺鷥を學ぶ、何ぞ、其れ量を知らざるや、蓋、仄韻は古詩の用に供し、近體の宜き所に非ざるなり、故に仄韻を得る者は、能く古詩を作る手に非ざるよりは、徒に人を苦しむるのみ、夫れ五七言律、七言絕句は、必ず平韻を押すを正と爲す、若し仄韻を用ひば、變體のみ、故に或は古詩の格を以て之を行ふ、説は前に見えたり、此方の詩人は、尤も側體に習はず、偶、席間之を拈し、勉強辛苦して賁を塞ぐも、安んぞ能く吟箋に書するに足る者を得んや、故に曰、徒に人を苦しむのみ、豈、客を待つ禮ならんや、賢へは茶事を解せざる者の爲め

人耳豈待客之禮哉。譬如爲不解茶事者、設茶讌以窘辱之、可謂惡主人也已。

韋應物微雨夜來過、不知春草生、言知也、李頎歲歲花開知爲誰、李肇龍知他何處、是姑蘇、俱言不知也。詩語婉曲自在、看他斡旋之妙。

太白別內赴徵、歸時儻帶黃金印、莫學蘇秦不下機、言勿如蘇秦之歸不下機以迎也、弇州衛河八絕、夜深呼小婦、篝燈聽波響、呼小婦、呼燈也、蓋深夜眠驚、因燈滅呼人、則小婦點火以來、遂不能復睡、而聽波響也、是等句法、此方人所不能也。

假對卽借聲對、以音取對也、然非較著者不爲也、李白水春雲母碓、風掃石楠花、楠

に茶讌を設け、以て之を窘辱するがことし、琴上人と謂ふ可きのみ。

韋應物、「微雨夜來過ぎ、知らず春草の生するを」と、知るを言ふなり、李頎の「歲歲花は開く知る誰が爲めぞ」、李肇龍の「知る他何れの處かはれ姑蘇」と、俱に知らざるを言ふなり、詩語婉曲自在なり、斡旋の妙を看よ。

太白の内に別れ徵に赴くに「歸時儻し黄金の印を帯びば、學ぶ莫れ蘇秦が機を下らざるを」と、言ふは蘇秦の歸へりしとき機を下りて以て迎へざりしが如くする勿れといふなり、弇州の衛河八絶に「夜深に小婦を呼び、篝燈に波響を聴く」と、小婦を呼ぶは、燈を呼ぶなり、蓋、深夜眠驚き、燈の滅するに因り、人を呼べば、則ち小婦火を點じ以て來る、遂に復た睡る能はず、而して波響を聴くなり、是等の句法、此方の人能はざる所なり。

假對、卽ち借聲對は音を以て對を取るなり、然れども較著なる者に非ずんば爲さざるなり、李白の「水は春く雲母碓、風は掃ふ

與男聲同、杜甫、次第尋書札、呼兒檢贈篇  
 第音通、弟、信宿漁人猶泛泛、清秋燕子故  
 飛飛、漁音通、魚、胡來不覺澗關隘、龍起猶  
 聞晉水清、胡音通、狐、曉關險路今虛遠、禹  
 鑿寒江正穩流、曉音通、堯、岑、愁、客、葉、舟  
 裏、夕陽花木時、愁音通、秋、雞鳴紫陌曙、光  
 寒、鶯、囀、皇、州、春、色、闌、皇音通、黃、王、維、偶、值  
 乘、籃、轡、非、關、避、白、衣、籃音通、藍、落、花、寂、寂  
 啼、山、鳥、楊、柳、青、青、渡、水、人、楊音通、揚、吳、融  
 自、念、爲、遷、客、方、諧、謁、上、公、遷音通、千、馬、戴  
 亂、鐘、嘶、馬、急、殘、日、半、帆、紅、嘶音通、西、儲、嗣  
 宗、水、色、西、陵、渡、松、聲、伍、相、祠、伍音通、五、姚  
 鵠、一、作、栖、寓、客、三、見、北、歸、鴻、栖音通、西、李  
 嘉、祐、映、花、雙、節、駐、臨、水、伯、勞、飛、伯音通、百

石楠花「ミ、楠ミ男ミ聲同じ、杜甫の「次第に書札を尋ね、兒を呼んで贈篇を檢す」ミ、第音弟に通ず、「信宿漁人猶ほ泛々、清秋燕子故らに飛々」ミ、漁音、魚に通ず、「胡來り覺えず澗關の隘きを、龍起り猶ほ聞く晉水の清きを」ミ、胡音狐に通ず、「曉關の險路今虛遠、禹鑿の寒江正に穩流」ミ、曉音堯に通ず、岑參の「愁客葉舟の裏、夕陽花木の時」ミ、愁音秋に通ず、「雞鳴きて紫陌曙光寒く、鶯囀して皇州春色闌なり」ミ、皇音黃に通ず、王維の「偶々籃轡に乗るに値ふ、白衣を避くるに關するに非ず」ミ、籃音藍に通ず、「落花寂々山に啼く鳥、楊柳青青水を渡る人」ミ、楊音揚に通ず、吳融の「自念ふ遷客ミ爲り、方に諧ふて上公に謁す」ミ、遷音千に通ず、馬戴の「亂鐘嘶馬急に、殘日半帆紅なり」ミ、嘶音西に通ず、儲嗣宗の「水色西陵の渡、松聲伍相の祠」ミ、伍音五に通ず、姚鵠の「一たび栖寓の客ミ作り、三たび、北歸の鴻を見る」ミ、栖音西に通ず、李嘉祐の「花に映じ雙節駐り、水に臨み伯勞飛ぶ」ミ、伯音百に通ず、耿湋の「湓浦潮聲盡き、

耿淖溢浦潮聲盡鍾陵暮色繁潮音通朝  
 賈島佩玉春風裏題章蠟燭前蠟音通臘  
 雕蟲羞明鑿于祿貴明時祿音通鹿韓愈  
 眼穿長訝雙魚斷耳熱何辭數爵頻爵與  
 雀通劉滄殘春碧樹自留影半夜子規何  
 處聲子音通紫韓偓直應宜室還三接未  
 必豐城便陸沈陸音通六錢珣臘雪初明  
 柏子殿春光欲上萬年枝栢音通百柳宗  
 元香飯春菰米珍蔬折五茄菰音通孤元  
 稹每想潢池寇猶稽赤族懲潢音通黃司  
 空圖松日明金像山風響木魚像音通象  
 僧皎然周旋承惠愛佩服比蘭薰惠與煎  
 通蘇軾暫借好詩消永夜每逢佳處輒參  
 禪參音通三林逋破殿靜披蓋曰古齋房

夜航詩話卷之四

鍾陵暮色繁しミ、潮、音朝に通ず、賈島の「佩玉春風の裏、題章  
 蠟燭の前」ミ、蠟、音臘に通ず、「雕蟲明鑿に羞ち、于祿明時を貴  
 ぶ」ミ、祿、音鹿に通ず、韓愈の「眼は穿ち長く訝る雙魚の斷、耳  
 は熱し何ぞ辭せん數爵の頻」ミ、爵、雀ミ通ず、劉滄の「殘春の碧  
 樹自ら影を留め、半夜の子規何の處の聲ぞ」ミ、子、音紫に通ず、  
 韓偓の「直に應に宜室に還た三接すべし、未だ必しも豐城便ち  
 陸沈せず」ミ、陸、音六に通ず、錢珣の「臘雪初めて明なり柏子  
 殿、春光よらんミ欲す萬年の枝」ミ、栢、音百に通ず、柳宗元の  
 「香飯、菰米を春き、珍蔬、五茄を折る」ミ、菰、音孤に通ず、元稹  
 の「毎に想ふ潢池の寇、猶ほ稽ふ赤族の懲」ミ、潢、音黃に通ず、  
 司空圖の「松日、金像明に、山風、木魚響く」ミ、像、音象に通ず、  
 僧皎然の「周旋、惠愛を承け、佩服、蘭薰に比す」ミ、惠、惠ミ通  
 ず、蘇軾の「暫く好詩を借りて永夜を消し、佳處に逢ふ毎に輒ち  
 參禪す」ミ、參、音三に通ず、林逋の「破殿靜に披く蓋曰古、齋房  
 閑に試む酪奴の春」ミ、曰、音舅に通ず、尤逢初の「秀は一錢に乏

閑試酪奴春、白音通鼻、尤途初囊乏、一錢窮到骨、胸蟠千古氣、陵雲窮音通躬、此皆較著者也、如盧綸、寧知樵子徑、得到萬洪家、子音紫、洪音黃、崔塗、讀留侯傳、翻把壯心輕、尺素卻煩商皓、正皇儲、尺音赤、皇音黃、則迂而晦矣。

眞假取對謂之借對、亦曰活對、肅宗推誠撫諸夏、與物長爲春、沈佺期、靜夜思、鴻寶清晨朝、鳳京、杜甫、旌旗日暖龍蛇動、宮殿風微燕雀高、江上小堂巢翡翠、花邊高塚臥麒麟、雲斷嶽蓮臨、大路、天晴宮柳暗、長春、竹葉於人既無分、菊花從此不須開、欲辭巴徼啼鶯合、遠下荆門去、鷓鴣、珠簾繡柱圍、黃鶯、錦纜牙樞起、白鷗、王維、廻看雙

しく窮、骨に到り、胸は千古に蟠り氣雲を陵ぐ、窮、音躬に通ず、此れ皆較著なる者なり、盧綸の「寧ぞ知らん樵子の徑、萬洪の家」に到るを得たり、子、音紫、洪、音黃、崔塗の「留侯傳を讀む、翻て壯心を把りて尺素を輕んじ、卻て商皓を煩はして皇儲を正す」、尺、音赤、皇、音黃の如きは、則ち迂にして晦し。

眞假、對を取る之を借對と謂ひ、亦活對と曰ふ、肅宗の「誠を推して諸夏を撫し、物と長く春を爲す」、沈佺期の「靜夜鴻寶を思ひ、清晨鳳京に朝す」、杜甫の「旌旗日暖に龍蛇動き、宮殿風微に燕雀高し」、「江上の小堂翡翠巢くひ、花邊の高塚麒麟臥す」、「雲斷えて嶽蓮大路に臨み、天晴れて宮柳長春に暗し」、「竹葉人に於て既に分無く、菊花此れ從り開くを須ひず」、「巴徼を辭せんを欲して啼鶯合し、遠く荆門を下り去らば催す」、「珠簾繡柱黃鶯を圍み、錦纜牙樞白鷗を起す」、王維の「廻り看る雙鳳、相去る一牛鳴」、杜甫の「天を拂ひ笑語を聞き、特地樓臺を見る」、嘯虎の

鳳闕相去一牛鳴、杜牧拂天聞笑語、特地  
 見樓臺、喻鳥、獬豸霜中貌、龍鍾病後顏、陸  
 龜蒙、暫來從露冕、何事買雲巖、許渾、風度  
 龍山暗、雲凝象闕陰、白居易、歲盡後推藍  
 尾酒、春盤先勸膠牙湯、祥頊降伴趨庭鯉、  
 賀燕飛和出谷鶯、元稹、朱紫衣裳浮世重、  
 蒼黃歲月長年悲、李商隱、此日六軍同駐  
 馬、當時七夕笑牽牛、趙嘏、桃花塢接啼猿  
 寺、野竹亭通畫鷁津、王建、裝檐玳瑁隨風  
 落、傍岸鷓鴣逐暖眠、楊巨源、雙闕薄烟籠  
 繭、九成、初日照蓬萊、徐夤、五色龍章身  
 早見、六終鴻業數難逾、蘇軾、磨刀切熊白、  
 沈、盡酌鷓鴣黃、陳造、百年羊脚熟、萬事虎頭  
 癡、王操、大陽過午暗、暮雪照人明、李會伯

夜航詩話卷之四

「獬豸霜中の貌、龍鍾病後の顔」、陸龜蒙の「暫く來り露冕に従ふ、何事ぞ雲巖を買ふ」、許渾の「風度りて龍山暗く、雲凝りて象闕陰る」、白居易の「歲盡後に推す藍尾の酒、春盤先づ勸む膠牙湯」、祥頊降りて庭に趨く鯉を伴ひ、賀燕飛ひ和す谷を出るの鶯、「元稹の「朱紫の衣裳浮世重く、蒼黃の歲月長年悲む」、李商隱の「此日六軍同じく馬を駐む、當時七夕牽牛を笑ふ」、趙嘏の「桃花塢は接す啼猿寺、野竹亭は通す畫鷁津」、王建の「檐を裝ふ玳瑁風に隨つて落ち、岸に傍ふ鷓鴣暖を逐ふて眠る」、楊巨源の「雙闕薄烟繭笛を籠め、九成初日照蓬萊を照す」、徐夤の「五色の龍章身早く見え、六終の鴻業數難え難し」、蘇軾の「刀を磨し熊白を切り、盡を洗ひ鷓鴣を酌む」、陳造の「百年羊脚熟し、萬事虎頭癡」、王操の「大陽午を過ぎて暗く、暮雪人を照らして明なり」、李會伯の「潤色、鴻業を愾にし、艱難燕謀を啓く」、陸游の「梁を掃ひ燕子を迎へ、桜を挿み龍孫を護る」、「此物何ぞ陵替せ

潤色。恢鴻業、艱難啓燕謀、陸游、掃梁迎燕  
 子、插椽護龍孫、此物何陵替、斯人乃陸沈、  
 楊萬里、樓頭吹動梅花曲、夢裏猶疑燕窺  
 香、尤遂初、禾頭昨夜憂生耳、木德何時卻  
 守心、方岳、鐵硬脊梁長偃蹇、糊塗面目易  
 迎逢、陳孚、幸承乙夜明王問、更喜丁年奉  
 使還、元好問、明月高樓燕市酒、梅花人日  
 草堂詩、馮璧、老伏固非千里驥、冥飛似是  
 五噫鴻、程敏政、鴻臚立仗傳三呼、馬監隨  
 班控六飛、徐中行、談天寧復如燕子、玩世  
 何妨似馬曹、魏觀、和鸞喜奉彫車御、式燕  
 慙叨紫閣賓、此中有兼借聲對者、假之又  
 假也、野客叢書曰、借對自古有之、如王褒  
 碑、年逾艾服、任隆台袞、江總作陸尙書誄、

ん、斯人乃ち陸沈す、楊萬里の「樓頭吹き動く梅花の曲、夢裏猶  
 ほ凝る燕窺香」、尤遂初の「禾頭昨夜耳を生ずるを憂ふ、木德何  
 の時か却て心を守る」、方岳の「鐵硬の脊梁長く偃蹇し、糊塗の  
 面目迎逢し易し」、陳孚の「幸に承く乙夜明王の問、更に喜ぶ丁  
 年奉使して還る」、元好問の「明月高樓燕市の酒、梅花人日草堂  
 の詩」、馮璧の「老伏、固より千里の驥に非ず、冥飛是の五噫の鴻  
 に似たり」、程敏政の「鴻臚仗に立ち三呼を傳へ、馬監班に隨つ  
 て六飛を控く」、徐中行の「天を談す寧ぞ復た燕子の如くなら  
 ん、世を玩ぶ何ぞ妨げん馬曹に似たるを」、魏觀の「和鸞、彫車の  
 御を奉ずるを喜ぶ、式燕慙つ叨にす紫閣の賓」、此中に借聲對を  
 兼ぶる者あり、假の又た假なり、野客叢書に曰、借對は古より  
 之あり、王褒の碑に、「年は艾服を逾え、任は台袞に隆なり」、江  
 總、陸尙書の誄を作り、「雁行序する所、龍作の間才」、沈約の墓  
 志に、「彼の天爵を以て、鬱々して人龍を爲る」の類の如きはれ

雁行所序、龍作間才、沈約墓志、以彼天爵、鬱爲人龍之類、是也。

詩用碧字、多稱鮮明之貌、非謂色也、杜詩  
冰漿盃碧瑤瑤寒、竹寒沙碧浣花溪、清江  
碧石傷心麗、皆謂其清麗、爾、白雲白桃曰、  
碧雲碧桃亦此義也、東坡牡丹詩、一朵妖  
紅翠欲流、亦謂其鮮麗、已、不然、既曰紅、矣、  
又曰翠、可乎。

粉亦不必謂白、轉稱花之豔麗、杜少陵詩  
波漂菰米沈雲黑、露冷蓮房墜粉紅、白香  
山詩、巫女廟花紅似粉、昭君村柳翠於眉、  
韓致光詩、綠搓楊柳綿初軟、紅暈櫻桃粉  
未乾、是也。

猥擬古人名作、政自敢與昔賢抗衡、多見

なり。

詩に碧の字を用ゆ、多く鮮明の貌を稱す、色を謂ふに非ざるなり、杜詩の「冰漿盃碧にして瑤瑤寒し」、「竹寒く沙碧なり浣花溪」、「清江碧石心を傷ましむる麗」、皆其清麗を謂ふのみ、白雲白桃を碧雲碧桃と曰ふも、亦此義なり、東坡の牡丹の詩に「一朵の妖紅、翠流れん」と欲す、亦其鮮麗を謂ふのみ、然らずんば、既に紅と曰ひ、又翠と曰ふ、可ならんや。

粉も亦しも白を謂はず、轉じて花の豔麗を稱す、杜少陵の詩に、「波は菰米を漂して沈雲黒く、露は蓮房を冷にして墜粉紅なり」と、白香山の詩に、「巫女廟の花は粉より紅に、昭君村の柳は眉より翠なり」と、韓致光の詩に、「綠は楊柳を搓し綿初めて軟に、紅は櫻桃に暈して粉未だ乾かず」と、是れなり。

猥に古人の名作を擬し、政に自ら敢て昔賢と抗衡するは、多く

其不知量耳。宋洪邁從孫倬丞宣城，自作題名記，通告之曰：他文尙可隨力工拙，下筆如此，豈宜犯不韙哉。蓋韓文公有藍田縣丞廳壁記，今以其題目同之，而以爲犯不韙，其謹厚何如哉。服元喬社友有賦「秋興八首者，以書論，改題曰：少陵秋興，千古獨步，李空同輩，刻意摹擬，不能爲優孟，況吾儕乎。夫擬傲之作，實奪其人，僅可爲也，不然宜謹避耳。其見正相符，後生輕薄，不自知身分，動輒敢犯不韙，珠玉在側，不勝形穢，可不憚也哉。

散樂宗師夜過市街，有行唱謠曲在前，嗽嗽者爲弟子言，使之止乎，乃戲抗聲未終，一句，其人卽歇，蓋恥憚也，又有一夫唱曲

其量を知らざるを見るのみ、宋の洪邁の從孫倬、宣城に承たり、自ら題名の記を作る、適之に告げて曰、他文は尙ほ力に隨つて工拙筆を下すべし、此記の如き、豈宜く不韙を犯すべけんやと、蓋韓文公に藍田縣丞廳壁の記あり、今其題目の之に同じきを以て、而して以て不韙を犯すを爲す、其謹厚何如ぞや、服元喬の社友に、秋興八首を賦する者あり、書を以て論し、題を改めしむ、曰、少陵の秋興は千古獨歩なり、李空同輩、刻意摹擬して優孟を爲す能はず、況んや吾儕をや、夫れ擬傲の作、實に其人を奪ふて、僅に爲す可きなり、然らずんば宜く謹んで避くべきのみと、其見正に相符す、後生輕薄にして、自ら身分を知らず、動すれば輒ち敢て不韙を犯す、珠玉側に在り、形穢に勝へず、憚らざる可けんや。

散樂の宗師、夜、市街を過ぐ、行、謠曲を唱へ前に在りて嗽々する者あり、弟子の爲めに言ふ、之をして止めしめんかき、乃ち戲に聲を抗ぐ、未だ一句を終へざるに、其人卽ち歇む、蓋恥ぢて

而來揚揚尤甚、弟子請盍復乎、曰如彼不能過耳、夫不能感人之能事、又不自知慙形穢、從事詞藝者、尤多此癡頑、夜郎自大、崛彊傲人、明人所謂魯般門前掉大斧者、鄙語目爲瞽、不怕蛇、誠可憫笑也已、聞諸京人、取玉川名蛙、放之庭池、則群蛙不敢鳴、可以人而不如蟲乎。

大丈夫當自立耳、徒託於人以傳、雖得之、君子不貴也、今人刊行詩集、求序於人、假其揄揚、以爲門楣、有累三四序而不止者、何其不憚煩也、或附以書牘、街其諛辭、不尤颯顏哉、傳曰士尙志、可不知恥乎。

世俗不識字、妄稱州爲陽、如攝陽信陽無謂尤甚、獨伊勢稱勢陽、抑有以也、蓋伊勢

彈るなり、又一夫あり、曲を唱へて來り、揚々尤も甚だし、弟子請ふ盍を復たひせざるや、曰、彼の如きは邊むる能はざるのみ、夫れ人の能事を應ずる能はず、又自ら形穢を慙づるを知らず、詞藝に従事する者尤も此の癡頑多し、夜郎自大、崛彊人に傲る、明人の謂はゆる魯般門前に大斧を掉ふ者なり、鄙語に目して瞽は蛇を怕れずと爲す、誠に憫笑すべきのみ、諸を京人に聞く、玉川の名蛙を取り、之を庭池に放てば、即ち群蛙敢て鳴かず、以て人にして蟲に如かざる可けんや。

大丈夫當に自立すべきのみ、徒に人に託して傳ふ、之を得るに雖、君子は貴はざるなり、今人、詩集を刊行し、序を人に求め、其揄揚を假り、以て門楣と爲す、三四の序を累ねて止まざる者あり、何ぞ其れ煩を憚らざるや、或は附するに書牘を以てし、其諛辭を街ふ、尤も颯顏ならずや、傳に曰、士は志を尙くす、恥を知らざる可けんや。

世俗、字を識らず、妄に州を稱して陽と爲す、攝陽、信陽の如き、謂れ無きこと尤甚し、獨、伊勢を勢陽と稱するは、抑も以えあ

者本此間海浦之名古言凡物促疊之謂今婦人縫衣促幅牽縮復疊者猶以是呼之本州内海渚淺沙平潮浪漪漪疊疊古史所稱神風疊瀾者故取名焉州面海水北爲陽所以稱勢陽也然不經見於書傳但詩詞中用之耳文章不可用也。

唐人李約江南春云江上年年芳意早蓬瀛春色逐潮來勢海以神風稱蓋亦此意謂其風氣淑靈覺從仙境來也諸家考說皆誤余詳諸伊勢雜志陸雲詩有神風潛駭之語借此用之詩中可也。

桑海七里津古稱間遠渡見日本紀人率不知也詩家或以灘稱附會嚴光事以爲作料妄矣灘者峽流險難之處豈可稱渡

り蓋伊勢は本此間の海浦の名なり古言に凡そ物促疊するを謂ふ今婦人衣を縫ひ幅を促し牽縮復疊する者猶ほ是を以て之を呼ぶ本州の内海は渚淺く沙平に潮浪漪々疊疊す古史に稱する所の神風疊瀾なる者故に名を焉に取れり州は海に面す水北を陽と爲す勢陽と稱する所以なり然れども書傳に經見せず但詩詞中に之を用ふるのみ文章には用ふ可からざるなり。

唐人李約の江南春に云「江上年々芳意早く蓬瀛春色潮を逐ふて來る」勢海の神風を以て稱せらるる蓋亦此意なり其風氣淑靈仙境より來るを覺ゆるを謂ふなり諸家の考說皆誤れり余諸を伊勢雜志に詳にす陸雲の詩に神風潛駭の語あり此を借り之を詩中に用ひて可なり。

桑海七里津古間遠渡まろのたぢ稱す日本紀に見ゆ人率ね知らざるなり詩家或は灘を以て稱し嚴光の事を附會し以て作料と爲す妄なり灘は峽流險難の處なり豈渡津を稱す可けんや。

津乎。

安濃津稱洞津、本出茅元儀武備志、曰國有三津、薩摩防津、伊勢洞津、筑前博多津、蓋安濃之音訛讀爲穴、見太閤記、稱織田信包爲穴將、遂又轉訛爲洞、已、武備志地圖書穴津、俗謂古昔津口灣環如洞、故有是名妄矣、按詩詞始用之者、寬文元祿間、府下處士有加藤延雪者、一名綱、字默子、好學、嫻藝文、嘗從遊山崎闇齋、然無頭巾氣習、士大夫延請聽講、以先生稱、惜不及半百而歿、著有章菴暇筆五卷、足見人品學術、中載壽環大夫無端子七秩詩、曰、眉壽洞津境、南山翠撲襟、此其權輿也、伊藤東厓送奧田生序、予客歲詣伊勢過豐原館、于奧田生家、邑

安濃津は、洞津と稱す、本は茅元儀の武備志に出づ、曰、國に三津あり、薩摩の防津、伊勢の洞津、筑前の博多津と、蓋、安濃の音訛り讀みて穴と爲す、太閤記に見ゆ、織田信包を稱して、遂に穴津の少將と爲す、又轉訛して洞と爲るのみ、武備志地圖に、俗に謂ふ、古昔津口灣環して洞の如し、故に是名ありと、妄なり、按ずるに詩詞始めて之を用ふる者は、寬文、元祿の間、府下の處士に加藤延雪といふ者あり、一名綱、字は默子、學を好み藝文に嫺へり、嘗て山崎闇齋に從遊す、然れども頭巾の氣習無し、士大夫延請して講を聴き、先生を以て稱す、惜むらくは半百に及ばずして歿す、著、章菴暇筆五卷あり、人品學術を見るに足る、中に環大夫無端子の七秩を壽する詩を載す、曰、「眉壽洞津の境、南山翠撲襟を撲つ」と、此れ其權輿なり、伊藤東厓の奧田生を送る序に、予、客歲伊勢に詣り豐原を過ぎ、奧田生の家を館す、邑は洞津の府に隸して

隸洞津之府而近焉。載紹述文集中。奧田生卽三角翁士亨其詩文因用洞津。門人沿襲遂爲通稱矣。今則市廛招牌往往書之。余亦嘗喜用之。後皆改作津城津藩。

伊賀府治好事者號爲白鳳城。傳道帝大友受禪之歲。州民獲大白鳥獻之。治下有鳳皇村卽其所獲之處。建元白鳳。蓋以是云。余喜其嘉名欲用之。詩詞此事史書無載。又不見于傳記雜說。偶見伊水溫故者。寬永中府下市民菊岡沾涼所作序中。杜撰斯語。若用故實者然。乃知州人由是傳謬。遂致傳會之說耳。恐後人不察。相承誤用。故爲辯之。俗本殺法轉輪記。叙渡邊數馬復讐事。亦沾涼所作。大半屬妄誕。是物

近し。紹述文集中に載す。奧田生は卽ち三角翁士亨なり。其詩文因て洞津を用ひ、門人沿襲して、遂に通稱を爲る。今は卽ち市廛の招牌に往々之を書す。余も亦嘗て喜ひて之を用ふ。後皆改めて津城・津藩と作す。

伊賀府治、事を好む者、號して白鳳城と爲す。傳へ道ふ。帝大友受禪の歲、州民大白鳥を獲て之を獻す。治下に鳳皇村あり。卽ち其獲る所の處なり。白鳳と建元するは、蓋是を以てなりと云。余其嘉名を喜び、之を詩詞に用ひんと欲す。此事史書に載する無く。又た傳記雜說に見えず。偶々伊水溫故といふる者を見るに、寬永中、府下の市民菊岡沾涼の作る所の序中に、斯語を杜撰し、故實を用ゆる者の若く然り、乃ち知る州人は由り謬を傳へ、遂に傳會の説を致すのみ。恐らくは後人察せず、相承けて誤用せん。故に爲に之を辯す。俗本殺法轉輪記に、渡邊數馬の復讐の事を叙す。亦沾涼の作る所にして、大半は妄誕に屬す。是物世に行はれ、而して實事幾んど亡ぶ。尤も歎ず可きなり。

行于世、而實事幾亡、尤可歎也。

此方詩人好用地名、以充填塞、非所當用、而強用之、故多不得其所、如諺所謂木株接竹、燈油點水、余每戒之、石林詩話曰、詩之用事、不可牽彊、必至於不得、不用而後用之、則事辭爲一、莫見安排鬪湊之迹、余於地名亦云、漁洋詩話曰、陳伯璣嘗語余、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船、妙矣、然亦詩與地肖、故爾、若云、南城門外報恩寺、豈不可笑耶、余曰、固然、卽如滿天梅雨、是蘇州、流將春夢過杭州、白日澹幽州、風聲壯岳州、黃雲畫角見并州、澹烟喬木隔縣州、皆詩地相肖、使云、白日澹蘇州、流將春夢過幽州、不堪絕倒耶、此用地名要訣、

此方の詩人、好んで地名を用ひ、以て填塞に充て、當に用ゆべき所に非ずして、強ひて之を用ゆ、故に多く其所を得ず、諺に謂はゆる木株に竹を接し、燈油に水を點するが如し、余毎に之を戒む、石林詩話に曰、詩の事を用ゆる、牽彊なる可からず、必ず用ひざるを得ざるに至り、而る後ち之を用ふれば、卽ち事辭一ミ爲り、安排鬪湊の迹を見る莫しミ、余地名に於ても亦云ふ、漁洋詩話に曰く、陳伯璣嘗て余に語る、「姑蘇城外の寒山寺、夜半の鐘聲客船に到る」ミ、妙なり、然れども亦詩ミ地ミ肖たるが故に爾り、若し「南城門外の報恩寺」ミ云はば、昔笑ふ可きにあらすやミ、余曰、固より然り、卽ち滿天の梅雨は蘇州「春夢を流し將つて杭州を過ぐ」「白日幽州に澹たり」「風聲岳州に壯す」「黃雲畫角并州を見る」「澹烟喬木縣州を隔つ」の如き、皆詩地相肖たり、「白日蘇州に澹たり」「春夢を流し將つて幽州を過ぐ」ミ云はしめば、絶倒に堪へざらんや、此れ地名を用ゆる要訣

故備錄之、如楚國蒼山古、幽州白日寒、錦江春色來天地、玉壘浮雲變古今、尤可會其用法也。

王駕社日絕句、足稱絕妙好辭、但鷺湖山下四字、詩中無所干涉、真贅疣矣、且下句有雞豚字、則鷺字尤宜避也、柳宗元破額山前碧玉流、亦是同病、會謂唐人而有此鹵莽乎、然絕無而僅有耳。

雍陶秋來見月多、歸思自起開籠放白鷗、余選唐詩百絕、頗嘉而錄之、既而覺起句五柳先生、通首全無關係、不知爲何喚出來、其爲沒緊要、甚於破額鷺湖、遂斥於孫山外矣。

## 夜航詩話卷之四終

なり、故に備に之を録す、「楚國蒼山古、幽州白日寒し」錦江の春色天地を來し、「玉壘の浮雲古今を變ず」の如き、尤も其用法を會す可し。

王駕の社日の絶句は、絶妙好辭と稱するに足る、但、鷺湖山下の四字は、詩中干涉する所なし、眞に贅疣なり、且つ下句に雞豚の字あり、則ち鷺の字尤も宜く避くべし、柳宗元の「破額山前碧玉流る」亦是れ同病なり、會ち唐人にして此鹵莽ありと謂はんや、然れども絶えて無くして僅に有るのみ。

雍陶の「秋來月を見て歸思多し、自ら起て籠を開きて白鷗を放つ」と、余、唐詩百絶を選び、頗る嘉みして之を録す、既にして覺る、起句の五柳先生は、通首全く關係無し、知らず何の爲めに喚び出だし來りしや、其の沒緊要たる、破額鷺湖よりも甚し、遂に孫山外に斥けたり。

# 夜航詩話卷之五

伊勢津阪孝綽君裕著

男達有功校

説文、除、賈買也。按賈訓貸。然其義頗異。正字通、假貸無息爲除。有息爲貸。又云懸買未償。直曰除。說得分明。古譯於伎能累。今言加計賀伊、劉盆子傳、來酤者皆除。與之。吳志潘璋、性嗜酒、居貧好除。酤債家至門。輒言。後豪富相還。姚合詩、馬爲除來貴。僅因借得頑。又讀書多旋忘。除酒數空還。唐寅詩、主人莫拒看花客。囊有青錢酒不除。高濂詩、頻年罷釀老愛酒。客至無錢強出除。其義可見也。楊誠齋詩話云、詩有句中

説文に、除は賈買なりと。按するに、賈は貸と訓す。然れども其義は頗る異なり。正字通に、假貸して息なきを除と爲し、息あるを貸と爲す。又云ふ懸買して未だ直を償はざるを除といふ。説き得て分明なり。古於伎能累と譯し、今は加計賀伊と言ふ。劉盆子傳に、來り酤ふ者には皆これを除與すと。吳志に、潘璋、性、酒を嗜む、居貧にして除酤を好み、債家門に至れば輒ち言ふ、後ち豪富ならば相還さん。姚合の詩に、「馬は除來の爲に貴く、儻は借得に因て頑なり」と。又「書を讀む多くは旋あつて忘る、酒を除つて數々空く還る」と。唐寅の詩に、「主人拒む莫れ花を看る客、囊に青錢有りて酒除はず」と。高濂の詩に、「頻年釀を罷め老いて酒を愛す、客至れば錢なく強ひて出でて除ふ」

無其辭、而句外有其意者、杜詩、遣人向市  
賒香杭、喚婦出房、親自饌、上言其力貧、故  
曰賒、下言其無使令、故曰親、然則在他席  
言賒、是嘲主人之貧、豈可乎哉、陸放翁詩、  
好事湖邊賣酒家、杖頭錢盡慣曾賒、言酒  
家識客、不必索現金也、某先生詩、有杖錢  
酒可賒之句、不成語矣、爲詩不識字、多貽  
笑者、字義之說、不可不講也、杜詩、蜀酒禁  
愁得、無錢何處賒、言既無錢可買、又無處  
賒也、邵注云、無錢可賒、是何言與、不識字  
而作注、不但害古人之詩、誤後學多矣、  
賒又訓遙、然非但遠之謂、羅鄴、自說歸山  
人事賒、周繇、身沒南荒雨露賒、言隔而不  
及也、蘇頌、春行日漸賒、李中、秋涼夜漏賒、

さ、其義見るべきなり、楊誠齋詩話に云、詩に句中に其辭なくし  
て句外に其意あるものあり、杜詩に、「人を遣り市に向ひて香杭  
を賒ひ、婦を喚び房を出て親く自ら饌す」と、上は其力の貧なる  
を言ふ、故に賒と曰ひ、下は其使令なきを言ふ、故に親といふ、  
然らば則ち他席に在りて賒と言へば、是れ主人の貧を嘲るな  
り、豈に可ならんや、陸放翁の詩に、「好事湖邊賣酒の家、杖頭錢  
盡きて會賒に慣る」と、酒家、客を識りて必らずしも現金を索め  
ざるを言ふなり、某先生の詩に、「杖錢酒賒ふ可し」の句あり、語  
を成さず、詩を爲りて字を識らず、笑を貽す者多し、字義の説は  
講ぜざるべからざるなり、杜詩に、「蜀酒愁を禁じて得、錢無し  
何れの處にか賒はん」と、既に錢の買ふべき無く、又賒ふに處  
無きを言ふなり、邵注に云、錢の賒ふべき無し、是れ何の言ぞ  
や、字を識らずして注を作る、但に古人の詩を害するのみなら  
ず、後學を誤るゝこと多し。

賒は又遙と訓す、然れども但だ遠きを謂ふに非ず、羅鄴の「自ら  
説ふ山に歸りて人事の賒なるを」周繇の「身は南荒に没して雨  
露賒なり」、隔て、及ばざるを言ふなり、蘇頌の「春行きて日漸

張錫春歸景未除猶言長也韋元旦四望  
 韶陽春未除猶言深也王筠蟲飛曉尙除  
 范成大殘蠟猶除十日春韓琦尙去重陽  
 五日除洪邁節到中和暖尙除言待之遲  
 緩也唐彥謀與滿金樽酒量除訓優言寬  
 弘也戴叔倫王粲登樓興不除僧處默十  
 年歸恨可能除猶言舒也方孝孺弟唱兄  
 酬興味除亦訓深言不盡也謝朓徒使春  
 帶除駱賓王坐憐夜帶除猶言緩也韓偓  
 本是謀除死囚之致劫遷陸游過望猶除  
 死扶老又入冬又年踰八十猶除死寬除  
 之義猶云延引也是其義隨用隨轉讀者  
 詳之可也

依約依侑約略也蓋物色隱微之貌依微

く除なり」李中の「秋涼しくして夜漏除なり」、張錫の「春歸りて景未だ除ならず」、猶ほ長しと言ふがごこし、韋元旦の「四望韶陽春未だ除ならず」、猶ほ深しと言ふがごこし、王筠の「蟲飛んで曉尙ほ除なり」、范成大的「殘臘猶ほ除なり十日の春」、韓琦の「尙ほ重陽を去る五日除なり」、洪邁の「節は中和に到りて暖尙ほ除なり」、之を待つゝの遲緩なるを言ふなり、唐彥謀の「興高ちて金樽酒量除なり」、優し訓し、寬弘を言ふなり、戴叔倫の「王粲、樓に登りて興除ならず」、僧處默の「十年歸恨能く除なるべし」、猶ほ舒と言ふがごこし、方孝孺の「弟は唱へ兄は酬ひ興味除なり」、深し訓し、盡きざるを言ふなり、謝朓の「徒に春帶を除ましむ」、駱賓王の「坐に憐む衣帶の除むを」、猶ほ緩と言ふがごこし、韓偓の「本是れ死を除ふせんこを謀り、之に因て劫遷を致す」、陸游の「望を過ぎて猶ほ死を除ふし、老を扶けて又冬に入る」、又、年は八十を踰へて猶ほ死を除ふす、寬除の義にして猶ほ延引と言ふがごこし、是れ其義隨つて用ひ隨つて轉ず、讀者之を詳にして可なり。

依約、依侑は約略なり、蓋、物色隱微の貌なり、依微、隱約は、其

隱約其義皆同、若夫彷彿亦不分明之貌、大同而小異也、溫庭筠美人詩、連娟眉繞山、依約腰如杵、趙嘏月詩、何事最能愁、少婦、夜來依約落邊城、章冠之、梅欲飄零猶醞藉、柳纔依約已風流、楊萬里詩題、霧中見靈山、依約不真、皆謂微而不的也、又白居易骨肉都盧無十口、糧儲依約有三年、猶云大抵也。

闌珊凋散貌、李群玉、絲管闌珊歸客散、曹唐南斗闌珊北斗斜、白居易、春意闌珊日又斜、詩情酒興漸闌珊、風景闌珊欲過春、韓偓飲席話舊多闌珊、樽酒闌珊將遠別、皮日休、細雨闌珊眠驚覺、吳融圍碁闌珊半局和、微醉、曾鞏食筍、花事闌珊竹事初

義皆な同じ、若し夫れ彷彿も亦分明ならざるの貌にして、大同にして小異なり、溫庭筠の美人の詩に、「連娟の眉は山を繞らし、依約の腰は杵の如し」、趙嘏の月の詩に、何事ぞ最も能く少婦を愁へしむ、夜來依約ミして邊城に落つ、章冠之の「梅は飄零せんミ欲して猶ほ醞藉、柳は纔かに依約ミして已に風流」、楊萬里の詩題に、霧中に靈山を見れば、依約ミして真ならず、皆な微にして的ならざるをいふなり、又白居易の「骨肉は都盧て十口なく、糧儲依約三年あり」は、猶ほ大抵ミ云ふがごとし。

闌珊は凋散の貌、李群玉の「絲管闌珊ミして歸客散す」、曹唐の「南斗は闌珊北斗は斜なり」、白居易の「春意闌珊ミして日又斜なり」、詩情酒興漸く闌珊、「風景は闌珊春を過ぎんミ欲す」、韓偓の「飲席に舊を話す多くは闌珊」、「樽酒闌珊ミして將に遠く別れんミす」、皮日休の「細雨闌珊ミして眠驚覺む」、吳融の圍碁に「闌珊たる半局微醉に和す」、曾鞏の筍を食ふに「花時闌珊たり竹事の初」、姜夔の燈市に「燈已に闌珊ミして月氣寒

姜夔燈市燈已闌珊月氣寒高啓歲暮舊曆闌珊欲罷看是也韓偓枕霞紅黯淡淚粉玉闌珊言玉古而蒼老也范成大競船人醉鼓闌珊言打鼓慢緩也又元稹欲終心懶慢轉恐興闌散散讀平聲與珊同又作闌殘陳師道燈火闌殘歌舞散楊萬里元宵風物又闌殘俱音通也。

宋人填詞爲一代絕藝猶晉之字唐之詩也是以其詩往往有詞曲之調昔人評張籍詩如優工行鄉飲醜獻秩如時有詼氣余於宋詩亦云甚則不啻入小石調直陷張打油胡釘鉸矣故學宋詩者須知是弊而避其轍也。

焦氏筆乘云蜀王衍宮詞月華如水浸宮

し、高啓の歲暮に「舊曆闌珊として看を罷めんぞ欲す」、是なり、韓偓の「枕霞紅黯淡、淚粉玉闌珊」は、玉古くして蒼老なるを言ふなり、范成大の「船を競ふの人は酔て鼓するこゝ闌珊たり」は、鼓を打つの慢緩なるを言ふなり、又元稹の「終らんぞ欲して心懶慢、轉た恐る興の闌散たるを」、散は平聲に讀む、珊と同じ、又闌殘に作る、陳師道の「燈火闌殘として歌舞散す」、楊萬里の「元宵の風物又闌殘」は、俱に音通なり。

宋人の填詞は、一代の絶藝たり、猶ほ晉の字、唐の詩のこゝし、是を以て其詩は往々詞曲の調あり、昔人張籍の詩を評して、優工の郷飲を行ふが如く、醜獻秩如、時に詼氣ありと、余は宋詩に於ても亦云ふ、甚だしきは則ち番に小石調に入るのみならず、直に張打油、胡釘鉸に陥る、故に宋詩を學ぶ者は、須らく是の弊を知りて、其轍を避くべきなり。

焦氏筆乘に云、蜀の王衍の宮詞に、「月華、水の如く宮殿を浸す」

殿、近世詞曲、月明如水、浸樓臺、祖此、然水浸宮殿、雖有形容、而乏醞藉、入詞曲、可入詩、則不可、乃知杜詩、四更山吐月、殘夜水明樓、真古今絕唱也、又一書載、李秋崖與金谷郎秋夜論詩、時微雨新霽、片月初生、秋崖曰、章蘇州流雲吐華月、興象天然、覺張子野雲破月來花弄影、便多少著力、谷郎曰、豈但著力不著力、意境迥殊、一是詩語、一是詞語、格調亦迥殊也、卽如花間集、細雨濕流光、句、在詞家爲妙語、在詩家則靡靡矣、此可以見詩與詞之別、猶國雅之與連歌也、近人耽宋詩、率帶詩餘聲口、殆以連歌體詠國雅者耳、彼輩罵明詩爲僞詩、此不尤僞詩哉。

ミ、近世の詞曲に「月明水の如く樓臺を浸す」は、此を祖とするなり、然れども、水、宮殿を浸すは形容ありき雖も、而も醞藉に乏し、詞曲に入るは可なり、詩に入るは不可なり、乃ち知る杜詩の「四更、山、月を吐き、殘夜、水、樓に明かなり」は、真に古今の絕唱なり、又た一書に載す、李秋崖は金谷郎ミ秋夜に詩を論ず、時に微雨新に霽れ、片月初めて生ず、秋崖曰く、章蘇州の「流雲華月を吐く」は興象天然、張子野の「雲破れ月來りて花影を弄す」は便ち多少力を著くるを覺ゆミ、谷郎曰く、豈に但だ力を著くるミ力を著けざるミのみならんや、意境迥に殊なり、一は是れ詩語にして、一は是れ詞語、格調も亦迥に殊なり、卽ち花間集の「細雨流光を濕ほす」の句の如き、詞家に在りては妙語たり、詩家に在りては則ち賸々たり、此れ以て詩ミ詞ミの別を見る可し、猶ほ國雅ミ連歌ミのミミし、近人宋詩に耽り、率ね詩餘の聲口を帶び、殆んど連歌體を以て國雅を詠する者のみ、彼の輩、明詩を罵りて僞詩ミ爲す、此れは尤も僞詩ならずや。

眼字附而穩、殊可吟玩、五言第三字、七言第五字、謂之眼字、  
 五言唐太宗、雲凝愁半嶺、霞碎纈高天、王維、泉聲咽危石、日色冷青松、杜甫、峽雲籠  
 樹小湖日盪船明、雲氣噓青壁、江聲走白沙、竹光園野色、舍影漾江流、石角鈎衣破、  
 藤枝刺眼新岑參、澗水吞樵路、山花醉藥欄、澗花然暮雨、潭樹暖春雲、孤燈燃客夢、  
 寒杵搗鄉愁、劉禹錫、秋蟲鏤宮樹、野水齧荒墳、白居易、露竹偷燈影、烟松護月明、仁  
 風扇道路、陰雨菑閭闔、石片擡琴匣、松林閣酒杯、吳融、林風移宿鳥、池雨定流螢、賈  
 島、流星透疎木、走月逆行雲、曉角吹人夢、秋風卷雁群、許渾、晴烟和草色、夜雨長溪  
 痕、溫庭筠、葦花編虎落、松櫻鬪藥爐、姚合、

眼字は附にして穩なれば、殊に吟玩す可し、五言は第三字、七言は第五字、之を眼字と云ふ、五言に、唐の太宗の「雲凝て半嶺愁ひ、霞碎けて高天に纈す」、王維の「泉聲危石に咽び、日色青松冷かなり」、杜甫の「峽雲樹を籠めて小に、湖日船を盪して明なり」、雲氣青壁に噓ふき、江聲白沙に走る、「竹光野色を圍み、舍影江流に漾ふ」、「石角衣を鈎して破り、藤枝眼を刺して新なり」、岑參の「澗水樵路を呑み、山花藥欄に酔ふ」、「澗花暮雨に然え、潭樹青雲暖かなり」、「孤燈客夢を燃し、寒杵鄉愁を搗く」、劉禹錫の「秋蟲宮樹を鏤し、野水荒墳を齧む」、白居易の「露竹燈影を偷み、煙松月明を護る」、「仁風道路を扇き、陰雨閭闔に菑す」、「石片琴匣を擡げ、松林酒杯を閣す」、吳融の「林風宿鳥移り、池雨流螢定まる」、賈島の「流星疎木に透り、走月行雲に逆ふ」、曉角人夢を吹き、秋風雁群を巻く、許渾の「晴烟草色に和し、夜雨溪痕を長す」、溫庭筠の「葦花虎落を編み、松櫻藥爐に鬪ふ」、姚合の「萬愁旅衣に生じ、百病

萬愁生旅夜、百病湊衰年。馬戴紅韁跑駿馬、金鏃掣秋鷹。周繇海濤搗砌檻、山雨灑窓燈。廖凝衆木排疎影、寒流壘細紋。薛能戰血粘秋草、征塵攪夕陽。僧齊己湖雲粘雁重、廟樹刮風乾。僧靈徹窓風枯硯水、山雨慢琴絃。王安石城雲漏日晚、樹凍裏春深。宋祁水落呈全嶼、雲生失半山。陸游灘急回魚隊、天低襯雁行。楊萬里雨蒲拳病葉、風篠禿危梢。真山民櫓聲搖客夢、帆影掛離愁。沈德符曠日圓鶯吻、柔泥固燕基。七言杜甫返照入江翻、石壁歸雲擁樹失。山村李洞藥杵聲中擣殘夢、茶鑪影裏煮孤燈。許渾青山有雪諳松性、碧落無雲稱鶴心。楊萬里幾絲微雨噴前山、半點輕寒

衰年に湊る、馬戴の「紅韁駿馬を跑らし、金鏃秋鷹を掣す」、周繇の「海濤砌檻に搗き、山雨窓燈に灑ぐ」、廖凝の「衆木疎影を排し、寒流細紋を壘む」、薛能の「戦血は秋草に粘し、征塵は夕陽に攪す」、僧齊己の「湖雲雁に粘して重く、廟樹風に刮て乾く」、僧靈徹の「窓風硯水枯れ、山雨琴絃慢なり」、王安石的「城雲日を漏す晚く、樹凍春を裏で深し」、宋祁の「水落ちて全嶼を呈し、雲生じて半山を失す」、陸游の「灘急にして魚隊を回し、天低れて雁行を襯す」、楊萬里の「雨蒲病葉を拳し、風篠危梢を禿す」、真山民の「櫓聲客夢を搖かし、帆影離愁を掛く」、沈德符の「曠日鶯吻圓かに、柔泥燕を固くす」、七言に、杜甫の「返照江に入りて石壁に翻り、歸雲樹を擁して山村を失す」、李洞の「藥杵聲中殘夢を擣き、茶鑪影裏孤燈を煮る」、許渾の「青山雪有りて松性を諳し、碧落雲無く鶴心に稱ふ」、楊萬里の「幾絲の微雨前山に噴

健牡丹稻花雪白糝柳絮、柘子猩紅團荔  
枝范成大誰從天上罕遮月、不管人間大  
欠詩李觀天放舊光還日月、地將濃秀與  
山川渾然圓妥、工而無痕、眼字亦謂之響  
字、要活活則自響。

敢論肯信、忍能、忍更、可堪、可無、可能、得非、  
諸如此類、皆不用豈字、而勢自相反、王涯  
閨人贈遠、不省出門行、沙場知近遠、錢起  
故鄉多久別、春草不傷情、李嶠、不見抵今  
汾水上、唯有年年秋雁飛、杜甫、久客得無  
淚、故妻難及晨、將軍不好武、稚子總能文、  
起晚堪從事、行遲更覺仙、雲近蓬萊常五  
色、雪殘鷓鴣亦多時、繡衣屢許攜家醜、包  
蓋能忘折野梅、舞石旋應將孔子、行雲莫

き、牛點の輕寒牡丹健なり、「稻花雪白糝柳絮に糝し、柘子猩紅荔  
枝團なり」范成大の「誰か天上より罕く月を遮る、管せず人間大  
に詩を欠く」、李觀の「天は舊光を放つて日月を還し、地は濃秀  
を將て山川に與ふ」は、渾然圓妥、工にして痕なし、眼字、亦之を  
響字と謂ふ、活せんことを要す、活すれば則ち自から響く。

敢て論ぜん、肯て信ぜん、忍で能せん、忍ぶ更に、堪ふ可けん、無  
かる可けん、能くす可けん、非るを得ん、諸、此の如きの類は、  
皆豈の字を用ひず、而して勢自ら相反す、王涯の閨人、遠に贈る  
「門を出て行くを省せざらんや、沙場近遠を知る」、錢起「故郷多  
くは久別、春草情を傷ましめざらんや」、李嶠「見すや紙今汾水  
の上、唯年年秋雁の飛ぶ有り」、杜甫「久客涙無きを得んや、故  
妻晨に及び難し」、將軍武を好まざらんや、稚子總て文を能く  
す、「起るこゝに晚く事に従ふに堪へんや、行くこゝに遲し更に仙  
を覺ゆ」、「雪は蓬萊に近くして常に五色、雪は鷓鴣に残して亦  
多時」、「繡衣屢く許す家醜を攜ふを、包蓋能く忘れんや野梅を

自濕仙衣短牆若在隨殘草喬木如存可  
 假花徐賓一生有酒唯知醉四大無根可  
 預量徐府公是主人身是客舉觴登望得  
 無愁陳造愁禁客舍雨寒過杏花時劉克  
 莊夜寒不作關山夢萬一君王起舊人書  
 生行李堪抽點惹苴明珠一例無李仲淵  
 可容贊善窺唐壤要遣莎車拜漢廷洪邁  
 上苑春光無盡藏可須羯鼓更催花程俱  
 離騷痛飲非名士歎段還鄉亦善人楊萬  
 里太上垂衣今上拜百王曾有箇風流徐  
 渭試問歌臺生草處當時曾許外人行亦  
 皆加豈字看蓋古人多以語急而省其文  
 者如書不愼其德雖悔可追又我生不有  
 命在天左傳若愛重傷則如勿傷愛其二

折るを、「舞石旋て應に孔子を將ふるなるべし、行雲自ら仙衣  
 を濕す莫らんや」、「短牆若し在らば殘草に隨はん、喬木如し存  
 するも花に假す可けんや」、徐賓、「一生酒有り唯、醉を知る、  
 四大根無し預め量る可けんや」、「徐俯、「公は是れ主人身は是れ  
 客、觴を舉て登望す愁無きを得んや」、陳造、「愁禁へんや、客舍  
 の雨、寒は過く杏花の時」、劉克莊、「夜寒して關山の夢を作さ  
 ざらんや、萬一君王舊人を起さん」、「書生行李抽點に堪へんや、  
 惹苴明珠一例に無し」、李仲淵、容す可けんや贊善の唐壤を窺ふ  
 を、要するに莎車をして漢廷を拜せしめん、洪邁、「上苑の春  
 光無盡藏、須ふ可けんや羯鼓更に花を催すを」、程俱、離騷痛飲  
 名士に非ざらんや、歎段還郷に還るも亦善人、楊萬里、「太上は  
 衣を垂れて今上は拜す、百王曾て箇の風流有らんや」、徐渭、「試  
 に問ふ歌臺草を生するの處、當時曾て許さんや外人の行くを」、  
 亦皆豈の字を加へて看る、蓋、古人語の急なるを以て、其の文を  
 省く者多し、書の其の徳を愼まざらんや、悔ゆも雖も追ふ可け  
 んや、又、我が生、命の天に在る有らざらんや、左傳の若し重傷

毛、則如服焉。孟子雖褐寬博、吾不備焉、不唯詩詞也。

文字有顛倒可用者、衾衣、羊牛、見詩國風、此其濫觴歟、如圖畫、羅綺、絃管、毛羽、主賓、弟兄、淡濃、白黑、伊吾、盧胡之類、固先後自在也、若其涉奇僻、不得流便者、前脩有例、不足多效、然至其不得已、或隨韻而協之、爲歷舉古句、以備副急之用爾、古樂府獨漉篇、夜衣、錦繡、誰別、僞、真、蔡琰悲憤詩、登高遠眺望、魂神復、忽逝、張協、紅粒貴、瑤瓊、陶潛、江湖多、賤貧、又、雷同共譽毀、謝靈運、河充當、衝要、江淹、玉樹信、葱青、駱賓王、一言忘、賤貴、李嶠、聊將狎、遞肥、蘇頌、寥、沈、秋先起、杜甫、戀闕勞、肝肺、實唯親、弟昆、無端

を愛まば、則ち傷くる勿きに如かんや、其の「毛を愛まば則服するに如かんや、孟子の褐寬博」雖ども、吾備れざらんやの如し、唯し詩詞のみならずなり。

文字に顛倒して用ふ可き者有り、衾衣・羊牛は、詩の國風に見ゆ、此れ其の濫觴か、圖畫・羅綺・絃管・毛羽・主賓・弟兄・淡濃・白黒・伊吾・盧胡の類の如き、固より先後自在なり、若し其れ奇僻に涉り流便を得ざる者は、前脩に例有るも、多く效ふに足らず、然れども其已むを得ざるに至しは、或は韻に隨ひて之に協ふ、爲めに古句を歷舉して、以て副急の用に備ふるに似たり、古樂府の獨漉篇に、「夜、錦繡を衣る誰か僞眞を別たん」、蔡琰の悲憤の詩に、「高に登て速く眺望す、魂神復た忽ち逝く」、張協の「紅粒瑤瓊を貴ぶ」、陶潛の「江湖賤貧多し」、又、雷同共に譽毀、「謝靈運の「河充當衝要に當る」、江淹の「玉樹信に葱青」、駱賓王の「一言賤貴を忘る」、李嶠の「聊か將に遞肥に狎れん」と、蘇頌の「寥沈秋先づ起く」、杜甫の「闕を戀ひて肝肺を勞す」、實に唯く親弟昆、「端無く賤盜起る」、「點染蘇薰無し」、「噴寒早々分る」、「衣

賊盜起、黠染無、滌盪、喧寒早、早分、衣馬自肥輕、韓愈誰與同息、偃分知隔、明幽、應對自差參、藏昂抵、橫坂、磨淬出、角圭、韋應物、下以報渴、飢、白居易、荷、菱、綠、參、差、許、棠、沙潮、通、越、分、李、山、甫、笑、傲、出、裴、盛、薛、光、謙、出雲爲、雨、風、孟、翔、羅、薦、自、紫、綬、李、賈、多、慙、接豆、邊、孟、貫、暮、雲、催、燭、燈、方、干、何、路、出、泥、塵、徐、黃、深、谷、化、陵、邱、姚、合、慎、勿、信、邪、讒、令、子無、寒、饑、陸、禹、臣、丹、竈、虎、龍、蟠、僧、皎、然、日、月爲、虛、盈、寒、山、子、作、事、莫、莽、鹵、無、可、呈、詩、問否、臧、集、物、圓、方、別、齊、己、詩、推、異、輩、流、吟、覺骨、毛、寒、池、塘、啄、細、微、貫、休、宗、社、運、微、衰、終須、神、鬼、哀、塵、埃、中、更、有、埃、塵、李、嶠、壇、場、宮館、盡、蒿、蓬、李、白、長、吁、莫、錯、還、閉、關、李、群、玉、

馬自肥輕、韓愈の「誰と與に息偃を同うせん」、分知明幽を隔つ、「應對自ら差參」、「藏昂横坂に抵す」、「磨淬角圭を出だす」、韋應物の「下以て渴飢に報す」、白居易の「荷菱綠參差」、許棠の「沙潮越分に通ず」、李山甫の「笑傲裴盛を出だす」、薛光謙の「雲を出でて雨風を爲る」、孟翔の「羅薦紫綬を留ふ」、李賈の「多慙豆邊に接す」、孟貫の「暮雲燭燈を催す」、方干の「何の路か泥塵に出つ」、徐黃の「深谷、陵邱に化す」、姚合の「慎で邪讒を信する勿れ」、「子に寒饑無から令ん」、陸禹臣の「丹竈虎龍蟠る」、僧皎然の「日月虛盈を爲す」、寒山子の「事を作す莽鹵なる莫れ」、無可の「詩を呈して否臧を問ふ」、「物を集めて圓方別る」、齊己の「詩は推す輩流に異なり」、「吟は覺ゆ骨毛の寒きを」、「池塘細微を啄む」、貫休の「宗社の運微衰」、「終に神鬼の哀むを須つ」、「塵埃の中更に埃塵有り」、李嶠の「壇場宮館盡く蒿蓬」、李白の「長吁錯る莫れ還た關を閉るを」、李群玉の「市朝遷變秋蕪綠なり」、段堯藩の「咫尺長陵又鹿糜」、羅隱の「堪へず戎馬の戦征頻

市朝遷變秋蕪綠、般堯藩、咫尺長陵又鹿麋、羅隱、不堪戎馬戰、征頻、李咸用、更教何處認愚賢、唐求、殿臺渾不似塵寰、李中、新開幽澗蘚苔斑、周曇、子陽才業匪雄英、孫元晏、幾施經略挫雄豪、鼎分從此定、雄雌魚玄機、深巷窮門少侶儔、呂巖、迷途終是任埋沈、徐鉉、零冰響、佩環張耒、肴酒笑、俗具、蘇軾、萬世一仰俯、公私困留稽、十年臥江海、了不見、愠喜、林景熙、海桑變紛紛、翁卷、賦得拙疎性、包拯、草盡免狐愁、唐觀、恩光變、燼灰、戴復古、鳳麟不可見、李觀、柳下無仲尼、小官終滅磨、范成大、云何人感欣、乃係、汝張欸、陳與義、聲到竹松寒、真山民、卜鳩、天雨晴、韓維、便收才業放、虞唐、林珣、

夜航詩話卷之五

なるに、李咸用の「更に何の處か愚賢を認め教めん」、唐求の「殿臺渾て塵寰に似ず」、李中の「新に幽澗を開て蘚苔斑なり」、周曇の「子陽才業雄英に匪ず」、孫元晏の「幾ひか經略を施して雄豪を挫く」、「鼎分此より雄雌を定む」、魚玄機の「深巷窮門侶少し」、呂巖の「迷途終に是れ埋沈に任へたり」、徐鉉の「零冰瓊環に響く」、張耒の「肴酒俗具を笑ふ」、蘇軾の「萬世一仰俯」、「公私留稽に困む」、「十年江海に臥す、了に愠喜を見ず」、林景熙の「海桑變して紛々」、翁卷の「賦し得たり拙疎の性」、包拯の「草盡て免狐愁ふ」、唐觀の「恩光燼灰に變ず」、戴復古の「鳳麟見る可からず」、李觀の「柳下に仲尼無し」、「小官終に滅磨す」、范成大的「云何人の感欣、乃ち汝の張欸に係る」、陳與義の「聲は竹松に到て寒し」、真山民の「鳩を卜す天雨晴」、韓維の「便ち才業を收めて虞唐に放す」、林珣の「人間の斤斧手を容れ難し」、葉夢得の「浪りに愧つ將軍の鼓旗を建つるに」、王禹偁の「季路の旨甘知る已めり」、潘安の「毛鷲史に皓然」、陳師道の「肯て精神

人間斤斧難容手、葉夢得、浪愧將軍建鼓旗、王禹偁、季路旨甘知己矣、潘安、毛髯更  
 幡然、陳師道、肯費精神修客主、稍回功譽  
 入、章篇韓駒、更慙爾雅注、魚蟲、曹輔攀、羅  
 捫壁疲、獲藏、韓忠彥、廟祠稽首尊先聖、錢  
 鏐、出處未用相劣優、王安石、陰森喬木帶  
 漪漣、陳仲平、海山地僻少迎將、汪大猷、又  
 向梅山得楷模、姜特立、尙記金華舊範模、  
 若許詩篇數還往、劉知過、晚來煙雨忽斜  
 橫、繆瑜、勿以斯語同優俳、汪元量、地面官  
 人餽酒葦、陳傅良、僧鐘遮莫報昏晨、黃庭  
 堅、草木文章、帝杼機、陳造、假真笑我陳驚  
 座、日力莘莘有食眠、楊萬里、半淡半濃山  
 疊重、其人甚遠只嗟咨、陸游、點檢庭花見

を費して客主を修めん、稍功譽を回して準備に入る、韓駒の「更に慙つ爾雅、魚蟲を注す」、曹輔の「蘿を攀ぢ壁を捫し獲藏を疲す」、韓忠彥の「廟祠稽首先聖を尊ぶ」、錢鏐の「出處未だ用ひず相劣優」、王安石の「陰森喬木漪漣を帶ぶ」、陳仲平の「海山地僻にして迎將少し」、汪大猷の「又梅山に向て楷模を得たり」、姜特立の「尙記す金華の舊範模」、若し詩篇數のみ還往するを許さば、劉知過の「晚來煙雨忽ち斜橫」、繆瑜の「斯語を以て優俳に同する勿れ」、汪元量の「地面官人酒葦を餽る」、陳傅良の「僧鐘遮莫あれ昏晨を報す」、黃庭堅の「草木文章帝の杼機」、陳造の「假真笑ふ我が陳驚座」、日力莘々食眠有り、楊萬里の「半淡半濃山疊重」、其の人甚だ遠く只嗟咨、陸游の「庭花を點檢して故新を見る、何に物か能く我が重輕を爲ん」、桃李真成に僕奴のみ、劉克莊の「曝芹終に清光に獻せんミ微す」、卻て芸香を以て自ら沐薫す、「輶車を著し戸門を辱しむる莫れ」、茲に姚鈔を得て手づから闔開す、「阡陌東西山北南」、見意に刻深

故新何物能爲我重輕桃李眞成僕奴爾  
 劉克莊曝芹終欲獻清光卻以芸香自沐  
 蕭莫著帽車辱戶門茲得姚鈔手闔開阡  
 陌東西山北南免被兒童議刻深葉蔭禮  
 畫圖著我笠蓑翁僧惠洪乞與雲烟相盪  
 摩鬢髮凋零仲欠中朱弁甘脆響牙齒陳  
 孚閻闔鷺鷁班趙秉文山頭佛屋五三間  
 劉迎勝槩須君與題品李汾龍野山川自  
 吐吞蔡松年高人法士互憎愛幾年和月  
 買泉林周琦重江限越吳王逢契濶商參  
 恨誦絃家櫛比歐陽玄石隙花開自夏春  
 薩都刺倚檻觀魚自悅怡張昱海水蓬萊  
 見淺清王揮給緜爲業略相同陳野雲方  
 丈虛齋自廓寥薛宗海實與萬民同成休

夜航詩話卷之五

を譲せ被るるを免る、葉蔭禮の「畫圖我が笠蓑翁を著す」、僧惠洪の「雲烟に乞與し相盪摩す、鬢髮凋零す仲欠の中」、朱弁の「甘脆牙齒に響く」、陳孚の「閻闔鷺鷁の班」、趙秉文の「山頭佛屋五三間」、劉迎の「勝槩君を須て與に題品せん」、李汾の「龍野山川自ら吐吞す」、蔡松年の「高人法士互に憎愛す」、幾年か月に和して泉林を買ふ」、周琦の「重江越吳を限る」、王逢の「契濶商參の恨み」、誦絃家櫛比す」、歐陽玄の「石隙花開て自ら夏春」、薩都刺の「檻に倚て魚を觀て自ら悅怡す」、張昱の「海水蓬萊淺清を見る」、王揮の「給緜業を爲す略は相同じ」、陳野雲の「方丈虛齋自ら廓寥」、薛宗海の「實に萬民ミ成休を同ふす」、李東陽の「廟廊治理に資す」、貝瓊跡已に信用に従す」、屠應埏の「江濶にして雨雲多し」、逸祖の「幽僻倫隱に宜し」、俞安期の「舟楫昏朝に雙す」、王一鳴の「鼓鐘曙を迎ふる念なり」、楊慎の「燈は騰る金

李東陽、廟廊資、治理、貝瓊跡已從、信屈、屠  
 應浚、江濶雨雲多、遂昶、幽僻宜淪隱、俞安  
 期、舟楫變昏朝、王一鳴、鼓鐘迎曙急、楊慎、  
 焰騰金酋、齒函灰聚、玉麟麟、宋登春、任爾呼  
 牛馬、隨予愛犬豚、王鎰、如今松菊徑、已傍  
 虎豺場、袁凱、巨魚出沒浪波腥、陳則、不獨  
 陽山死、歲薇邊、貢荒涼、棋社隔、秋春、李夢  
 陽、可憐大厦須、梁棟、高士奇、北窓風、至似  
 皇義、彭年、梁稻方、謀燕雀、安許邦才、野館  
 孤燈半、滅明、張適、荒村迎送還、難免、王翺  
 無復郊原伴、黍禾、張正蒙、華林園、冷露霜  
 凝、黎民表、雕楹深、鑽柏松、枝、朱有燾、凶吉  
 占、年北俗、淳表、中道、塵事何曾掛、笑鬢、宇  
 鑿之、局門非敢傲、鄰比、錢謙貞、鹿蕉覆處

二四二

齒酋、灰は聚る玉麟麟、宋登春の「爾か牛馬を呼ぶに任す、予に  
 隨て犬豚を愛す」、王鎰の「如今松菊の徑、已に傍ふ虎豺の場」、  
 袁凱の「巨魚出沒浪波腥」、陳則の「獨り陽山の死歲薇のみな  
 らず」、邊貢の「荒涼たる棋社は秋春を隔つ」、李夢陽の「憐む可  
 し大厦、梁棟を須ふ」、高士奇の「北窓風至て皇義に似たり」、  
 彭年の「梁稻方に謀る燕雀の安きを」、許邦才の「野館孤燈半は  
 滅明」、張適の「荒村迎送還た免れ難し」、王翺の「復た郊原の黍  
 禾に伴ふ無し」、張正蒙の「華林園冷にして露霜凝る」、黎民表  
 の「雕楹深く鑽さず柏松の枝」、朱有燾の「凶吉年を占ふ北俗の  
 淳」、袁中道の「塵事何ぞ曾て笑鬢に掛らん」、宇鑿之の「門を局  
 づ敢て鄰比に傲るに非ず」、錢謙貞の「鹿蕉覆ふ處鄰を分ち難  
 し」、阮大鍼の「野憤は知らず雕黍の恨み」、鄭迪光の「枿檀都て  
 麝蘭の香を作す」、許彬の「終南雲散て疎屏開く」、熊卓の「野婦

難分鄭阮大猷野曠不知離黍恨鄒廸光  
 稱檀都作麝蘭香許彬終南雲斂障屏開  
 熊卓野塘歷亂鷺鷥繁楊慎影形相贈晉  
 詩人宋節婦要把奸頑盡除播僧來復種  
 就曇花伴象龍右隨得漫錄宜擇而取焉  
 庶幾免乎窮斯濫矣。

明景泰中一粟監不學判蘇州誤寫石人  
 爲仲翁滑稽者作詩嘲之曰翁仲將來作  
 仲翁只因書讀欠夫工馬金堂玉如何入  
 紙好州蘇作判通天順初英廟大獵從官  
 皆戎服弓矢以護蹕應制賦詩祭酒劉某  
 詩以瑯弓爲弓瑯大學生輕薄者帖詩於  
 監門云獵羽楊長共友僚瑯弓詩倒作弓  
 瑯祭酒如今爲酒祭銜官何以達廷朝一

歷亂鷺鷥繁し、楊慎の「影形相贈る晉の詩人」、宋節婦の「奸頑  
 を把て盡く除掃せん」を要す、僧來復の「種は曇花に就いて  
 象龍に伴ふ」、右得るに隨ひ漫に録す、宜しく擇んで取るべ  
 し、庶幾くば窮すれば斯に濫するを免れん。

明の景泰中、一粟監の不學のもの蘇州に判たり、石人を誤り寫  
 して仲翁と爲す、滑稽者、詩を作て之を嘲て曰く、「翁仲將ち來  
 りて仲翁と作す、只、書讀の夫工を欠くに因る、馬金堂玉如何  
 か入らん、鴉た好し州蘇に判通と作るに」と、天順の初、英廟大  
 に獵す、從官皆戎服し、弓矢以て蹕を護す、制に應じ詩を賦す、  
 祭酒劉某の詩に、瑯弓を以て弓瑯と爲す、大學生の輕薄なる者、  
 詩を監門に帖して云ふ、「獵羽楊長友僚と共にす、瑯弓詩倒にし  
 て弓瑯に作る、祭酒如今酒祭と爲る、銜官何を以て廷朝に達せ  
 ん」と、一時相傳へて以て笑と爲す、升菴文集に見ゆ、附記して

時相傳以爲笑、見升菴文集、附記以爲戒、  
漢皋詩話云、韓愈孟郊輩、才豪故有慨慷  
瓏玲之語、後人難倣效、按、魏武短歌行、慨  
當以慷、憂思難忘、岑參詩、蒼然西郊遠、握  
手願慨慷、揚雄賦、前殿崔巍、和氏瓏玲、  
又見太玄經、非創於韓孟也。

王梅溪守泉州、會邑宰、勉以詩曰、九重天  
子愛民深、令尹宜懷惻隱心、今日黃堂一  
盃酒、使君端爲庶民樹、夫使爲司牧者、皆  
若梅溪之存心、又何患乎僚佐之不善也、  
真西山帥長沙、示諸邑宰詩曰、豈有脂膏  
供爾祿、不思痛癢切吾身、此亦宜使農官  
屬吏、皆爲柱聯、挂諸座右也。

杜荀鶴再經胡城縣詩曰、去歲曾經此縣

以て戒を爲す。

漢皋詩話に云、韓愈孟郊輩、才豪なるが故に慨慷瓏玲の語有  
り、後人倣效し難しと、按するに魏武の短歌行に、「慨當さにて  
慷すべし、憂思忘れ難し」、岑參の詩に「蒼然西郊遠し、手を握  
て願て慨慷す」、揚雄の賦に、「前殿崔巍たり、和氏瓏玲」、又た太  
玄經に見ゆ、韓孟に創るに非るなり。

王梅溪、泉州に守たり、邑宰を會し、勉むるに詩を以てす、曰く  
「九重の天子民を愛する深し、令尹宜しく懐くべし惻隱の心、今  
日黃堂一盃の酒、使君端に庶民の爲めに斟む」と、夫れ司牧た  
る者をして皆梅溪の心を存するが若くならしめば、又何ぞ僚佐  
の善からざるを患へんや、真西山の長沙に帥たりしとき、諸邑  
宰に示す詩に曰く、「豈脂膏の爾が祿に供する有らん、思はず  
痛癢吾が身に切なり」と、此れ亦宜しく農官屬吏をして皆柱聯  
を爲し、諸を座右に掛けしむべし。

杜荀鶴、再び胡城縣を經る詩に曰、「去歲曾て此の縣城を經る、

城縣民無口不冤聲、今來縣宰加朱紱、便是生靈血染成、嗚呼、斯民、太平之無日、古今同慨也哉。

白樂天詩、敢辭爲俗吏、且欲救窮民、又云、心中爲念農桑苦、耳裏如聞饑凍聲、擊哉志也、眞萬家生佛矣、宜所至遺愛之深也、李約觀祈雨云、桑條無葉土生烟、簫管迎龍水廟前、朱門幾處看歌舞、猶恐春陰咽管絃、呂溫、早中見權門移芍藥花云、綠原青壠漸成塵、汲井開園日日新、四月帶花移芍藥、不知憂國是何人、此韓退之詆京兆尹李實所云、春夏京畿大旱、民乏食、實一不以介意、每奏對、輒曰、今年雖旱而穀甚好、由是租稅皆不免、人窮至賣屋以應

縣民の口、冤聲ならざるは無し、今來縣宰朱紱を加ふ、便ち是れ生靈血染め成す、嗚呼斯の民、太平の日無き、古今同慨なるかな。

白樂天の詩に、「敢て辭せんや俗吏と爲るを、且つ窮民を救はんを欲す」と、又云、心中農桑の苦を念ふが爲めに、耳裏饑凍の聲を聞くが如し」と、擊なるかな志や、眞に萬家生佛せん、宜なり至る所遺愛の深き。

李約の雨を祈るを觀るに云、「桑條葉無く土、烟を生ず、簫管龍を迎ふ水廟の前、朱門幾處か歌舞を看る、猶恐る春陰管絃に咽ぶを」と、呂溫が、早中に權門の芍藥花を移すを見るに云、「綠原青壠漸く塵を成す、井に汲み園を開き日日新なり、四月花を帯びて芍藥を移す、知らず國を憂ふは是れ何人ぞ」、此れ韓退之の京兆の尹李實を詆りて云ふ所、春夏京畿大に旱す、民、食に乏し、實一も以て意に介せず、奏對する毎に輒ち曰く、今年旱すも雖、穀甚だ好しき、是に由て租稅皆免せず、人窮して屋を賣り以て官に應ずるに至る、良に慨嘆す可きなり、劉克莊、旱を憂ふるに云、「嗚鳥下り飲んで百川空し、民自ら龍を祠り社公に

官者良可慨嘆也。劉克莊憂旱云、鳴鳥下飲百川空、民自祠龍麟社、公豈是長官、渾忘卻水車聲不到城中、余最愛之、婉而成章、風人之旨、所謂言之者無罪、而聞之者足以戒也、因憶宋人楊仲元、調宛邱簿、民訴旱、守拒之曰、邑未嘗旱、此狡吏導民而然、仲元入白曰、野無青草、公日宴黃堂、宜不能知、但一出郊可見矣、狡吏非他、實仲元也、竟得免稅、此可作劉詩注說。

凡諸侯府下、神會景象、關於地方盛衰之兆、棚車鼓吹、倡樂雜戲、風流盛觀、令人矐真、四境之內、扶老攜幼、麇至蟻集、填街溢巷、誠亦昇平之樂事、所謂百日之蜡、一日之澤也、抑雖花費頗甚、然小民多有藉此

禱者、豈是長官の渾べて忘卻するならんや、水車の聲は城中に到らず、余最も之を愛す、婉にして章を成す、風人の旨なり、讀はゆる之を言ふ者罪無く、而して之を聞く者以て戒むるに足るなり、因て憶ふ、宋人楊仲元、宛邱簿を調す、民、旱を訴ふ、守之を拒で曰く、邑未だ嘗て旱せず、此れは狡吏、民を導いて然す、仲元入て白して曰く、野に青草無し、公日に黃堂に宴す、宜へなり知る能はざるや、但だ一たび郊に出では見る可し、狡吏は他に非ず、實に仲元なり、竟に税を免るざるを得たり、此れ劉詩の注說を作す可し。

凡そ諸侯府下、神會景象は、地方の盛衰の兆に關す、棚車鼓吹、倡樂雜戲、風流盛觀、人をして矐真せしむ、四境の内、老を扶け幼を攜へ、麇至蟻集、街に填ち巷に溢る、誠に亦昇平の樂事なり、謂はゆる百日の蜡、一日の澤なり、抑、花費頗る甚し、雖、然も小民多く此に藉りて衣食に資する者有り、亦富家の羨艱を

資衣食者、亦損富家之羨、鑷以度貧民之餬口也。且親朋邀宴、團樂叙澗、年例相期待、以爲樂、人情於是乎萃矣。俗吏不知大體、宜無以褊見行殺風景、以致不祥之兆也。但好事強民、甚不可也。宋元豐中、蔡君謨守福州、上元夜、令民間一家點燈七盞、有處士陳烈者、作大燈長丈餘、大書曰「富家一盞燈、大倉一粒粟、貧家一盞燈、父子相對哭、風流太守知不知、猶恨笙歌無妙曲、君謨見之、還與罷燈、此可以鑿也、抑亦君謨仁厚可尙、若遭頑昧暴官、陳烈殆矣。」世有庚申會、相傳三井寺開祖、智證大師、西渡時傳來、謂人身中有尸蟲、亦云三彭、記人隱匿、每庚申夜、乘人睡、升告之天、或

損し、以て貧民の餬口を成るなり、且つ親朋邀へ宴し、團樂澗を叙す、年例に相期待し、以て樂を爲す、人情是に於て萃る、俗吏、大體を知らず、宜しく褊見を以て殺風景を行ひ、以て不祥の兆を致す無かるべし、宋の元豐中、蔡君謨、福州に守たり、上元の夜、民間をして一家に燈七盞を點せしむ、處士陳烈といふ者有り、大燈長さ丈餘なるを作り、大書して曰、富家の一盞燈、大倉一粒の粟、貧家の一盞燈、父子相對して哭す、風流太守知るや知らずや、猶笙歌の妙曲無きを恨むと、君謨之を見て、輿を還し、燈を罷む、此れ以て鑿す可きなり、抑、亦君謨仁厚尙ぶ可し、若し頑昧の暴官に遭はば、陳烈は殆からん。

世に庚申會といふもの有り、相傳ふ三井寺の開祖、智證大師、西渡の時傳來す、謂ふ人身中に尸蟲有り云、亦三彭云云、人の隱匿を記し、庚申の夜毎に、人の睡に乘じ、升りて之を天に告ぐ、

謂是夜有惡星降入人骸竅間伺察其罪惡蓋本道家之教也於是俗間比鄰結社或鳴磬念佛或置酒絃歌徹夜守之不寐不亦癡騷之甚耶五雜俎載祀竈神事笑其不修行於平日而持素於一旦政與此類天其可欺乎唐末朝士會終南太極觀守庚申道士程紫霄笑曰此吾師託是以懼爲惡者爾據牀求枕作詩曰不守庚申亦不疑此心常與道相依玉皇已自知行止任爾三彭說是非投筆鼻息如雷見避暑錄異端中自有可人

杜荀鶴將過湖南經馬頭山廟詩九江連海一般深未必船經廟下沈頭上蒼蒼沒曠處不如平取一身心爲恐俗臨事遽念

按、避暑錄異話字、

或は謂ふ、是の夜惡星有り、降て人の骸竅の間に入り、其の罪惡を伺察す、蓋、本、道家の教なり、是に於て、俗間比鄰、社を結び、或は磬を鳴らし、佛を念し、或は置酒絃歌し、徹夜之を守りて寐ねず、亦癡騷の甚しきならずや、五雜俎に、竈神を祀る事を載せ、其の行を平日に修めずして、素を一旦に持するを笑ふ、政に此に類す、天其れ欺く可けんや、唐末、朝士終南の太極觀に會し、庚申を守る、道士程紫霄、笑て曰く、此れ吾師是に託して惡を爲す者を懼らすのみと、牀に據り枕を求め、詩を作て曰く、「庚申を守らざるも亦疑はず、此心常に道に相依る、玉皇已に自ら行止を知る、爾が三彭の是非を説くに任す」と、筆を投じて鼻息雷の如し、避暑錄に見ゆ、異端中自ら可人有り。

杜荀鶴、將に湖南を過きんとす、馬頭山の廟を經る詩に、「九江海に連て一般深し、未必しも船・廟下を經り沈まず、頭上蒼々々曠する處なし、如かず一生の心を平取するに」と、愚俗事に臨み、遽に念佛する者の爲に、喫緊撞棒と謂ふ可し、醉古堂劍掃に

佛者、可謂喫緊痛棒矣。醉古堂劍掃云、對青天懼聞雷霆而不驚、蹈平地恐涉風波而不疑、爲士君子者、不當如是耶。

司空圖狂歌、昨日流鶯今日蟬、起來又是夕陽天。六龍飛轡長相窘、何忍臨危更著鞭。此戒好色自戕者、視鄭邀翠娥、紅粉嬋娟、劍殺盡世人、人不知、更婉而有味。宜書以揭于寢室也。蕙畝拾英集載、吳給事女敏慧、工詩詞、歸華陽陳子朝、名儒也。晚年感一妾、緣此遂病中風。一日親戚來訪、吳同妾在側、因指妾曰、此風之始也。後西南士大夫、凡有所感者、皆以爲口實、是雖戲謔、亦足以警矣。

杜詩露從今夜白、月是故鄉明、此離拆白

云、蕙、青夫に對して懼れ、雷霆を聞き驚かず、平地を蹈んで恐れ、風波を涉りて疑はず、士君子たる者、當に是の如くなる可からざらんや。

司空圖の狂歌に、「昨日は流鶯今日は蟬、起來又是れ夕陽の天、六龍轡を飛ばし長に相窘む、何ぞ忍びん危に臨んで更に鞭を著くるを」と、此れ色を好み自ら戕（ま）ふ者を戒む、鄭邀の「翠娥紅粉嬋娟の劍、世人を殺し盡して人知らず」といふに視（ま）ぶれば、更に婉にして味有り、宜しく書して以て寢室に掲ぐべし、蕙畝拾英集に載す、吳給事の女、敏慧にして詩詞に工なり、華陽の陳子朝に歸す、名儒なり、晩年一妾に感ひ、此に緣りて遂に中風を病む、一日親戚來り訪ふ、吳、妾と同じく側に在り、因て妾を指して曰く、此れ風の始めなりと、後、西南の士大夫、凡そ感ずる所有る者、皆以て口實（ま）爲す、是れ戲謔（ま）雖、亦以て警むるに足る。

杜詩に、「露は今夜（ま）從り白く、月は是れ故郷に明か」と、此れ白露

露明月、而倒用之、語峻而體健、上句蓋是、夜白露節、如別來頭併白、相見眼終青、無風雲出塞、不夜月臨關、委波金不定、照席綺愈依、亦皆此法、公祖審言咏月、暫將弓竝曲、翻與扇俱圓、是其所淵源也。

清人毛穉黃云、詩必相題、猥瑣尖新、淫褻等題、可無作也、詩必相韻、故拈險俗、生澁之韻、可無作也、與余所雅言、若合符節、故喜而錄之。

惺窩先生、遊大德寺詩、喝雷棒、雨響、西東、知是高僧住、此中野性由來無、箇事瘦藤挑、月倚秋風、語意俱工、足稱合作、諸家選本、不收、此何耶、蓋皆不見集本也、余家所藏本、有正保天子御製序、夫布衣遺稿、得

明月を離折し、而して倒に之を用ふ、語峻にして體健なり、上句は蓋、是れ夜、「別來頭併て白し、相見て眼終に青し」、「風無きに白露の韻」、雲、塞を出で、夜ならざるに月、關に臨む」、「波に委して金定らず、席を照して綺愈、依る」の如き、亦皆此の法なり、公の祖、審言、月を咏じ、「暫く弓と竝に曲り、翻つて扇と俱に圓なり」と、是其淵源する所なり。

清人毛穉黃云ふ、詩は必ず題を相る、猥瑣・尖新・淫褻等の題、作る無かる可し、詩は必ず韻を相る、故に險俗・生澁の韻を拈せば、作る無る可しと、余の雅言する所と、符節を合すが若し、故に喜びて之を録す。

惺窩先生、大德寺に遊ぶ詩に、「喝雷棒雨西東に響く、知る是れ高僧の此の中に住するを、野性由來箇の事無し、瘦藤月を挑て秋風に倚る」と、語意俱に工なり、合作と稱するに足る、諸家の選本、此を收めざるは何ぞや、蓋皆集本を見ざればなり、余が家藏する所の本、正保天子御製の序有り、夫れ布衣の遺稿、御序を賜ふを得、先生の徳の至り、古今一人のみ、烏丸公光廣、稱して

賜御序先生之德之至古今一人而已、烏丸公光廣稱爲華衰之榮云、今本無載、不知何謂、良可惜也。

日本詩史曰、慳窩逃佛歸儒、不畜妻妾、不御酒肉、人或詰之曰、我歸於儒也、崇其道耳、不我知者、謂爲食色、吾德不足服人、不能不避嫌耳、那波氏學問源流亦云、蓋以爲美談也、余嘗竊謂先生豪傑之士、斯文中興宗師、乃區區拘乎俗見、而大欠人倫之本、又終身長齋、徒爲在家僧、惡在其爲先生耶、恐其不然也、見林學士所撰行狀、先生有男女子各一人、性嗜酒、痛飲而不亂、又謝門人魚肉之餽、數見書牘中、答長嘯子書云、荷一孟之嘉穀、快屠門之大嚼、

華衰の榮を爲す云、今本載する無し、何の謂なるを知らず、良に惜む可きなり。

日本詩史に曰、慳窩、佛を逃れ儒に歸す、妻妾を畜へず、酒肉を御せず、人或は之を詰る、曰く、我は儒に歸するなり、其の道を崇ぶのみ、我を知らざる者は、食色の爲めにす、謂はん、吾が徳、人を服するに足らず、嫌を避けざる能はざるのみ、那波氏の學問源流にも亦云、蓋、以て美談を爲す、余嘗て竊に謂ふ、先生は豪傑の士、斯の文中興の宗師、乃ち區々として俗見に拘はり、而して大に人倫の本を欠く、又終身長齋す、徒に在家の僧たり、惡んぞ其先生たるに在らんや、恐くば其れ然らざらん、林學士の選する所の行狀を見るに、先生男女各一人有り、性酒を嗜む、痛飲して亂れず、又門人に魚肉の餽を謝するに、數、書牘の中に見ゆ、長嘯子に答ふる書に云、一孟の嘉穀を荷け、屠門の大嚼を快にす、又嘗て駿府に赴き、家に別るゝ歌あり、

又嘗赴駿府有別家歌情見乎詞年來疑案讀之曉然男即冷泉公爲景是也冷泉氏先生本房故入繼統官至中將先生文集公所輯也。

薩摩沙門文之惺窩同時人書與曰鄉關千里喜生還鏡裏看來首已斑富貴熏天皆外物獨繙黃卷對青山亦合作也文之博學能文著有四書訓點南浦文集如竹居士者文之高弟逃佛歸儒然不畜髮不近酒色嘗仕我藩太祖後爲琉球王賓師詩史所錯稱乃斯人之事鳩巢文集有傳言之詳矣。

唐人書詩文必用熟紙韓文公與陳給事書云送孟郊序用生紙寫急于自解不暇

情詞に見はる、年來の疑案、之を讀んで曉然たり、男は即ち冷泉公爲景、是れなり、冷泉氏は先生の本房、故に入て統を繼ぐ、官、中將に至る、先生の文集は公の輯する所なり。

薩摩の沙門文之は、惺窩と同時の人、興を書して曰、郷關千里生還を喜ぶ、鏡裏看來れば首已に斑なり、富貴天を熏す皆外物、獨り黃卷を繙いて青山に對す、亦合作なり、文之、博學にして文を能くす、著に四書訓點、南浦文集有り、如竹居士は文之の高弟、佛を逃れて儒に歸す、然れども髮を畜へず、酒色を近けず、嘗て我藩の太祖に仕ふ、後、琉球王の賓師と爲る、詩史に錯り稱する所、乃ち斯の人の事、鳩巢文集に傳有り、之を言ふこと詳なり。

唐人の詩文を書するには、必ず熟紙を用ふ、韓文公の陳給事に與ふる書に云ふ、孟郊を送る序、生紙を用ひて寫す、自解に急に

擇耳、蓋生紙當是草上所用、故以用此錄文、爲不敏也、熟謂槌熟、唐書百官志、秘書監有熟紙匠八人、蓋打紙工也、薛能詩、越臺隨厚俸、刻硃得尤名、自注、近相傳、擣熟紙名硃、陸放翁詩、硃教紙熟脩溫卷、傲得驢騎候熱官、其義尤明、或人寫詩必用硃紙、誤矣、放翁又云、閑吟寄友唯生紙、草具留僧只野蔬、則宋人不必用熟紙也、其詳載諸蒼瓊錄、邵氏聞見錄所云、恐謬說耳、

古人以稽首爲敬之至、諸侯拜天子、大夫士拜其君之禮也、古者人臣於君亦止再拜、孟子以君命將之、再拜稽首而受、是也、故東漢表文、用稽首再拜、臣上書稱味死

禮也、古自敵者皆從頓首拜、頓首、首頓於手

して、擇ぶに暇あらざるのみ、蓋、生紙は當に是れ草上に用ふる所なるべし、故に此を用ひて文を録するを以て、不敏と爲すなり、熟とは槌熟を謂ふ、唐書百官志に、秘書監の熟紙匠八人有り、蓋、打紙工なり、薛能の詩に、越臺厚俸に隨ふ、刻硃尤名を得たり、自注に、近ごろ相傳ふ、擣熟紙は硃と名く、陸放翁の詩に、硃、紙をして熟せしめ温卷を脩す、驢騎を傲ひ得て熱官に候す、其の義尤明なり、或人、詩を寫すに、必ず硃紙を用ふ、誤れり、放翁又云ふ、「閑吟友に寄す唯、生紙、草具僧を留む只野蔬」と、則宋人、熟紙を用ふるを必とせざるなり、其詳は諸を蒼瓊錄に載す、邵氏聞見錄に云ふ所は、恐くは謬說のみ。

古人、稽首を以て敬の至りと爲す、諸侯の天子を拜し、大夫士の其の君を拜するの禮なり、古は人臣の君に於ける、亦再拜に止る、孟子、君命を以て之を將ふ、再拜稽首して受く、是れなり、故に東漢の表文、稽首再拜を用ふ、臣上書稱味死

古禮に、敵者より、皆頓首拜に従ふ、頓首とは、首、手に頓するのみ、禮は末世に至りて繁し、今人の書割、多く百拜と稱す、創

而已。禮至末世而繁。今人書劄多稱百拜。不知創自何人。明太祖以其非實禮。諭禮部改定儀式。令人遵守。然通用既久。以爲至敬。時俗所尙。終不可已。故奉詩於君。從風雅用之。余於蒼瓊錄論之詳矣。平禮稱拜而已。下交用肅拜可也。周禮注。肅。揖也。

百拜字出樂記。言飲酒之禮。賓主交拜之多耳。陳子昂爲建安王獻食表曰。天子萬年。永慶南山之壽。微臣百拜。長承北極之恩。此爲人臣拜君之稱。其昉於唐人歟。

贈人詩文押印。上用白文姓名印。下用朱文表字印。或用號印。非也。若非贈人者。用號印亦可。但押之名印上不可也。名印。白文。爲正式。朱文。爲正式。其詳。見學古編。字印。號印。須從朱文。其詳。見蒼瓊錄。此不復具。上君詩。上

むる何人よりするを知らず、明の太祖、其の實禮に非るを以て、禮部に諭して、改めて儀式を定め、人をして遵守せしむ、然れども通用既に久し、以て至敬と爲す、時俗の尙ぶ所、終に已む可からず、故に詩を君に奉る、風雅に従ひ之を用ふ、余、蒼瓊錄に於て之を論ずること詳なり、平禮には拜と稱するのみ、下交には肅拜を用ひて可なり。周禮の注に、肅は揖なり、

百拜の字、樂記に出づ、飲酒の禮、賓主交拜するの多きを言ふのみ、陳子昂、建安王の爲めに食を獻する表に曰く、天子萬年、永く南山の壽を慶す、微臣百拜、長く北極の恩を承く、此れ人臣君を拜するの稱と爲すは、其れ唐人に昉まるか。

人に贈る詩文に、印を押す、上に白文の姓名印を用ひ、下に朱文の表字印を用ふ、或は號印を用ふるは非なり、若し人に贈る者に非れば、號印を用ふるも亦可なり、但、之を名印の上に押すは不可なり、名印は、白文を正式と爲す、就は學古編に見ゆ、字印、號印は、須く朱文に従ふべし、其詳は蒼瓊錄に

用姓名印、下用臣某印、左臣一字、右名二字、共白文、倣漢王疾已、王始昌印、見郎瑛古圖書、不知禮者、或用字印、故爲詳其說、又士庶人印、或曰某之章、僭也、漢官儀、吏秩二千石以上、銀印龜鈕、其文曰章、曰某官之章、蓋其稱次、璽也。

取風雅語作條印、印於書幅之首、謂之引首印、俗稱關防印、謬矣、關防者、官府文書關防、姦僞條印也、法當施簡端、或題次押非也、是物古未之聞、蓋起於宋人、云、朱象賢印典、引梅菴雜誌、極爲杜撰可笑、然雅事緣飾於義、無害、雖非古制、從衆可也、但其語太過、風流、或所謂講道學來者、竝不可用已。

敵す、此に復君に上る詩、上に姓名印を用ひ、下に臣某印を用ひ、具せず、左に臣の一字、右に名の二字、共に白文、漢王疾已、王始昌の印に倣ふ、郎瑛の古圖書に見ゆ、禮を知らざる者は、字の印を用ふ、故に爲に其の説を詳にす、又士庶人の印、或は某の章と曰ふは、僭なり、漢官儀に、吏秩二千石以上は、銀印龜鈕、其の文に章と曰ひ、某官の章と曰ふ、蓋、其の稱は璽に次ぐなり。

風雅の語を取て條印を作り、書幅の首に印す、之を引首印と謂ふ、俗に關防印と稱す、謬れり、關防とは官府の文書、姦僞を關防する條印なり、法、當に簡端に施すべし、或は題次に押すは非なり、是の物古未だ之を聞かず、蓋、宋人に起る云ふ、朱象賢の印典に、梅菴雜誌を引く、極て杜撰笑ふ可しと爲す、然れども雅事緣飾、義に於て害無し、古制に非ずと雖、衆に従ふて可なり、但、其の語、太た風流に過ぎ、或は謂はゆる道學を講じ來る者、竝に用ふ可からざるのみ。

詩人方寸印中、記其鄉貫世系、以求知於人、鄙矣、余嘗見一輕浮子印曰、淡海鶴鷄氏支族姓名之章、下印曰、字予曰某、別號某、家在某山下某處、何其不憚煩也、又見一希姓人印曰、某天皇勅賜某姓、押之已名下、小人無忌憚之甚矣。

人各以己鄉爲誇、好稱風土人物之美、或斥其非、則怒而欲爭矣、蘇秦之遊說也、必先美其國、以悅主之心、余初讀史、頗病其鄭重、及遊歷四方、始知其善體人情、所以鑽六王之巧也、唐時、伊周昌遊茶陵、其民採芒織履、因題縣門曰、茶陵一道好長街、兩畔栽柳不種槐、夜後不聞更漏鼓、只聽鈿芒織草鞋、縣官及胥吏皆怒、即日逐出

詩人方寸印中に、其の郷貫世系を記し、以て人に知らるゝを求む、鄙なり、余嘗て一輕浮子の印を見るに、曰く、淡海鶴鷄氏の支族姓名の章、下印に曰く、予を字して某と曰ふ、別號は某、家は某山の下の某處に在り、何ぞ其の煩を憚らざるや、又、一希姓人の印を見る、曰く、某天皇勅して某姓を賜ふ、之を己が名の下に押す、小人忌憚無きこと甚し。

人各、己が郷を以て誇を爲し、好で風土人物の美を稱す、或は其の非を斥せば、則ち怒りて争はんことを欲す、蘇秦の遊說するや、必ず先づ其の國を美めて以て主の心を悅ばす、余初め史を讀み、頗る其鄭重を病む、四方に遊歷するに及び、始めて其の善く人情を體し、六王に鑽するの巧なる所以を知る、唐の時、伊周昌、茶陵に遊ぶ、其の民芒を採り履を織る、因て縣門に題して曰く、茶陵一道好長街、兩畔柳を栽えて槐を種えず、夜後聞かず更漏の鼓、只、聽くを鈿して草鞋を織るを、縣官及び胥吏、皆怒り、即日界より逐出せり、他邦に遊ぶ者、宜しく監戒

界、遊他邦者、宜監戒也。

一犁雨言農畝霑足、杜詩、一犁春雨足、蓋民待雨得、一霎輒試鋤地、見其潤之所透、蘇轍詩、雨深一尺春耕足、卽其義也、又、吳融梅雨、中庭自有兩犁泥、又有半鋤雨、半犁泥、皆自杜詩來。

劉郇伯、一星深戍火、李群玉、一星幽火照、又魚言一點微少、韋莊、春橋南望水溶溶、一桁晴山倒碧峰、言連山如一衣桁、皮日休、欠買桐江一朶山、猶言一片、花瓣比、韓偓、小港春添水半腰、言纔深及腰、溫庭筠、萬家砧杵三篙水、猶日三竿之例、陸龜蒙、一簪秋髮未曾梳、言僅足插簪、王周、一鈎新月未沈西、言細而曲、陸游、一梳殘月

こそべきなり。

一犁の雨は、農畝の霑足するを言ふ、杜詩に、「一犁春雨足る」、蓋、民雨を待ちて一霎を得、輒ち試に地を鋤き、其の潤の透る所を見る、蘇轍の詩に、「雨は深し一尺春耕足る」と、卽ち其の義なり、又、吳融の梅雨に、「中庭自ら兩犁泥有り」、又、半鋤の雨、半犁の泥といふあり、皆杜詩より來る。

劉郇伯「一星深戍の火」、李群玉「一星の幽火又魚を照す」、一點微少を言ふ、韋莊、「春橋南に望めば水溶々、一桁の晴山碧峰を倒にす」、連山・一衣桁の如きを言ふ、皮日休、「買ふを欠く桐江一朶の山」、猶ほ一片と言ふがごとし、花瓣を以て比するなり、韓偓、「小港春は添ふ水半腰」、纔に深さ、腰に及ぶを言ふ、溫庭筠、「萬家の砧杵三篙の水」、猶ほ日三竿の例の如し、陸龜蒙、「一簪の秋髮未だ會て梳らず」、僅に簪を挿むに足るを言ふ、王周、「一鈎の新月未だ西に沈まず」、細くして曲れるを言ふ、陸游、「一梳の残月新霜に伴ふ」、半輪、梳に挿むが如きを言ふ、皆一

伴新霜言半輪如挿梳皆一樣文字。

杜詩紅顏白面花映肉東坡海棠詩翠袖卷紗紅映肉肉謂人肌膚俗甚不可做響也誠齋詩草色染成藍樣翠桃花洗出肉般紅尤不堪穢矣邦俗忌穢爲禮播磨粟那長門穴戶氏皆用古文蓋肉字嫌瀆尊貴清覽故避之也況以花比肉乎好奇者或犯故爲表之。

弔慰詩文印用青色凶禮不可用朱故易之也嘗見人詩印用青色余怪之蓋居喪云吁制中可弄翰墨耶二蘇兄弟居喪再期之內禁斷作文章況肯詠詩乎何也詩乃有韻之文正哀感不暇之時奚爲其操觚拈韻哉故古人無哭父母詩況於他題

様の文字なり。

杜詩に「紅顏白面花肉に映ず」、東坡の海棠の詩に「翠袖紗を巻いて紅肉に映ず」、肉は人の肌膚を謂ふ俗甚し、做響す可からざるなり、誠齋の詩に「草色染成して藍樣に翠、桃花洗ひ出して肉般紅なり」、尤も穢に堪へず、邦俗穢を忌むを禮と爲す、播磨の粟那郡、長門の穴戸氏、皆古文を用ふ、蓋肉の字は尊貴の清覽を瀆すを嫌ふ、故に之を避くるなり、況や花を以て肉に比するをや、奇を好む者、或は犯す、故に爲に之を表す。

弔慰の詩文、印は青色を用ふ、凶禮に朱を用ふ可からず、故に之に易ふるなり、嘗て人の詩印、青色を用ふるを見て、余之を怪む、蓋、喪に居るに云ふ、吁、制中翰墨を弄す可けんや、二蘇兄弟喪に居る、再期の内、文章を作るを禁斷す、況んや肯て詩を詠するをや、何となれば、詩は乃ち有韻の文、正に哀感不暇あらざるの時、奚爲れど其れ觚を拈り韻を拈らんや、故に古人、父母を哭する詩無し、況や他題に於てをや、謝惠連、先に會稽郡史杜德靈

乎、謝惠連先愛會稽郡吏杜德靈、及居父憂、贈以五言詩十餘首、文行于世、坐廢不豫、榮伍其致清議、如是、可不監也哉。

讚州九龜女才子、井上氏通子、詠剪綵牡丹、呈我先君了義公詩及國字卅一之什、余獲而藏之、如左、歲己巳孟春藤堂侯尊君、爲大姊養性君、以剪綵牡丹紅白兩枝、遠自勢州致之江府、大姊君慰悅無限、深感其友愛之情、芳乎千里之外、因命妾獻鄙詞、雖恥此花之奇巧艷麗、然尊命不可辭、謹綴短篇、敢呈閣下、誰剪餘霞綺、裁成貴綵新、豔華殊絕世、秀色永留春、妙見經營手、工欺造化神、芳馨千里外、明德仰淳仁、字加美具作、字加起個個路乃、遂涅餘

を愛す、父の愛に居るに及び、贈るに五言詩十餘首を以てす、文世に行はる、坐廢して榮伍に據らず、其の清議を致す是の如し、監みざるべけんや。

讚州九龜の女才子、井上氏通子、剪綵の牡丹を詠し、我が先君了義公に呈する詩及び國字卅一の什、余獲て之を藏す、左の如し、歲己巳孟春、藤堂侯の尊君、大姊養性君の爲に、剪綵の牡丹紅白兩枝を以て、遠く勢州より之を江府に致す、大姊君慰悅限り無く、深く其の友愛の情、千里の外に芳しきに感じ、因て妾に命じ詞を獻ぜしむ、此の花の奇巧艷麗に恥づミ雖、然も尊命辭す可からず、謹で短篇を綴り、敢て閣下に呈す、誰か霞綺を剪り餘し、裁成して貴綵新なり、豔華殊に絶世、秀色永く春を留む、妙は見はる經營の手、工は欺く造化の神、芳馨千里の外、明德、淳仁を仰ぐ、字加美具作、字加起個個路乃、遂涅餘里耶、

里耶、加加留伊路可乃波奈八佐起計時、元祿二年閏正月廿六日、井上氏通百拜、余嘗讀井上氏歸家日記、及處女賦、驚其才識之秀、又見鳩巢可觀錄、白石諸公、稱其人品、不諱文藻也、巾幗中有若人於戲、不尤偉哉。

先侯鶴汀公、博學善詩、恐當時諸侯中、無比肩者、笠置山覽古詩、并序、維昔元和己未之歲、台德公、易我南勢之田、割賜城和二州之地、於是笠置之山、入我封疆矣、今茲安永丁酉九月、巡封之次、登覽于此、山水之奇、巖壑之幽、固不可勝言也、余嘗讀史、深悲元弘之亂、夫當時勤王之兵、仗義奮勇、一可以敵百、而山之險、要害尤固、非

加加留伊路可乃、波奈八佐起計時、元祿二年閏正月廿六日、井上氏通百拜す、余嘗て井上氏の歸家日記及び處女賦を讀み、其の才識の秀に驚く、又、鳩巢の可觀錄を見るに、白石諸公、其の人品を稱す、唯に文藻のみならずなるなり、巾幗中に若のこゝき人有り、於戲尤も偉ならずや。

先侯鶴汀公、博學詩を善くす、恐くば當時諸侯の中、肩を比ぶる者無からん、笠置山覽古の詩、并に序、維れ昔元和己未の歲、台德公、我が南勢の田に易へて、城和二州の地を割賜せらる、是に於て笠置の山、我が封疆に入る、今茲安永丁酉九月、巡封の次、此に登覽す、山水の奇、巖壑の幽、固に勝けて言ふ可からず、余嘗て史を讀み、深く元弘の亂を悲む、夫れ當時勤王之兵、義に仗り勇を奮ひ、一以て百に敵す可し、而して山の險、要害尤も固し、姦賊の間道より襲ふに非れば、安を肯て敗績に至らんや、

姦賊襲間道、安肯至、敗績耶、蓋山下飛鳥  
 路村民爲之導云、我笠置邑人、深惡其不  
 義、至今四百餘年、尙不肯通嫁娶、嗟呼、此  
 宜稱義鄉、可與仁里作對也、行宮之陷、實  
 屬季秋、余遊適當其時、尤不勝感慨、斐然  
 作辭、聊述懷古之恨、庶亦後來者、其有所  
 觀感矣、名山鬱岿業、佳氣接帝州、壯哉山  
 河固、化城倚上頭、鬼工怪巖峻、峭勢蒼崖  
 嶮、嶺石門幽、探勝登覽窮絕頂、儻然物外  
 雲霞遊、君不見元弘天子蒙塵日、間關投  
 跡此地留、維南有木協靈夢、相見何晚楠  
 子謀、風飄錦旗懸日月、雲擁金甲列玃貅、  
 敵愾忠奮義烈士、銳銳懾悍猗賊讐、積骸  
 填塞地獄壑、木津河水漲血流、王師負險

蓋、山下トヤカサの飛鳥路村の民之が導を爲す云ふ、我か笠置邑の人、  
 深く其の不義を惡み、今に至るまで四百餘年、尙肯て嫁娶を通  
 ぜずと、嗟呼此れ宜く義郷と稱す可し、仁里と對を作す可きな  
 り、行宮の陷る、實に季秋に屬す、余か遊適、其の時に當る、尤  
 感慨に勝へず、斐然として辭を作り、聊か懷古の恨を述ふ、庶く  
 は亦後來の者、其れ觀感する所有らん、一、名山鬱ウツクとして岿業、佳  
 氣帝州に接す、壯なるかな山河の固、化城上頭カキに倚る、鬼工怪巖  
 峻嶮の勢、蒼崖嶮嶮ウツク石門幽、勝を探り登覽して絶頂を窮む、儻  
 然物外雲霞の遊び、君見すや、元弘の天子蒙塵の日、間關跡を投  
 じて此の地に留る、維れ南に木有り靈夢に協ふ、相見る何ぞ晚  
 き楠子の謀、風は錦旗を懸して日月を懸け、雲は金甲を擁して  
 玃貅を列す、愾に敵する忠奮義烈の士、銳を銳く懾悍猗賊の讐、  
 積骸填塞す地獄壑、木津河水血を漲らして流る、王師險を負ひ

賊估衆未知攻戰幾時休、一夜間道狂颯  
 火、金碧伽藍忽薪燭、君王避難迷行在、風  
 流摺紳多俘囚、旂旄影滅雲漠漠、鼓角聲  
 斷鹿呦呦、蔓天草木搖落日、悲風慘愴戰  
 塲秋、獨有蕭條山水景、陳迹千古鬼神愁、  
 或請造碑建諸山上、臣力贊獎之、屬有故  
 不果、山靈亦應抱憾焉惜哉。

詩用得字謂其不易得也、人間能得幾回  
 聞、借問漢宮誰得似、常得君王帶笑看、自  
 憐深院得徊翔、品流應得近山雞、皆言其  
 所不可得而能得之也、僧貫休、上蜀主王  
 建詩、一瓶一鉢垂垂老、千水千山得得來、  
 言以垂垂投老之身、陵其不易得來而至、  
 猶言故故也、東坡詩知是多情得得來多

賊衆を怙む、未だ知らず攻戰幾時か休まん、一夜間道狂颯火、  
 金碧伽藍忽ち薪燭す、君王難を避けて行在に迷ふ、風流の摺紳  
 多くは俘囚、旂旄影は滅して雲漠々、鼓角聲は断えて鹿呦々、蔓  
 天草木搖落日、悲風慘愴戰塲の秋、獨り蕭條たる山水の景の  
 み有り、陳迹千古鬼神愁ふこ、或ひこ碑を造りて諸を山上に建  
 てんこ請ふ、臣力めて之を贊獎す、屬故有りて果さず、山靈も亦  
 應に憾を抱くべし、惜ひかな。

詩に得の字を用ふるは、其の得易からざるを謂ふなり、「人間  
 能く幾回か聞くを得ん」、「借問す漢宮誰か似たるを得ん」、「常  
 に君王の笑を帯びて看るを得」、自ら憐む深院徊翔するを得た  
 り、「品流應に山雞に近くを得るなるべし」、皆其の得べからざ  
 る所にして能く之を得るを言ふ、僧貫休の蜀主王建に上つる詩  
 に、「一瓶一鉢垂垂老い、千水千山得得こして來る」、垂々、老に  
 投するの身を以て、其來り得易からざるを陵ぎて至るを言ふ、  
 猶ほ故々言ふがこし、東坡の詩に、「知る是れ多情得々こ  
 して來る」、多情の二字ば、即ち得々の由、王建の深く喜ぶ所以

情二字、卽得得之由、王建所以深喜也。

古所謂扶桑樹者、山海經、湯谷之上、有扶桑、十日所浴、在黑齒北、居水

中、有大木、九日居下枝、一日居上枝、楚辭、飲余馬於咸池、兮、馳余轡乎扶桑、淮南子、日出於暘谷、浴於咸池、拂於扶桑、是謂晨明、東方朔十洲記、扶桑國在碧海之中、樹長數千丈、大三千圍、兩樹同根、更相依、蓋在伊豫海濱、洪荒時物云、按史、景行天皇西巡時、履僵臥巨木、度海抵火州、此其是矣、其大且長、何如哉、所謂其未僵之時、當朝日、則隱杵島山、及夕日、則覆阿蘇山者、理或然也、故西土之人稱扶桑國者、指筑紫地方也、王維送晁監、鄉國扶桑外、主人孤島中、章莊送僧敬龍、扶桑已在渺茫中、家在扶桑東、更東言日本去扶桑更遠也、白石先生考以總地爲扶桑、鑿矣、伊豫大洲海底、有撈得

なり。

古謂はゆる扶桑樹は、山海經に、湯谷の上に扶桑あり、十日浴する所、黑齒の北に在り、水中に居る、大木有り、

九日は下枝に居り、一日は上枝に居る、楚辭に余が馬に咸池に飲かひ、余が轡を扶桑に總ぶ、淮南子に、日、暘谷に出て、咸池に浴し、扶桑を拂ふと、是れ晨明を謂ふ、東方朔の十洲記に、扶桑國は碧海の中に在り、樹の長さ數千丈、大さ三千圍、兩樹同根、更相依倚、葉は桑の如し、故に名けて扶桑と爲すと、蓋、伊豫の海濱に在り、洪荒の時の物と云ふ、史を按ずるに、景行天皇西巡の時、僵臥の巨木を履み、海を度り火州に抵るこ、此れ其れ是なり、其大且つ長、何如んぞや、謂はゆる其の未だ僵れざる時、朝日に當ては則ち杵島山を隱し、夕日に及では則ち阿蘇山を覆ふ者、理或は然らん、故に西土の人、扶桑國と稱するは、筑紫地方を指すなり、王維の晁監を送る、鄉國扶桑の外、主人孤島の中と、章莊の僧敬龍を送る、扶桑已在渺茫の中に在り、家は扶桑の東更に東に在り、日本は扶桑を去る更に遠きを言ふなり、白石先生の考に、總の地を以て扶桑と爲すは鑿なり、伊豫の大洲の海底に陰沈木を撈得する者有り、

陰沈木者、道是扶桑朽株、余家藏一小片、色玄木理存、質膩類水沈、磨之生光如玉、牢比石、因琢爲硯、甚工、餘材爲印章及香、撞墜子、貽之後昆、永爲家寶、予所識貴家、有用造碁局者、尤希世之珍也。

人之不良、於師友之阨、不唯不往視、雷同時勢、左祖姦黨、讒誣侮謗、操戈下石、悲夫、晏元獻嘗謂士受人眚、眚隨燥溫變、淪如翻覆手、曾一女子不若、蓋指宋子京而言、元獻當國、子京爲翰苑、晏愛宋之才、雅甚親密之、中秋、晏開宴、召宋出妓、飲酒賦詩、達旦、方罷、翌日晏罷相、宋當草詞、頗極詆斥、至有廣營產以殖私、多役兵而規利之語、方其揮毫之際、餘醒猶在、左右觀者、亦

道ふ是れ扶桑の朽株と、余が家に一小片を藏す、色玄くして木理存し、質膩、水沈に類す、之を磨けば光を生して玉の如し、牢きこも石に比す、因て琢して硯と爲す、甚工なり、餘材は印章及び香撞墜子と爲し、之を後昆に貽し、永く家寶と爲す、予が識る所の貴家に用ひて碁局に造る者有り、尤希世の珍なり。

人の不良なる、師友の阨に於て、唯に往て視ざるのみならず、時勢に雷同し、姦黨に左祖し、讒誣侮謗、戈を操り石を下す、悲ひかな、晏元獻嘗て謂ふ、士、人の眚を受け、燥温に隨ひて變滅す、手を翻覆するが如し、曾ち一女子に若かずと、蓋、宋子京を指して言ふなり、元獻、國に當り、子京、翰苑と爲る、晏、宋の才を愛し、雅より甚だ之を親密す、中秋に晏、宴を開き、宋を召し妓を出し、酒を飲み詩を賦し、旦に達して方に罷む、翌日、晏、相を罷めらる、宋、詞を草するに當り、頗る詆斥を極む、廣く産を營み以て私を殖し、多く兵を役して利を規るの語有るに至る、其の毫を揮ふの際に方り、餘醒猶在り、左右觀る者亦駭歎すこ、

駭歎見漁隱叢話、視徐誨送楊臨賀事、何如哉、又真德秀書趙蕃從劉清之事、曰、蕃於師友之際、蓋如此、肯負國乎、嗚呼、彼輩豈知世有若人哉、噫。

四溟詩話曰、意巧則淺、若劉禹錫遙望洞庭湖水面、白銀盤裏一青螺、是也、句巧則卑、若許渾、魚下碧潭當鏡躍、鳥還青嶂拂屏飛、是也、此寔中窳、余嘗譬之、如俗畫寫真、雖形色相肖、而神彩索然、若王璠芍藥花開菩薩面、棕櫚葉散夜叉頭、尤不勝俗形容、雖巧、苟無風趣、豈詩云乎哉。

枕山樓詩話曰、流淚斷腸等語、初學不宜輕用、唯出唐人點鐵成金之手、覺自有其妙、不見酸楚、如少陵翁、向人涕泣而道亦

漁隱叢話に見ゆ、徐誨の楊臨賀を送る事に視るに、何如ぞや、又、真德秀の趙蕃が劉清之に従ふ事を書して曰く、蕃、師友の際に於て、蓋、此の如し、肯て國に負かんや、嗚呼、彼が豈世に若のこきき人有るを知らんや、噫。

四溟詩話に曰く、意巧なれば則ち淺し、劉禹錫の「遙に望む洞庭湖水の面、白銀盤裏一青螺」の若き、是れなり、句巧なれば則ち卑し、許渾の「魚は碧潭に下りて鏡に當て躍り、鳥は青嶂に還て屏を拂ふて飛ぶ」の若き、是れなり、此れ寔に窳に中る、余嘗て之を譬ふに、俗畫の眞を寫すが如し、形色相肖るも雖も、而も神彩索然たり、王璠の「芍藥花は開く菩薩の面、棕櫚葉は散す夜叉の頭」の若き、尤も俗に勝へず、形容巧も雖も、苟、風趣無ければ、豈詩云はんや。

枕山樓詩話に曰く、流淚、斷腸等の語、初學のもの宜しく輕用すべからず、唯だ唐人鐵を點し金に成すの手に出づれば、自ら其の妙あるを覺へ、酸楚を見ず、少陵翁の如く、人に向て涕泣して道ふ、亦自ら風雅、之を學べば則ち不可なり、此の言大に

自風雅學之則不可、此言大好、扼腕悲歌、風塵睥睨等語、尤不宜輕用、嚴滄浪曰、須是本色、須是當行、學者其慎旃哉。

劉後村憂旱云、輸租常占一村先、不望明時舉、力田老畏里胥如畏虎、敗人詩思擾人眠、此藏句之法、從常字看出、言常畏里胥如此、今歲乃遇旱歉、不免於催租之責、是預可憂也、因憶孟子、如欲平治天下、當今之世、舍我其誰也、吾何爲不豫哉、亦是藏句、言惟其不然是以不豫也、遺一轉語、不肯說盡、而感慨之切溢乎言外、不亦妙乎、從前諸注皆謬、坐不注目如字也。

余咏人影詩、旅館寒燈向隅坐、秋郊斜日先身行、以身對隅、或者譏之、范石湖詩、一

好し、扼腕・悲歌・風塵・睥睨等の語、尤宜しく輕用す可からず、嚴滄浪曰く、須らく是れ本色なるべし、須く是れ當行なるべし、學者其れ旃を慎めや。

劉後村、旱を憂ふるに云ふ、「租を輸す常に一村の先を占む、明時力田を舉るを望まず、老いて里胥を畏るゝ虎を畏るが如し、人の詩思を敗り人の眠を擾す」と、此れ藏句の法、常字より看出す、常に里胥を畏るゝ此の如し、今歲乃ち旱歉に遇ひ、催租の責を免れず、是れ預め憂ふ可きを言ふなり、因て憶ふ、孟子に、如し天下を平治せんことを欲せば、今の世に當りて、我を捨てゝ其れ誰ぞや、吾何爲れど不豫せんやと、亦是れ藏句、惟其れ然らず、是を以て不豫するを言ふ、一轉語を遺し、肯て説き盡さず、感慨の切なる言外に溢る、亦妙ならずや、從前の諸注皆謬る、如の字に注目せざるに坐するなり。

余、人影を咏する詩に、「旅館の寒燈隅に向て坐す、秋郊斜日身に先ちて行く」、身を以て隅に對す、或ひ之を譏る、范石湖の

岡邑屋舊河灘、卻望河身百里間、陸放翁詩、旋繹街頭數升米、黃昏看上店身燈、身謂中央、此其所以對隅也、杜詩、生理祇憑黃閣老、衰顏欲付紫金丹、生理資、生理之事、然借勝理以對顏也、沈雲卿、姓名雖蒙齒錄、袍笏未換、牙緋、金人吳激、手版西山聊復爾、角巾東第定何如、皆是此法、所謂活對也、元人貫酸齋詠、蘆花被、西風刮、夢秋無際、夜月生、香雪滿身、身與際對、不亦工乎。

余論詩弟子、下學工夫、由邇涉遠、宜憑我爲階梯、枕藉鄙集、務摸放之、即在此中作賊、生吞活剝、任爾伎倆、只要螟蛉化蜂、既至其小成、輒脫屣超乘、直變古人之域、三

詩に、「一岡の邑屋舊河灘、卻て望む河身百里の間」、陸放翁の詩に、旋て繹す街頭數升の米、黃昏看、上す店身の燈に、身は中央を謂ふ、此れ其の隅に對する所以なり、杜詩に、「生理祇に憑る黃閣老、衰顏付せん、欲す紫金丹、生理、生に資するは、經理の事、然れども勝理を借り以て顔に對するなり、沈雲卿の、「姓名、齒錄を蒙るに雖も、袍笏、未だ牙緋を換へず」、金人吳激の「手版西山聊か復た爾り、角巾東第定て何如ん」、皆是れ此の法なり、謂はゆる活對なり、元人の貫酸齋、蘆花被を詠す、「西風夢を刮て秋際無し、夜月香を生じて雪、身に滿つ」、身と際と對す、亦工ならずや。

余、詩弟子に論す、下學工夫、邇き由り遠に涉る、宜しく我に憑り階梯と爲し、鄙集を枕藉し、務めて之を摸放すべし、即ち此の中に在りて賊を作す、生吞活剝、爾の伎倆に任す、只、螟蛉蜂に化するを要す、既に其の小成に至れば、輒ち脫屣超乘、直に古人の域を變つ、三、唐宋明は自在なり、是に於て、各、一本を寫し、吟

唐宋明自在也、於是各寫一本、吟詠自資、體裁相肖、漸近自然、故雖黃易施、而上達殊速、師弟俱省勞、方便之捷徑也、此亦教之一術、爲書以貽後進、但師非其人、賊夫人之子、不可不擇也。

石林詩話曰、王荆公嘗有自喜田園安五柳、但嫌尸祝擾庚桑之句、有人稱其的對、公曰、伊但知柳對桑爲的、然庚亦自是數、蓋以十于數之也、明道雜志曰、蘇公詩云、身行萬里半天下、僧臥一菴初白頭、黃九云、豈有用白對天乎、公哂之、余嘗讀此說、因每閱唐詩、留心推例、凡數目、千支、尺度、量衡、五色、五味、四方、四時、此中文字、交互對偶、又與天地朝野、仙凡、公私、晝夜、晨夕、

既自資す、體裁相肖て、漸く自然に近し。故に雖黃易施し易し、而して上達殊に速かなり、師弟俱に勞を省く、方便の捷徑なり、此れ亦教の一術、爲に書して以て後進に貽す、但師、其の人に非ざれば、夫の人の子を賊ふ、擇ばざる可からざるなり。

石林詩話に曰、王荆公、嘗て「自ら喜ぶ田園五柳を安す、但だ嫌ふ尸祝庚桑を擾る」の句有り、人有り其の的對を稱す、公曰く伊但だ柳の桑に對するの的たるを知るのみ、然ども庚も亦自ら是れ數なりと、蓋、十千を以て之を數ふるなり、明道雜志に曰、蘇公の詩に云、「身は萬里を行き天下に半ばす、僧は一菴に臥す、初めて白頭」云、黃九云、豈、白を用ひて天に對する有らんやと、公之を哂ふと、余嘗て此の說を讀み、因て唐詩を閱する毎に、心を留めて例を推す、凡數目、千支、尺度、量衡、五色、五味、四方、四時、此の中文字、交互對偶す、又天地朝野、仙凡、公私、晝夜、晨夕、

早晚・昨今・陰晴・寒温・冷暖・老少・壯衰・雌雄・牝牡・新故・生熟・眞僞・虛實・尊卑・貧富・前後・左右・内外・上下・本末・大小・巨細・洪纖・脩短・輕重・高低・平側・厚薄・濃淡・淺深・疎密・稀稠・剛柔・曲直・橫斜・喧靜・勝劣・善惡・奇正・衆寡・同異・遠近・往來・聚散・斷續・有無・浮沈・安危・緩急・遲速・久暫・清濁・暗明・榮凋・乾濕・開落・芳臭・彼此・爾我・自他・流飛自<sup>上</sup>而<sup>降</sup>曰<sup>上</sup>流<sup>下</sup>自<sup>下</sup>而<sup>升</sup>曰<sup>下</sup>飛・等反對字・亦皆遞互取對・縱橫自在也・杜工部・白首多年疾・秋天昨夜涼・百年雙白鬢・一別五秋餐・遠傳冬筍味・更覺彩衣春・飛霜任青女・賜被隔南宮・暗水流花徑・春星帶草堂・百花檐外朶・青柳檻前梢・翠石俄雙表・寒松竟後凋・往者災猶降・蒼

夜航詩話卷之五

早晚・昨今・陰晴・寒温・冷暖・老少・壯衰・雌雄・牝牡・新故・生熟・眞僞・虛實・尊卑・貧富・前後・左右・内外・上下・本末・大小・巨細・洪纖・脩短・輕重・高低・平側・厚薄・濃淡・淺深・疎密・稀稠・剛柔・曲直・橫斜・喧靜・勝劣・善惡・奇正・衆寡・同異・遠近・往來・聚散・斷續・有無・浮沈・安危・緩急・遲速・久暫・清濁・暗明・榮凋・乾濕・開落・芳臭・彼此・爾我・自他・流飛上より降るを流と曰ひ、下より升るを飛と曰ふ、等の反對の字と、亦皆遞互、對を取る、縱橫自在なり、杜工部、「白首多年の疾、秋天昨夜の涼」、「百年雙白の鬢、一別五秋の餐」、「遠く傳ふ冬筍の味、更に覺ふ彩衣の春」、「飛霜青女に任す、賜被南宮を隔つ」、「暗水流花徑に流れ、春星草堂に帶ぶ」、「百花橋外の朶、青柳檻前の梢」、「翠石俄に雙表、寒松竟に後凋」、「往者災猶降り、蒼生喘未だ蘇せず」、「別徑花暮れんを欲す、春日盤蒼なり易し」、「返さず青絲の轆、虚しく燒く夜燭の花」、「瓜は須らく辰日に種うべし、竹は上番に成るを要す」、「陽雁幾時

生喘未蘇、別筵花欲暮、春日髣髴、蒼不返  
 青絲控、虛燒夜燭花、瓜須辰日種、竹要上  
 番成、鴻雁幾時到、江湖秋水多、紅蹄亂踏  
 春城雪、花領驕嘶上苑風、扁舟不獨如張  
 翰、卓帽應兼似管寧、鄭公綵繪隨長夜、曹  
 霸丹青已白頭、縱酒欲謀良夜醉、還家始  
 散紫宸朝、錦江春色來天地、玉壘浮雲變  
 古今、翰林歸心結遠夢、落日懸春愁、涼烟  
 浮竹盡、秋月照沙明、暖風花繞樹、秋雨草  
 沿城、樹深時見鹿、溪午不聞鐘、春風開紫  
 閣、大藥下朱樓、烟花宜落日、絲管醉春風、  
 喧鳥迎風嘯、春衣度雨寒、初從雲夢開、朱  
 邸更取金陵作小山、王右丞、雀乳先春草、  
 鶯啼過落花、流水如有意、暮禽相與還、槐

か對る、江湖秋水多し、「紅蹄亂踏す春城の雪、花領驕嘶す上苑  
 の風」、「扁舟獨り張翰の如きのみならず、卓帽應に兼て管寧に  
 似たる可し」、「鄭公綵繪長夜に隨ひ、曹霸丹青已に白頭」、「酒  
 を縱にして良夜の醉を謀らん」欲す、家に還りて始めて紫宸の  
 朝より散す、「錦江の春色 天地に來り、玉壘の浮雲 今古に變  
 す」、翰林「歸心遠夢を結び、落日春愁を懸く」、「涼烟竹に浮ん  
 で盡き、秋月沙を照して明なり」、「暖風花、樹を繞り、秋雨草、城  
 に沿ふ」、「樹深くして時に鹿を見る、溪午にして鐘を聞かず」、  
 「春風紫閣を開き、大藥朱樓を下る」、「烟花落日に宜し、絲管春  
 風に酔ふ」、「喧鳥風を迎へて嘯し、春衣雨を度りて寒し」、「初め  
 て雲夢より朱邸を開き、更に金陵を取て小山を作す」、王右丞、  
 「雀乳 春草に先ち、鶯啼、落花を過ぐ」、「流水意有るが如し、暮  
 禽相與に還る」、「槐色清養陰く、楊花暮春を惹く」、「晚鐘上苑に  
 鳴り、疎雨春城を過ぐ」、「城外の青山屋裏の如く、東家の流水

色陰清畫楊花惹暮春、晚鐘鳴上苑、踈雨  
 過春城、城外青山如屋裏、東家流水入西  
 鄰、鶯與迴出千門柳、閑道廻看上苑花、簾  
 前春色應須惜、世上浮名好是閑、岑嘉州、  
 江村片雨外、野寺夕陽邊、時衣天子賜、厨  
 膳大官調、彈琴醒暮酒、卷幔引諸峰、高渤  
 海、坐令高岸盡、獨對秋山空、出門看落日、  
 驅馬向秋天、夏雲滿郊甸、明月照河洲、蒼  
 生謝安石、天子富平侯、吳會獨行客、山陰  
 秋夜船、故鄉今夜思千里、霜鬢明朝又一  
 年、建寅迴北斗、看曆占春風、故鄆生秋草、  
 寒江瀟灑暉、盛府南門寄、前程積翠中、鳥  
 聲春谷靜、草色大湖多、猿聲知後夜、花發  
 見流年、寺路仰看飛鳥外、禪房空掩白雲

夜航詩話卷之五

西郊に入る、「鶯與迴に出づ千門の柳、閑道廻看す上苑の花」、  
 「簾前の春色應に須く惜むべし、世上の浮名好し是れ閑なり」、  
 岑嘉州の「江村片雨の外、野寺夕陽の邊」、「時衣天子の賜、厨  
 膳大官の調」、「琴を弾じて暮酒を醒まし、幔を卷いて諸峰を引  
 く」、高渤海「坐に高岸をして盡きしめ、獨り秋山の空しきに對  
 す」、「門を出でて落日を見る、馬を驅て秋天に向ふ」、「夏雲郊  
 甸に滿ち、明月河洲を照らす」、「蒼生謝安石、天子富平侯」、「吳  
 會獨行の客、山陰秋夜の船」、「故郷今夜千里を思ふ、霜鬢明朝  
 又一年」、「寅を建して北斗を廻らし、曆を見て春風を占ふ」、「故  
 郷秋草生し、寒江瀟灑瀟たり」、「盛府南門の寄、前程積翠の中」、  
 「鳥聲春谷靜かに、草色大湖に多し」、「猿聲後夜を知り、花發て  
 流年を見る」、「寺路仰ぎ看る飛鳥の外、禪房空しく掩ふ白雲の  
 中」、「人は紅藥に於て偏に色を憐み、鶯は垂楊に到りて聲を惜  
 まず」、「章蘇州の「同く占む朱鳥の剋俱に起す小人の言」、「幾日

中、人於紅藥偏憐色、鶯到垂楊不惜聲、韋  
 蘇州、同占朱鳥剋、俱起小人言、幾日東城  
 陌、何時曲水濱、乍迷金谷路、稍度上陽宮、  
 錢仲文、落葉淮邊雨、孤山海上秋、閑鷺棲  
 常早、秋花落更遲、漢浦浪花搖素壁、秦陵  
 樹色入西窓、四野山河通遠色、千家砧杵  
 動、秋聲白香山、人家黃茅屋、官舍苦竹籬、  
 獨登高寺去、一與白雲期、九月全無熱、西  
 風亦未寒、歲盡藍尾酒、辛盤先勸膠、巖處  
 早鶯爭暖樹、誰家新燕啄春泥、近見詩中  
 歎白髮、遙知關外憶東都、劉夢得、別路千  
 峰外、詩情暮雲端、樹合秋露曉、閣倚碧雲  
 天、灰瑨應新律、銅壺添夜籌、離堂未暗排  
 紅燭、別曲含淒颯、晚風杜牧之、北闕千門

か東城の陌、何の時か曲水の濱、「乍ち迷ふ金谷の路、稍、度る  
 上陽宮」、錢仲文、「落葉淮邊の雨、孤山海上の秋」、閑鷺棲む常  
 に早く、秋花落つる更に遲し、「漢浦の浪花素壁を搖かし、秦陵  
 の樹色西窓に入る」、「四野の山河遠色を通じ、千家の砧杵秋聲  
 を動かす」、白香山の「人家黃茅屋、官舍苦竹籬」、「獨、高寺に登  
 り去る、一に白雲を期す」、「九月全く熱無し、西風亦未だ寒から  
 ず」、「歲盡藍尾の酒、辛盤先づ膠を勸む」、「巖處の早鶯か暖樹を  
 争ひ、誰か家の新燕か春泥を啄む」、「近く見る詩中白髮を歎じ、  
 遙に知る關外京都を憶ふ」、劉夢得の「別路千峰の外、詩情暮雲  
 の端」、「樹は含む秋露の曉、閣は倚る碧雲の天」、「灰瑨新律に應  
 じ、銅壺夜籌を添ふ」、「離堂未だ暗からず紅燭を排す、別曲淒を  
 含んで晚風に颯る」、「杜牧之、北闕千門の外、南山午谷の西」、「綠  
 樹繁々語り、平沙燕々飛ぶ」、「重ねて尋ぬ春畫の夢、笑つて把  
 る淺花の枝」、「白鷺烟分れて光的々、微颯風定りて翠泔々」李義

外南山午谷西、綠樹鶯鶯語、平沙燕燕飛、  
 重尋春畫夢、笑把淺花枝、白鷺烟分光、的  
 的、微漣風定翠、沾沾李義山、橋迴涼風壓、  
 溝橫夕照和、怨目明秋水、愁眉淡、遠峰、誰  
 向劉伶天幕內、更當陶令北窓風、永憶江  
 湖歸、白髮欲回天地入、扁舟、薛大拙、黃沙  
 人外濶、飛雪馬前稠、無計延春日、可能留  
 少年、新年人未去、戊日燕還來、稠樹蔽山  
 聞杜宇、午烟薰日食、嘉陵、曲水池邊青草  
 岸、春風林下落花盃、鞦韆和、調角秋空外、砧  
 聲征衣落、照聞、賈長江、故園從小別、夜雨  
 近秋聞、秋風吹渭水、落葉滿長安、噪軒高  
 樹合、驚枕暮山橫、積雨荒鄰闌、秋池照遠  
 山、陸魯望、短髯看成雪、雙眸舊有花、俄分

夜航詩話卷之五

山、「橋は迥に涼風壓し、溝は横りて夕照和ぐ」、「怨目秋水明か  
 に、愁眉淡峰淡たり」、「誰か劉伶天幕の内に向ひ、更に陶令北窓  
 の風に當る」、「永く憶ふ江湖白髮に歸し、天地を回して扁舟に  
 入らんぞ欲す」、「薛大拙の「黃沙人外に濶く、飛雪馬前に稠し」、  
 「計の春日を延ばす無し、能く少年を留む可んや」、「新年人未だ  
 去らず、戊日燕還り來る」、「稠樹山を蔽ふて杜宇を閉き、午烟  
 日に薰じて嘉陵に食す」、「曲水池邊青草の岸、春風林下落花の  
 盃」、「鞦韆は調角に和す秋空の外、砧は征衣を辨す落照の間」、「賈  
 長江の「故園小より別れ、夜雨秋に近いて聞く」、「秋風渭水を吹  
 き、落葉長安に滿つ」、「軒に噪きて高樹合し、枕を驚かして暮山  
 横ふ」、「積雨鄰圃荒れ、秋池遠山を照す」、陸魯望の「短髯看、雪  
 さ成る、雙眸舊しく花有り」、「俄に分つ上尊の酒、驟、獸ふ五侯  
 の饋」、「霜は洞泉を染めて渾て紫に變し、雪は江樹を披いて半  
 は春に和す」、「行次野楓遠水に臨み、醉中萋菊涼烟に臥す」、「三

上尊酒、驟厭五侯鯖、霜染洞泉潭、變紫雪、  
披江樹、半和春、行次野楓臨、遠水醉中衰、  
菊臥涼烟、三仰涼波魚、繇動五茸春、草雉  
媒嬌、十洞飛精應、徧吸一簪秋、髮未曾梳、  
窓憐返照、綠書小庭喜、新霜爲橘紅、蘇衙  
荒磴移桑屐、花浸春醪挹石缸、鄭都官、一  
徑入寒竹、小橋穿野花、霜漏清中禁、風旗  
拂曙天、已難消永夜、況復聽秋霖、野綠梅  
陰重、江春浪勢巖、遊子乍聞征袖濕、佳人  
纔唱翠眉低、好句未停無暇日、舊山歸老  
有東林、深愧青莎迎野步、不堪紅葉照衰  
顏、窓下調琴鳴遠水、簾前睡鶴背秋燈、右  
信手抽、取全唐詩、令二三子檢出、以備後  
進標準、亦可以廣其資、而參其變也、夫觸

湧涼波魚繇動き、五茸春草雉媒嬌す、「十洞の飛精應に徧く吸ふべし、一簪の秋髮未だ曾て梳らず」、「窓に返照を憐むは昔の小なるに緣る、庭に新霜を喜ぶは橘の紅なるが爲めなり」、「蘇は荒磴に衙て桑屐を移し、花は春醪に浸して石缸に挹む」、鄭都官の「一徑寒竹に入り、小橋野花を穿つ」、「霜漏中禁に清く、風旗曙天を拂ふ」、「已に永夜を消し難く、況や復た秋霖を聴くをや」、「野綠梅陰重く、江春浪勢巖なり」、「遊子乍も聞て征袖濕ひ、佳人纔に唱へて翠眉低る」、「好句未だ停めず暇日無し、舊山歸老東林有り」、「深く愧つ青莎野歩を迎ふ、堪へず紅葉衰顔を照らす」、「窓下琴を調して遠水鳴り、簾前の睡鶴秋燈に背く」さ、右は手に信せて全唐詩を抜き取り、二三子をして檢出せしめ、以て後進の標準に備ふ、亦以て其の資を廣め而して其の變に參す可きなり、夫れ類に觸れ觸れ反せんには、略ほ其の例を舉

類隔反者、略舉其例而足、是何不憚煩之甚、亦唯爲蒙學致婆心、且不虛諸子之勞耳。

自恃聰慧、終虧學力、人間可惜、莫此爲甚、張于湖、自負才氣、每作詩、輒謂視東坡、何如、門人謝堯佐曰、以先生筆勢、讀書十年、吞東坡有餘矣、唐六如畫學、問東村、而雅俗迥別、或問東村、畫何以俗、曰、紙少、唐生數千卷書、祝枝山、深悅、少陵讀書破萬卷、下筆若有神之語、曰、此臨池家刑俗魔之寶劍也、寶其信哉、夫詩賦書畫之工、雖由別才、微學殖以資之、未易深造焉、蓋讀書可以盪滌塵穢、故謂之心塵帚、黃山谷言、人胸中久不用古書澆灌、則塵俗生其

けて足れり、是れ何ぞ煩を憚らざるの甚しき、亦唯だ蒙學の爲に婆心を致し、且つ諸子の勞を感しくせざるのみ。

自ら聰慧を恃み、終に學力を虧く、人間の惜む可きは、此より甚しき爲す莫し、張于湖、才氣を自負し、詩を作る毎に、輒ち謂ふ、東坡に視れば何如と、門人謝堯佐曰、先生の筆勢を以て、書を讀む十年ならずして、東坡を吞んで餘り有り、唐六如の畫は周東村を學びて雅俗迥に別なり、或ひ東村に問ふ、畫何を以て俗なる、曰く、紙少、唐生數千卷の書を少く、祝枝山、深く少陵の「書を讀み萬卷を破る、筆を下して神有るか若し」の語を悦ぶ、曰く、此れ臨池家の俗魔を刑するの寶劍なり、寶に其れ信なるかな、夫れ詩賦書畫の工なる、別才に由る、雖も、學殖以て之を資する微れば、未だ深く造り易からず、蓋、讀書以て塵穢を盪滌す可し、故に之を心塵帚と謂ふ、黃山谷言ふ、人、胸中久しく古書を用ひて澆灌せざれば、則塵俗其の間に生じ、鏡に對して

問、對鏡覺面貌可憎、向人亦語言無味、又曰、子弟凡病皆可醫、但俗不可醫、然唯讀書可以勝之、又論書曰、士大夫下筆、須使有數萬卷書、氣象始無俗態、不然、一楷書吏耳、皆警俗名言也、即有天縱之才、苟不學無術、則塵盆之氣、填胸塞膺、雅趣掃地、齷齪乎不勝鄙陋矣、技之所以不能免俗也。

楊升菴云、智果書、合處不減、古人然時有僧氣、可恨、古人所以貴於人品高也、夫書有僧氣、尙爲可恨、詩帶俗氣、豈可堪乎、乃欲人品高、不可不養也、故曰、詩雖一小技、然非胸中有萬卷、筆下無一塵、亦不能臻其妙也。

面貌の憎む可きを覺ゆ、人に向ふも、亦語言味無し、又曰く、子弟の凡病は皆醫す可し、但だ俗は醫す可からず、然も唯た書を讀まば以下之に勝つ可し、又書を論じて曰、士大夫筆を下す、須く數萬卷の書あらしむべし、氣象始めて俗態なし、然らざれば、一楷書吏のみ、皆俗を警むる名言なり、即ち天縱の才有るも、苟も不學無術なれば、則ち塵盆の氣胸に填ち膺に塞り、雅趣地を掃ひ、齷齪乎として鄙陋に勝へず、技の俗を免るゝ能はざる所以なり。

楊升菴云、智果の書、合處に減せず、然も時に僧氣有り、恨む可し、古人、人品の高きを貴ぶ所以なり、夫れ書に僧氣有るは、尙恨む可し、爲す、詩の俗氣を帶ぶ、豈堪ふ可けんや、乃人品の高きを欲せば、養はざるべからざるなり、故に曰く、詩は一小技、雖、然も胸中に萬卷有り、筆下一塵無きに非れば、亦其の妙に臻る能はざるなり。

一題而強作數首、辭采意旨、彼此相犯、索其指歸、一章可盡、不如割愛之爲愈也。蓋初臨題所得中聯、其聲律不與起結合、更改作對偶、於是所剩雞肋、自吝不能棄、遂衍構多篇、架屋疊狀、鉅釘成堆、故字換而意同、數首如一首、徒天闕刻藤耳。

曹唐大禮詩、七律四首、允稱傑構、然詩中、千官三見、天壇玉藻竝再見、識者病其複用、余謂不特此也、四章俱叙曙景、不耐雷同、雖多奚以爲、如老杜秋興八首、長安變府昔事、今況晝夜陰晴、俯仰行坐、情景互叙、悲歡交集、意旨辭采、未嘗犯重、錯綜變化、不可端倪、調劑停勻之妙、尤見良工苦心、所以爲千古絕作也。

一題にして強いて數首を作る、辭采意旨、彼此相犯す、其の指歸を索むるに、一章に盡す可ければ、愛を割くの愈れりき爲すに如かざるなり、蓋、初め題に臨み、得る所の中聯、其の聲律、起結合はざれば、更に改めて對偶を作す、是に於て、剩す所の雞肋、自ら吝みて棄つる能はず、遂に衍して多篇を構し、屋を架し狀を疊み、鉅釘、堆を成す、故に字換はり而して意同じ、數首、一首の如し、徒に刻藤を天闕するのみ。

曹唐の大禮詩、七律四首、允に傑構を稱す、然も詩中、千官三たび見え、天壇玉藻竝に再び見ゆ、識者其の複用を病む、余謂ふ、特に此のみならずなるなり、四章俱に曙景を叙し、雷同に耐へず、多しき雖も奚を以て爲ん、老杜秋興八首の如き、長安變府の昔事、今況、晝夜陰晴、俯仰行坐、情景互に叙し、悲歡交、集り、意旨辭采、未だ嘗て犯重せず、錯綜變化して、端倪す可からず、調劑停勻の妙、尤も良工の苦心を見る、千古の絶作たる所以なり。

襄夷直同樂天、中秋洛河、翫月二律、前首云、蒼龍領底珠皆沒、白帝心邊鏡乍磨、後首亦云、千珠競沒蒼龍領、一鏡高懸白帝心、兩聯全是一意、雖兒童所不爲、蓋初稿未圓、因轉韻改作、而後人誤竝傳耳。

釋靈一僧院、虎溪閑月引相過、帶雪松枝掛薜蘿、無限青山行欲盡、白雲深處老僧多、通篇全寫秋夕涼景、則雪宜作露、用倒置法以治聲律、言薜蘿帶露掛于松枝也、若松林雪尙封條、則滿山皓皚、溪路不通矣、卽月凝清光、豈能引人乎、且薜蘿葉盡獨存蔓耳、何以見其掛哉、又何得後曰青山、其爲誤寫、的然無疑、乃千百年讀者無一人覺其誤、何耶。

襄夷直の、樂天と同じく、中秋洛河に月を翫ぶ二律、前首に云、「蒼龍の領底珠皆没し、白帝の心邊鏡乍磨す」、後首に亦云、「千珠競ひ没す蒼龍の領、一鏡高く懸る白帝の心」、兩聯全く是れ一意、兒童も爲さざる所、蓋、初稿未だ圓ならず、因て韻を轉じ改め作る、而して後人誤りて竝び傳ふるのみ。

釋靈一の僧院に、「虎溪の閑月引て相過く、雪を帶ぶる松枝薜蘿を掛く、限り無き青山行へ盡さんぞ欲す、白雲深き處に老僧多し」、通篇全く秋夕の涼景を寫す、則ち雪は宜しく露に作るべし、倒置法を用ひて以て聲律を治す、薜蘿露を帶ひて松枝に掛るを言ふなり、若し松林雪尙ほ條を封ずれば、卽ち滿山皓皚、溪路通ぜず、卽ち月、清光を凝らす、豈能く人を引かんや、且、薜蘿葉盡き、獨り蔓を存するのみ、何を以て其の掛るを見んや、又何ぞ後に青山と曰ふを得ん、其の誤寫たる、的然疑ひ無し、乃、千百年讀む者一人の其の誤りを覺る無きは何ぞや。

可以死矣、捐生取義、殺身成仁、是也、可以無死矣、苟不足爲國家者、豈如匹夫匹婦之爲諒哉、或狗名激禍、徒俠者之狂也、放翁爲韓平原作南園記、勢不得已也、初誠齋固辭、而翁又峻拒之、必激其怒、徒速禍耳、記中唯勉以忠獻之事業、寔無諛詞、其亦何尤也、宋史本傳、因朱子言橫致訾議、何其固也、文海披沙、歷舉古今文人無行者、不詳其實、漫吠聲、誣之不尤冤乎、翁示兒詩曰、死去元知萬事空、但悲不見九州同、王師北平中原日、家祭無忘告乃翁、此其絕筆、亦有三呼渡河之態、翁之心事、于易簣時、猶躊躇如是、其志節可見已、

自室町氏擅霸政、而文物名號之濫、往往

以て死す可し、生を捐て、義を取り、身を殺して仁を成す、是れなり、以て死する無かる可し、苟も國家の爲にするに足らざれば、豈匹夫匹婦の諒を爲すか如くならんや、或は名に狗ひ禍に激す、徒に俠者の狂なり、放翁、韓平原の爲に南園記を作るは、勢已むを得ざるなり、初め誠齋固辭す、而して翁又之を峻拒せば、必、其の怒を激し、徒に禍を速くのみ、記中、唯、勉むるに忠獻の事業を以ず、寔に諛詞無し、其れ亦何ぞ尤めん、宋史本傳、朱子の言に因り、横に訾議を致す、何ぞ其れ固なるや、文海披沙に、古今文人の行無き者を歴舉し、其の事實を詳にせず、漫に聲に吠へて之を誣ふ、尤も冤ならずや、翁兒に示す詩に曰く、「死去元知萬事空を、但だ悲む九州の同するを見ざるを、王師北中原を平ぐる日、家祭忘るゝ無れ乃翁に告ぐるを」と、此れ其の絕筆、亦三たび河を渡らんと呼ぶの態有り、翁の心事、易簣の時に于て、猶ほ躊躇たること是の如し、其の志節見る可きのみ。

室町氏、霸政を擅にせしより、文物名號の濫、往々辭を措くに窮

窘於措辭、殆有不可筆焉者、施及今日、其名位之隆、尤難於稱謂、若過則傷於僭、恐損霸朝恭順之美、不及則嫌於貶、或與侯國事體無別、洵爲文場大阨矣、夫正名明義、師儒之任、關係匪輕、不容不慎焉、要之、吾儕陪臣、非不得已之外、謹無挂之筆舌可也。

宋黃徹碧溪詩話曰、東坡詩云、楚雨遂昏雲夢澤、吳潮不到武昌宮、失於一時筆快、遂以王宮目之、繼有李成伯題云、寂寞西山舊巢穴、庸兒猶道帝王宮、語幾於罵矣、夫吳主號皇帝、後世賤其僭僞、不肯與以宮稱之、詩筆稱呼之嚴、其可慎如此也。

顏氏家訓曰、蔡邕楊秉碑云、統大麓之重、

む、殆んど筆にす可からざる者有り、施ひて今日に及び、其の名位之隆、尤も稱謂に難んず、若し過ぐれば則ち僭に傷る、恐くは朝恭順の美を損せん、及ばざれば則ち貶するに嫌ひあり、或は侯國の事體と別つ無し、洵に文場の大阨たり、夫れ名を正し義を明にするは、師儒の任、關係輕きに匪ず、慎まざるべからず、之を要するに吾儕陪臣、己むを得ざるに非るの外、謹んで之を筆舌に挂くる無くして可なり。

宋の黃徹の碧溪詩話に曰く、東坡の詩に云ふ、「楚雨遂に昏し雲夢澤、吳潮到らず武昌宮」と一時の筆快に失し、遂に王宮を以て之を目す、繼で李成伯の題有り云、「寂寞西山舊巢穴、庸兒猶道ふ帝王宮」と、語、罵るに幾し、夫れ吳主、皇帝と號す、後世其の僭僞を賤み、肯て宮を以て之を稱するを與さず、詩筆稱呼の嚴なる、其の慎む可き此の如きなり。

顏氏家訓に曰く、蔡邕の楊秉碑に云、「大麓の重きを統ふ」と、潘

潘尼贈盧景宣詩云、九五思飛龍、孫楚王  
驃騎誄云、奄忽登遐、陸機父誄云、億兆宅  
心、敦叙百揆、姉誄云、倪天之和、今爲此言、  
則朝廷之臯人也、此尤所宜重慎、而木門、  
護社諸人、於霸府稱謂、是類比比犯之、肆  
然無所忌憚、春秋之義、謂何。

知父母之年、一喜一懼、孝子之用心也、於  
是、知命以上、每加十秩、值其覽揆之辰、邀  
宴親戚、義故作歌詩、以侑壽觴、雖古禮所  
不聞、亦孝義之道也、近時文風日趨浮靡、  
好事小人、自集祝嘏之詞、廣請諸四方、以  
夸堆積之盛、介人來乞者、紛紛不已、余頗  
厭惡之、一切弗敢與聞、夫詩發乎情者也、  
今他方之人、未嘗交一臂、卽其壽夭、於我

尼の盧景宣に贈る詩に云ふ、「九五飛龍を思ふ」と、孫楚の王驃騎の誄に云、「奄忽登遐す」と、陸機の父の誄に云、「億兆心を宅き、敦く百揆を叙す」と、姉の誄に云、「倪天の和」と、今此の言を爲さば、則ち朝廷の臯人なり、此れ尤も宜しく重く慎むべき所なり、木門・護社の諸人、霸府の稱謂に於て、是の類比々之を犯し、肆然として忌憚する所なし、春秋の義、何さか謂はん。

父母の年を知り、一喜一懼するは、孝子の用心なり、是に於て、知命以上、十秩を加ふる毎に、其の覽揆の辰に値へば、親戚義故を邀宴し、歌詩を作り、以て壽觴を侑む、古禮に聞かざる所、雖も、亦孝義の道なり、近時文風日に浮靡に趨き、好事の小人、自ら祝嘏の詞を集め、廣く諸を四方に請ひ、以て堆積の盛なるを夸り、人を介して來り乞ふ者、紛々として已まず、余頗る之を厭惡す、一切敢て與り聞かず、夫れ詩は情に發する者なり、今他方の人、未だ嘗て一臂を交へず、則ち其の壽夭、我に於て何ぞ干せん、謂はゆる義人の越人の肥瘠を視るのみ、且つ夫れ其の人、德

何干、所謂秦人之視越人之肥瘠耳、且夫其人無德之可述、無功之可叙、頑然保壽考、而視息天地之間、其不爲虛生者幾希、乃強作世情之話、過稱虛美、漫投浮詞、豈非輕薄之甚哉、但苟有一面之舊者、爲其親乞求、則豈容漠然、此不可以常限爲拘已、或嫌其失義于他人、遂併此拒謝、抑亦非人情矣、近又有求討輓詩者、夫輓詩平生交游有契誼之舊、一旦聞其死、而哀傷之、自發于言耳、豈可素昧平生者、見求而強作之乎、禮曰、知生者弔、知死而不知生、則傷而不弔、蓋不知生而弔之、則近於諛也、況進輓詩乎、卽知生交不深、何悼之有、孔子弔舊館人、惡涕之無從、於是乎、乃有

の述ぶ可き無く、功の叙す可き無く、頑然として壽考を保ち、而して天地の間に視息す、其の虛生たらざる者幾希なり、乃ち強いて世情の話を作し、虛美を過稱し、浮詞を漫投す、甘輕薄の甚しきに非ずや、但だ苟も一面の舊ある者、其の親の爲に乞求すれば、則豈に漠然すべけんや、此れ常限を以て拘るを爲す可らざるのみ、或は其の義を他人に失するを嫌ひ、遂に此を併せて拒謝す、抑、亦人情に非ず、近ごろ又輓詩を求討する者有り、夫れ輓詩は、平生交游、契誼の舊あり、一日其の死を聞きて、之を哀傷し、自ら言に發するのみ、豈、素昧平生に昧き者、求められ、て強いて之を作る可けんや、禮に曰く、生を知る者は弔し、死を知りて生を知らざれば、則傷して弔せず、蓋、生を知らずして之を弔すれば、則諛に近きなり、況や、輓詩を進るをや、即ち生を知るも、交深からざれば、何の悼むべきか之れ有らん、孔子、舊館人を弔す、涕の從る無きを惡む、是に於てか乃贈あり、今半面の識、遽に自ら知己と稱し、倏哀乾哭、聲に吠へて之に

贈焉、今半面之識、遽自稱知己、佞哀乾哭、  
 吠聲以應之、末俗弊風之煽、無所不至哉。  
 弇州評李長吉詩、奇過則凡、老過則稚、此  
 方近今詩人、舍唐而趨宋、變雅而就俗、專  
 尚尖巧、務逞詭怪、聲調卑靡、旨趣猥瑣、豈  
 徒凡且稚哉、往往不勝癡騷、令人捧腹、余  
 所以禁初學、令不趨時風也。

陳去非曰、揚子雲好、奇唯其好奇、所以不  
 能奇、夫揚子猶然、況凡手、而好奇、不啻醜  
 婦之聲。

陵陽室中語云、詩使事、要事自我使、不可  
 反爲事使、夫詩語尤貴圓、今之耽宋詩者、  
 偶獲一奇語、便欲遽用之、強爲是而作故  
 反爲奇語使、不勝生硬、眞所謂下劣詩魔

應ず、末俗弊風の煽、至らざる所無きかな。

弇州、李長吉の詩を評す、奇過て則ち凡、老過て則ち稚、此の  
 方近今の詩人、唐を捨て、宋に趨き、雅を變じて俗に就き、專ら  
 尖巧を尙び、務めて詭怪を逞くし、聲調卑靡、旨趣猥瑣、豈徒に  
 凡且つ稚のみならんや、往々にして癡騷に勝へず、人をして捧  
 腹せしむ、余が初學に禁じ、時風に趨かざらしむる所以なり。

陳去非曰、揚子雲、奇を好む、唯、其れ奇を好む、奇なる能はさ  
 る所以なり、夫れ揚子猶ほ然り、況んや凡手にして奇を好むは、  
 管に醜婦の聲するのみならず。

陵陽の室中語に云、詩に事を使ふは、事の我より使ふを要す、反  
 つて事に使はる可からず、夫れ詩語は尤も圓を貴ぶ、今の宋  
 詩に耽る者、偶、一奇語を獲れば、便ち遽に之を用ひんと欲し、  
 強いて是が爲にして作る、故に反つて奇語に使はれ、生硬に勝

也。

日本詩話叢書

---

夜航詩話卷之五  
終

---

へず、真に謂はゆる下劣の詩魔なり。

二八四

# 夜航詩話卷之六

伊勢津阪孝綽君裕著

男 達 有 功 技

程伊川曰、凡人家法、須月爲一會以合族、古人有花樹章家宗會法可取也、宗會法今不傳、然觀岑嘉州章員外家花樹歌、其盛可想見矣、如崔敏童兄弟宴城東莊、蓋亦是也、清袁倉山致仕居隨園、每至春日花盛、家中輪流置酒爲太夫人壽、太夫人亦設席作答、歲以爲例、倉山有句云、高堂戒我無他出、阿母明朝作主人、蓋實事也、此誠孝子至行、若其力不能爲宗會、亦須做、是以致父母之歡、曾子所謂推牛而祭

程伊川曰、凡そ人家の法、須く月に一會を爲し以て族を合すべし、古人、花樹章家宗會有り、法取る可きなり、宗會の法、今傳はらず、然も岑嘉州の章員外家花樹の歌を観るに、其盛徳ひ見る可し、崔敏童の兄弟、東莊に宴するが如き、蓋、亦是なり、清の袁倉山致仕して隨園に居る、春日花盛なるに至る毎に、家中輪流置酒して太夫人の壽を爲す、太夫人亦席を設け答を作す、歲に以て例を爲す、倉山句有り云、「高堂我を戒む他出する無れど、阿母明朝主人を爲す、蓋、實事なり、此誠に孝子の至行なり、若し其力、宗會を爲す能はざるも、亦須く是に做ひ以て父母の歡を致すべし、曾子の謂はゆる牛を推して墓を祭るは、雞豚の親の存するに違ふに若かず、庶幾くは他日風木

慕不若雞豚遠親存庶幾乎他日少風木之憾矣。

始之非難善終爲難朝華夕萎雖美奚貴歲寒後凋明德維馨蓋夫善終罔不在初傳曰進銳者退必速此乃其戒也漢文帝還千里馬而與之道路費惜中人十家之產遂不作露臺事詞醜藉自無圭角綽有餘裕文帝之器大哉是故錢朽粟腐猶衣弋綈宮室車騎無所增益穀儉自持不敢滿假終始如一可謂歲寒之松矣晉武帝踐祚焚雉頭裘於殿前以儉率天下既而及吳平侈縱日甚後宮數千常乘羊車幸之與群臣語未嘗有經國遠謀外患除而內憂殷釀成五胡大禍亂唐明皇卽位亦

の憾少からん。

之を始むるは難きに非ず終を善するを難しと爲す朝華夕萎美雖奚を貴からん歲寒後凋明德維馨し蓋夫れ終を善するは初に在らざるは罔し傳に曰進むこも銳き者は退くこも必ず速なりと此乃ち其戒なり漢の文帝千里の馬を還して之に道路の費を免ふ中人十家の産を惜み遂に露臺を作らず事詞醜藉自ら圭角無し綽として餘裕有り文帝の器大なるかな是の故に錢朽ち粟腐るも猶弋綈を衣る宮室車騎増益する所無し穀儉自持敢て滿假せず終始一の如し歲寒の松と謂ふ可きなり晉の武帝祚を踐み雉頭裘を殿前に焚き儉を以て天下を率ふ既にして吳の平くに及び侈縱日に甚し後宮數千常に羊車に乗りて之に幸す群臣と語るに未だ嘗て經國の遠謀有らず外患除きて内憂殷なり五胡の大禍亂を釀成

焚珠玉錦綉於殿前、示朴爲天下先、然一觀帑藏充牣、則奢靡荒淫、糞土金帛、勤政務本之樓、徒爲虛設、非復前日開元天子、妃子肥而天下瘠、漁陽鞞鼓動地來、此皆雖矯勉於初政、而怠忽於末路、難乎有恆矣、蓋志欲既滿、侈心便生、遂流連荒亡、往不知返、換骨脫胎、若兩截人、然可謂朝華之草耳、大凡激而行者、未必不有進銳退速之患也、觀夫牛乎、逸而走、一躍如失、然亡幾已疲、四蹄忽蹙、不能復行、若彼二主者、豈非牛走哉、清乾隆大爺嘗作有初行、余得而讀之、寔知其爲令主、其詞曰、君不見晉武嘗焚雉頭裘、平吳還駕羊車遊、又

夜航詩話卷之六

不見明皇珠玉焚前殿、太真寵盛長夜宴、  
 唐の明皇位に即き、亦珠玉錦綉を殿前に焚き、朴を示して天下の先を爲す、然も一たび帑藏の充牣するを觀れば、則ち奢靡荒淫、金帛を糞土にす、勤政務本の樓、徒に虛設を爲り、復た開日の開元天子に非ず、妃子肥えて天下瘠す、漁陽の鞞鼓地を動かし來る、此れ皆初政に矯勉す、雖、末路に怠忽す、難いかな恆有ること、蓋、志欲既に滿れば、侈心便ち生じ、遂に流連荒亡、往いて返るを知らず、換骨脫胎、兩截人の若く然り、朝華の草を謂ふ可きのみ、大凡激して行ふ者は、未だ必ずしも進銳退速の患有らずんばあらざるなり、夫の牛を觀んか、逸して走る、一躍して失するが如し、然も幾も亡くして已に疲れ、四蹄忽ち蹙して、復た行く能はず、彼の二主の若き者、豈牛走に非ずや、清の乾隆大爺嘗て有初行を作る、余得て之を讀み、寔に其令主たるを知る、其詞に曰、君見ずや晉武嘗て雉頭裘を焚く、吳を平け、還た羊車に駕して遊ぶ、又見ずや明皇珠玉前殿に焚く、太真寵盛なり長夜の宴、人心厭の初め有らざるは蹙し、幾か見る久き

人心靡不有厥初、幾見歷久常不渝、當時焚寶博虛譽、誰知慾熾翻焚軀、漢文卻馬輕千里、崇尙節儉輝青史、不聞號令付炎官、祇覺中心淡如水、在潛邸時、賦此自戒、乃克慎終如始、今在御垂六十年、未嘗聞其有悖德也、書曰、慎厥終、惟其始、於戲信矣哉。

明景泰帝、奢靡無度、嘗爲銀豆等、擲於地、令內侍爭拾爲鬪笑、編修楊守陳、作銀豆謠曰、尙方承詔出九重、治銀爲豆驅良工、顆顆勻圓奪天巧、朱函進入蓬萊宮、御手親將十餘把、琅琅亂灑金階下、萬顆珠璣走玉盤、一天雨雹敲鴛瓦、中官跪拾多盈、袖金瑤半墮羅裳縷、贏得天顏一笑懷、拜

を歷て常に渝らざるを、當時寶を焚き虚譽を博す、誰か知らん慾熾にして翻つて軀を焚く、漢文馬を御けて千里を輕んじ、節儉を崇尙して青史に輝く、聞かず號令炎官に付す、祇だ覺ゆ中心淡として水の如きを、潛邸に在る時、此を賦し自ら戒む、乃ち克く終を慎む始の如し、今在御六十年に垂んじし、未だ嘗て其悖德有るを聞かざるなり、書に曰、厥の終を慎む、惟れ其れ始にすぎ、於戲信なるかな。

臣の景泰帝、奢靡度無し、嘗て銀豆等を爲り、地に擲ち、内侍をして争ひ拾はしめて鬪笑を爲す、編修楊守陳、銀豆謠を作りて曰、尙方詔を承け九重より出づ、銀を治し豆を爲し良工を驅る、顆々勻圓天巧を奪ふ、朱函進み入る蓬萊宮、御手親ら十餘把を將ち、琅琅亂灑す金階の下、萬顆の珠璣玉盤に走る、一天の雨雹鴛瓦を敲く、中官跪いて拾ふて多く袖に盈つ、金瑤半ば墮つ羅裳縷、贏得たり天顏一笑の儘、賜を拜し歸來清簾に坐す、聞知す昨日六宮の中、翠娥紅袖春風を承く、黃金豆を作り競て拾得

賜歸來坐清晝、聞知昨日六宮中翠娥紅袖承春風、黃金作豆競拾得、羊車不至愁烟空、別有銀壺薄如葉、竝刀剪碎盈丹匣、也隨銀豆灑金階、滿地春風飛玉蝶、君不見民餐木皮和草根、夢想豆食如八珍、官倉有米無銀糶、操瓢盡作溝中瘠、明主由來愛一囑、安邦只在恤窮民、願將銀豆三千斛、活取枯骸百萬人、長歌之哀甚於痛哭、爲人君者、讀之不猛省、匪人矣。

宋人李衡云、讀書須是識字、此言學問之要訣也、苟不識字、懵於文義、而讀書求解、如闔室索物、其可得乎、故爲學先務在識字、通文義、不然錯亂經旨、是非謬於聖人、豈容忽諸、蓋識字莫善於詩、詩雖末技、使

す、羊車至らず愁烟空し、別に銀壺の薄き葉の如き有り、竝刀剪碎丹匣に盈つ、也、銀豆に隨て金階に灑く、滿地の春風玉蝶飛ぶ、君見ずや民木皮と草根を食ふ、豆食を夢想するこも八珍の如し、官倉米有るも銀の糶する無し、瓢を操て盡く溝中の瘠を作る、明主由來一囑を愛む、邦を安するは只窮民を恤むに在り、願くば銀豆三千斛を將て、活取せん枯骸百萬人に、長歌の哀、痛哭よりも甚し、人君たる者、之を讀みて猛省せざれば、人に匪ず。

宋人李衡云、書を讀む須く是れ字を識るべし、此言、學問の要訣なり、苟も字を識らざれば、文義に懵し、而して書を讀み解せんことを求むるは、闔室に物を索むるが如し、其れ得べけんや、故に學を爲すの先務は、字を識り文義に通するに在り、然らざれば經旨を錯亂し、是非、聖人に謬る、豈諸を忽にすべけんや、蓋、字を識るは詩より善きは莫し、詩は末技と雖も、小子をし

小子先通其解、乃馴致學、通經義之階梯也。夫古經文簡而理奧、豈可一蹴而至焉乎、乃詩且未能解、而直事經義者、何異不緣梯階、而以求躋堂樓也。朱子嘗言看詩義理外、更好看他文章、此謂毛詩、然今之詩猶古之詩、故予之教人、以詩爲入門之路、董生頗嫺、估畢、輒驅而之詩、自然習於文字、資學業多矣、是方便捷徑、因技而進乎道、亦德充之符也、或譏爲倒行逆施、迂儒腐論、罔殺人才、世多讀書而不識字者、不獨道學先生皆坐此故也。

唐山杜鵑、暮春盛啼、旅客聞之、不勝悲傷、以其呼不如歸、故攬鄉情云、此間、至夏始聞、國歌者流、與鶯並賞、特喜聽、初聲、詠以

て先づ其辭に通せしめば、乃ち學に馴致す、經義に通ずるの階梯なり、夫れ古經、文簡にして理奧なり、豈一蹴して至る可けんや、乃ち詩すら且ほ未だ解する能はず、直に經義を事とする者は、何ぞ階梯に緣らずして以て堂樓に躋るを求むるに異らんや、朱子嘗て言ふ、詩の義理を看るの外、更に好し他の文章を看んこ、此れ毛詩を讀ふ、然も今の詩は猶ほ古の詩のこ多し、故に予の人に教ふる、詩を以て入門の路を爲す、董生頗、估畢に嫺へば、輒ち驅りて詩に之かしむ、自然に文義に習ひ、學業に資するこ多し、是れ方便捷徑なり、技に因て道に進む、亦德充の符なり、或ひこ譏りて倒行逆施を爲す、迂儒の腐論、人を罔殺す、世に書を讀みて字を識らざる者多し、獨り道學先生のみならず、皆是に坐するが故なり。

唐山の杜鵑、春盛に啼く、旅客之を聞き、悲傷に勝へず、其の不如歸を呼ぶを以ての故に、鄉情を攬るこ云ふ、此間、夏に至り始めて聞ゆ、國歌者流、鶯と並び賞し、特に初聲を聴くを喜び、

向人詫之、按顧況、山中作、幽人自愛山中

宿、況在葛洪丹井西、庭前有箇長松樹、夜

半子規來上啼、僧齊己、林下偶作、花在月

明胡蝶夢、雨餘山綠杜鵑啼、朱文公崇壽

客舍夜聞子規、空山初夜子規鳴、靜對琴

書、百慮清、喚得形神兩超越、不知底是斷

腸聲、戴景明詩、預識今年好、鵲啼枕上聽、

許月卿詩、要知來日清明節、請聽鵲鳴第

一聲、明人徐威詩、山長空寄鯉、春盡好聞

鵲、清人高步瀛詩、客來未慣驚雛燕、人到

無愁愛杜鵑、則彼方亦樂而賞之也、但在

旅中厭之耳。

無題詩集、載僧蓮禪杜鵑詩、頌聯云、鶯子

巢中春刷翅、兔花牆外曉傳聲、此在當時

詠じて以て人に向ひ之を詫る、按ずるに、顧況の、山中の作に、

「幽人自ら愛す山中の宿、況んや葛洪丹井の西に在るをや、庭前

に箇の長松樹有り、夜半子規來り上りて啼く」と、僧齊己の、林

下偶作に「花は月明胡蝶の夢に在り、雨餘山は綠にして杜鵑啼

く」、朱文公の崇壽客舍夜子規を聞く、「空山初夜子規啼く、靜に

琴書に對して百慮清し、形神を喚ひ得て兩ながら超越、知らず

底ぞ是斷腸の聲」と、戴景明の詩に、「預識今年好し、鵲啼枕上に

聽く」と、許月卿の詩に、「知るを要す來日清明の節、請ふ聽け鵲

鳴第一聲」と、明人徐威の詩に、「山長空く鯉を寄す、春盡て好

し鵲を聞くに」と、清人高步瀛の詩に、「客來りて未だ慣れず雛燕

を驚かす、人、愁無きに到りて杜鵑を愛す」と、則、彼の方も亦

樂んで之を賞するなり、但、旅中に在りては之を厭ふのみ。

無題詩集に、僧蓮禪の杜鵑の詩を載す、頌聯に云、「鶯子巢中春

翅を刷す、兔花牆外曉に聲を傳ふ」と、此れ當時に在りては殊に

殊爲絕妙、隨軍茶花、古稱芳宜花、安瀆泊湖亭涉筆、歷舉故實、水綿花稱兔花、亦可備一典故。

有偏彊好異者、喜用僻典、下奇字、街博以驚人、余嘗指摘之、責其杜撰、輒言見東坡集、或稱楊誠齋語、余曰、二公全集、吾能諳之、絕無斯語、若有別集乎、請與寓目焉、其人語塞、赧顏而退、蓋腹中空洞、而強欲出奇、小人窮斯濫矣、又有用笛簾字者、試詰其義、答曰、取諸放翁詩鈔、其義未考、姑妄用之、余哂曰、放翁本集作竹簾、鈔本作笛、謬耳、君子闕疑慎言其餘、乃不知而妄作、自欺欺人耶、若以後再之、直於尻骨上、施一大灸矣、吁、詞林多怪、不得不燃犀也、道考

絕妙を爲す、隨軍茶花、古は芳宜花を稱す、安瀆泊の湖亭涉筆に、故實を歴舉す、水綿花は、兔花を稱す、亦一典故に備ふ可し。

偏彊、異を好む者有り、喜で僻典を用ひ、奇字を下し、博を街ひ以て人を驚かす、余嘗て之を指摘し、其杜撰を責む、輒ち言ふ、東坡詩集に見ゆ、或は稱す楊誠齋の語、余曰、二公の全集、吾能く之を諳んず、絶へて斯の語無し、若し別集有らんか、請ふ目を與り寓せん、其人語塞り赧顔して退く、蓋、腹中空洞にして、強いて奇を出さん、欲す、小人窮すれば斯に濫するなり、又笛簾の字を用ふる者有り、試に其義を詰るに、答て曰、諸を放翁詩鈔に取る、其義は未だ考へず、姑く妄に之を用ふ、余哂つて曰、放翁本集に竹簾に作る、鈔本に笛に作るは謬のみ、君子疑を闕き、慎みて其餘を言ふ、乃ち知らずして妄作し、自ら欺き人を欺かんや、若し以後之を再びせば、直に尻骨の上に於て一大灸を施さん、吁、詞林怪多し、犀を燃さざるを得ざるなり、

放翁咏鍊、有笛材細織含風澹之句、似是謂寶、蓋寶亦謂之鍊也。

周樸園論詩云、學古人者、只可與之夢中神合、不可使其白晝現形、旨哉言乎、今世學宋詩者、不能得其佳處、而徒偏效其響、牛鬼蛇神、白日橫行。

徐而菴云、今人詩、要見好、所以工于字句之間、古人詩、不要見好、所以妙于篇章之外、洵知言也、今之追逐時好者、不辨體裁、不了章法、以好行小慧爲能事、徒爭巧於五字七字之間、琢鏤湊砌、抽黃媿白、合作何由而得哉、以此博一日之名、則可、而遂欲傳後世耶。

黃山谷詩、苦於貪對偶、而不脫灑、好組織、故事、不勝刻畫之痕、尤逞奇自喜、顧影裴

追考、放翁鍊を咏す、笛材細に織りて風澹を含むの句有り、是れ寶を謂ふに似たり、蓋寶も亦之を鍊と謂ふなり。周樸園、詩を論じて云、古人を學ぶ者は、只之を夢中に神合す可し、其をして白晝に形を現はさしむ可からず、旨い哉言や、今世宋詩を學ぶ者は、其佳處を得る能はずして、徒に偏に其響に效ふ、牛鬼蛇神、白日橫行す。

徐而菴云、今人の詩は好まれんことを要す、字句の間に工なる所になり、古人の詩は好まるを要せず、篇章の外に妙なる所になり、洵に知言なり、今の時好を追逐する者は、體裁を辨せず、章法を了せず、好んで小慧を行ふを以て能事と爲し、徒に巧を五字七字の間に争ひ、琢鏤湊砌、黄を抽き白を媿ふ、合作何に由りて得んや、此を以て一日の名を博せんは則可なり、而して遂に後世に傳へんことを欲するか。

黃山谷の詩は對偶を貪るに苦しみて、脱灑ならず、好んで故事を組織し、刻畫の痕に勝へず、尤、奇を逞ふし自ら喜び、影を顧

徊、銜耀太甚、故格雖高而無滋味、往往晦  
 僻難曉、世人不解事、喜其律刻而切、乃所  
 以爲弊也、魏道輔隱居詩話、山谷喜作詩  
 得名、好用南朝人語、專求古人未使之奇  
 字、綴葺而成詩、自以爲工、其實所見之狹  
 也、故句雖新奇、而氣乏渾厚、吾嘗作詩題  
 編後云、端求古人遺、琢拱手不停、方其得  
 機羽、往往失鵬鯨、蓋謂是也、西清詩話、山  
 谷詩所恨、務高一似、參曹洞下禪、尙墮在  
 玄妙窟裏、漁隱詩話、山谷詩、酷學少陵、雄  
 健太過、遂流而入于險怪、要其病在太著  
 意、欲道古今人所未道語耳、當時既有是  
 論、而至今與坡公竝稱、何耶。

杜詩、且看欲盡花經眼、莫厭傷多酒入脣、

みて裴徊し、銜耀太甚し、故に格、高し、雖滋味無し、往々晦僻  
 にして曉り難し、世人事を解せず、其律刻にして切なるを喜ぶ、  
 乃ち弊を爲す所以なり、魏道輔の隱居詩話に、山谷喜て詩を作  
 り、名を得、好で南朝人の語を用ひ、専ら古人未だ使はざる奇字  
 を求め、綴葺して詩を成し、自ら以て工を爲す、其實は所見の狹  
 きなり、故に句は新奇に雖、而して氣は渾厚に乏し、吾嘗、詩を  
 作り編後に題して云、「端に古人の遺を求め、琢拱手停めず、其  
 機羽を得るに方りては、往々鵬鯨を失す」と、蓋是を謂ふなり、  
 西清詩話に、山谷の詩、恨む所は、高を務めて、一に曹洞下禪に  
 參するに似たり、尙墮ちて玄妙窟裏に在り、漁隱詩話に、山谷  
 の詩は、酷だ少陵を學んで、雄健太だ過ぎたり、遂に流れて險  
 怪に入る、要するに其病太だ意を著くるに在り、古今人未だ道  
 はざる所の語を道はん、欲するのみ、當時既に是の論有り、  
 今に至りて坡公と竝べ稱するは何ぞや。

杜詩に、「且看る盡きん、欲して花眼を經、厭ふ莫れ傷多く酒脣

虚字幹旋之妙圓轉如珠走盤然學者好倣此則不勝破碎矣蓋詩用虚字猶構舍之用櫺子也若不善用動搖欲頽豈可浪用乎。

自漢以女妻匈奴而後世習爲例常結昏戎狄不以爲恥如李唐之時世世嫁公主於虜酋尤可哀也昔齊景公一諸侯也畏吳以女女之猶涕泣遺之今以天子之尊迺與異類通婚殆無人倫之理矣夫庶人求配偶猶各以其倫良民之女不敢嫁匪類況王姬公族而棄之外夷何其忍也鍾伯敬唐詩歸論崔湜奉和金城公主適西蕃應制之作云如此醜事何勞群臣作詩應制唐時君臣廉恥意氣盡矣每讀之氣

に入るに、虚字幹旋の妙、圓轉にして、珠の盤に走るが如し、然も學者好んで此に倣へば則ち破碎に勝へず、蓋、詩の虚字を用ふるは猶舎を構へて櫺子を用ふるがごときなり、若し善く用ひざれば、動搖して頽れんことを欲す、豈に浪に用ふ可けんや。

漢、女を以て匈奴に妻しより、後世習ふて例を爲し、常に昏を戎狄に結び、以て恥を爲さず、李唐の時の如き、世々公主を虜酋に嫁す、尤哀む可きなり、昔齊の景公は一諸侯なり、吳を畏れ、女を以て之に女すも、猶ほ涕泣して之を遺る、今、天子の尊を以て迺ち異類と婚を通ず、殆んど人倫の理無し、夫れ庶人の配偶を求むるも、猶ほ各其倫を以てす、良民の女は敢て匪類に嫁せず、況んや王姬公族にして、之を外夷に棄つ、何ぞ其れ忍べらるや、鍾伯敬の唐詩歸に、崔湜の金城公主の西蕃に適くを奉和する應制の作を論じて云、此の如き醜事、何ぞ群臣詩を作り制に應ずるを勞せん、唐時君臣、廉恥意氣盡きたり、之を讀む毎に、氣塞るに、湜の詩、粗ほ能く回護中に傷諷を寓す、詩人の意

571

塞、湜詩粗能回護中、爲傷諷得、詩人之意、然終不如勿作耳、詩之爲用、至此亦不幸矣、蓋至明氏、一掃舊弊、故得立此論也。

王介州藝苑卮言云、邊庭實詩、自聞秋雨聲、不種芭蕉樹、于麟詩刪收之、然芭蕉豈可言樹乎、若作自憐秋雨滴、不復種芭蕉可也、按佛經、菩薩如實、知行如芭蕉樹、宋謝翱詩、碁局雨生苔、薛文袞、裝晴掛芭蕉樹、是芭蕉可言樹也、又雜譬論、庭中有蒲萄樹、韓文公詩、偶坐藤樹下、金人李元翼詩、牡丹樹下影、堂前此類、亦皆可言樹也、蓮亦稱樹、北齊時童謠、千金買藥園、中有芙蓉樹、破家不分明、蓮子隨他去、楊誠齋曉看芙蓉、半紅半白花、都問、非短非長

を得たり、然も終に作る勿きに如かざるのみ、詩の用たる、此に至りて亦不幸なり、蓋、明氏に至り、舊弊を一掃す、故に此論を立つるを得たり。

王介州の藝苑卮言に云、邊庭實の詩に、「秋雨の聲を聞きしより、芭蕉樹を種えず」と、于麟の詩刪に之を收む、然も芭蕉、覺樹と言ふ可けんや、若し「秋雨の滴るを憐んでより、復た芭蕉を種えず」と、作さば可ならん、按ずるに佛經に、菩薩は、實の如く、知行は芭蕉樹の如し、宋謝翱の詩に、碁局雨に生ず苔、薛文、裝晴に掛く芭蕉樹、是れ芭蕉は樹と言ふ可きなり、又雜譬論經に、庭中に蒲萄樹有り、韓文公の詩に、「偶坐藤樹の下」、金人李元翼の詩に、「牡丹樹下影、堂の前」、此類、亦皆樹と言ふ可きなり、蓮も亦樹と稱す、北齊の時の童謠に、千金藥園を買ふ、中に芙蓉樹有り、破家分明ならず、蓮子他に隨て去る」と、楊誠齋の曉に芙蓉を看るに、「半紅半白花、都問、短に非ず長に非ず、樹斬

樹斬齊是也、然好奇喜用、非也。

杜詩崔氏東山草堂、用真韻內押芹字、蓋出韻之失、當時諸家往往有之、皆一時趁筆之誤耳、隨園詩話云、余祝人詩、七虞內誤用餘字、意欲改之、後見唐人律詩、通韻極多、因歷舉唐詩、以爲一法、予竟不以爲然也、夫通韻古詩所用、唐人韻法極嚴、何敢於近體用古韻、此猶王右軍書帖多誤字、豈可以爲典要乎、後學以是爲口實、效尤文過、不思之甚也。

吳融詩、一夜陰風度、平明顛氣交、鄭谷詩、武德門前顛氣新、雪融鴛瓦土膏春、是顛氣冬春亦可言也、梅雨梅陰亦於春時言之、柳宗元詩、梅實迎時雨、蒼茫值曉春、鄭

齊、是なり、然も奇を好み、喜んで用ふるは非なり。

杜詩の崔氏の東山草堂に、眞の韻を用ふ、内に芹の字を押す、蓋、出韻の失なり、當時諸家々々之れ有り、皆一時筆を趁ふの誤りのみ、隨園詩話に云、余、人を祝する詩に、七虞の内に誤て餘の字を用ふ、意之を改めんを欲す、後、唐人の律詩を見るに通韻極めて多し、因て唐詩を歴し、以て一法を爲す、予竟に以て然りと爲さざるなり、夫れ通韻は古詩の用ふる所、唐人韻法極めて嚴なり、何ぞ敢て近體に於て古韻を用ひん、此れ猶ほ王右軍の書帖に誤字多きがごとし、豈以て典要を爲す可けんや、後學を以て口實を爲し、尤に效ひ過を文るは、思はざるの甚しきなり。

吳融の詩に、「一夜陰風度り、平明顛氣交る」、鄭谷の詩に、「武德門前顛氣新なり、雪、鴛瓦に融す土膏の春」、是れ顛氣は、冬春にも亦言ふ可し、梅雨梅陰も亦春時に於て之を言ふ、柳宗元の詩に、「梅實時雨を迎へ、蒼茫曉春に値る」、鄭谷の詩に、「野綠

谷詩野綠梅陰重、江春浪勢麤蓋陸佃坤雅所謂迎梅也。

許渾題峽山寺、鷺巢橫臥柳、猿飲倒垂藤、語誠工矣、然鷺非高木、不巢是求奇巧、而不遑考其實耳、改作棲字、則可也。

黃山谷云、歐陽文忠公極賞林和靖疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏之句、而不知和靖別有咏梅一聯、云、雪後園林纔半樹、水邊籬落忽橫枝、似勝前句、不知文忠何緣棄此而賞彼、文章大槩亦如女色、好惡只繫於人、吁、是真醜西施、而豔媼母、不意山谷乃爾、因記、王漁洋五代詩話載、唐江爲詩、竹影橫斜水清淺、桂香浮動月黃昏、和靖改二字爲疎影暗香、以詠梅、遂成

梅陰重、江春浪勢麤なり」と、蓋、陸佃の坤雅に謂はゆる迎梅なり。

許渾の峽山寺に題す、「鷺は巢ふ横臥の柳、猿は飲む倒垂の藤」と、語誠に工なり、然も鷺は高木に非れば巢はず、是れ奇巧を求めて其實を考ふるに遑あらざるのみ、改めて棲の字に作れば、則ち可なり。

黃山谷云、歐陽文忠公、極めて、林和靖の「疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏」の句を賞す、知らず、和靖別に咏梅一聯有り、云、「雪後園林纔に半樹、水邊籬落忽ち横枝」と、前句に勝るに似たり、知らず文忠何に緣て此を弃て、彼を賞するや、文章は大概亦女色の如し、好惡、只、人に繫る、吁、是真に西施を醜し、而して媼母を豔す、意はざりき、山谷にして乃ち爾り、因て記す、王漁洋の五代詩話に載す、唐の江爲の詩に、「竹影橫斜水清淺、桂香浮動月黃昏」と、和靖二字を改めて疎影暗香と爲し、以て梅を詠じ、遂に千古の絶調を成す、余、初め之を讀み、以爲

千古絶調、余初讀之、以爲和靖亦太横、然  
 氣格乃過本句、不啻青出於藍、殆是神來  
 之筆、不謂之剽可也。

唐許棠宣宗時人、有送金吾侍御奉使日  
 東詩、曰、還鄉兼作使、到日益榮親、向化雖  
 多國、如公有幾人、孤山無返照、積水合蒼  
 晏、膝下知難住、金章已繫身、此亦冕卿之  
 類、仕彼爲侍御者、又張喬送賓貢金夷吾  
 奉使歸本國、曰、渡海登仙籍、還家備漢儀、  
 孤舟無岸泊、萬里有星隨、積水浮魂夢、流  
 年半別離、東風未廻日、音信杳難期、此恐  
 或是同人、然竟不可知其爲何人也。

彦九郎還日本、作詩餞之、座間走筆、甚不  
 工也、萍踪兩度到中華、歸國憑將涉歷誇、

へらく、和靖も亦ただ横なりと、然も氣格は乃本句に過ぐ、舊に  
 青の藍より出づるのみならず、殆ど是神來の筆なり、之を剽と  
 謂はずして可なり。

唐の許棠は、宣宗の時の人、金吾侍御の、日東に奉使するを送る  
 詩有り、曰、「卿に還り兼て使と作る、到るの日益、親を榮す、化  
 に向ふ國多しと雖、公の如きは幾人が有る、孤山返照無し、積水  
 蒼晏に合す、膝下知る住し難きを、金章已に身に繫る」と、此れ  
 亦冕卿の類、彼に仕へて侍御と爲る者なり、又、張喬の賓貢金夷  
 吾の奉使して本國に歸るを送るに曰、「海を渡り仙籍に登り、家  
 に還り漢儀に備はる、孤舟岸泊無し、萬里星隨有り、積水魂夢を  
 浮べ、流年半は別離、東風未だ廻らざる日、音信杳として期し難  
 し」と、此れ恐くば、或は是れ同人ならん、然も竟に其何人たる  
 を知る可らざるなり。

彦九郎、日本に還る、詩を作りて之を餞す、座間筆を走らす、甚  
 だ工ならざるなり、「萍踪兩度中華に到る、國に歸り憑て涉歴を

劍佩丁年朝帝宸。星辰午夜拂仙槎。驪歌送別三年客。鯨海遙征萬里家。此行倘有重來便。煩折琅玕一朵花。正德七年壬辰仲夏望日。姑蘇唐寅書。此詩真蹟儼然。江戸樽屋氏珍藏。彦九郎莫知其爲何人。以頸聯所稱觀之。似是士人奉使者。然無姓氏。豈亦商客之豪者歟。

居士五良大夫歸日本。敬將玉帛觀天顏。回首扶桑杳渺間。紅泊古鄣三佛地。杯傳新酒四明山。梅黃細雨江頭別。帆引清風海上還。明到賢王應有問。八方職貢溢朝班。大明正德癸酉夏六月朔。四明李春亭此詩藏於伊勢丹生邑神宮寺。五良大夫。松阪陶工。永正年間西渡。久寓南京。舶

將て誇る、劍佩丁年帝宸に朝す、星辰午夜仙槎を拂ふ、驪歌別を送る三年の客、鯨海遙に征く萬里の家、此行倘重來の便有らば、折るを煩はす琅玕一朵の花、正德七年壬辰仲夏望日、姑蘇の唐寅書す、此の詩真蹟儼然、江戸の樽屋氏珍藏す、彦九郎は其の何人たるを知る莫し、頸聯に稱する所を以て之を觀れば、是れ士人の奉使用する者に似たり、然も姓氏無し、豈んと亦商客の豪なる者か。

居士五良大夫の日本に歸るを送る、「敬で玉帛を將て天顏に觀ゆ、首を回らせば扶桑杳渺の間、紅は泊す古鄣三佛の地、杯は傳ふ新酒四明の山、梅は黄なり細雨江頭の別、帆は清風を引いて海上に還る、明に到らば賢王應に問ふ有るべし、八方職貢朝班に溢る、大明正德癸酉夏六月朔、四明の李春亭、此の詩伊勢丹生邑の神宮寺に藏す、五良大夫は、松坂の陶工、永正年間西渡し、久く南京に寓す、舶來陶器に、五良大夫與神瑞造るこ書す

來陶器有書五良大輔吳祥瑞造者、即在彼所作也、春亭不知何人、詩雖不工、亦奇珍也。

白香山蘇州詩、綠浪東西南北水、紅欄四百八十橋、直是我浪華光景、陸放翁登擬峴臺作、縈廻水抱中和氣、平遠山如醞藉人、宛然平安城風致。

李太白鳳皇臺詩、三山半落青天外、二水中分白鷺洲、或作「一水於義爲穩而氣格便劣耳、明人郭登壇頂詩、不知眼界高多少、地下行人似凍蠅、與眼花落井水底眠、一擬字法、若作地上、則不稱矣、是必至語勢、自然字法也。

七言律絕發句、以散句起、必須押韻、慵慢

る者あり、即ち彼に在て作りし所なり、春亭は何人なるを知らず、詩は工ならず、雖亦奇珍なり。

白香山の蘇州の詩に「綠浪東西南北の水、紅欄四百八十橋」云、直に是れ我が浪華の光景なり、陸放翁の擬峴臺に登る作に、「縈廻の水は中和の氣を抱き、平遠の山は醞藉の人の如し」云、宛然、平安城の風致なり。

李太白の鳳皇臺の詩に「三山半は落つ青天の外、二水中分す白鷺洲」或、一水に作る、義に於て穩と爲す、而も氣格は便ち劣るのみ、明人、郭登の壇頂の詩に、「知らず眼界高き多少ぞ、地下の行人凍蠅に似たり」云、「眼花井に落ちて水底に眠る」云、一擬の字法なり、若し地上に作らば則ち稱はず、是れ必至の語勢、自然の字法なり。

七言律絶の發句、散句を以て起さば、必ず須らく、押韻すべし、

之輩喜從省略、疎宕失禮甚不可也、且如絕句僅三韻耳、而起手不能用韻、何其贅鈍、窘縮耶、余七言發句、除對起外、一生不作、不引韻起者、亦爲學者慎之也。

樊虞論詩賦四過、假象太過、則與類相遠、命辭過壯、則與事相違、辨言過理、則與義相失、麗靡過美、則與情相悖、此誠金科玉條、學者可申而佩之。

余前既論古樂府不可爲矣、近得明人于無垢說曰、唐人不可爲古樂府、是知古樂府也、辭聲相雜、既無從辨音節、未會又難于歌、故不爲爾、然不效其體、而時假其名、以達所欲、出斯慕古而託焉者乎、近世一二名家、至乃逐句形模、以追遺響、則唐人所

懦弱の輩喜んで省略に従ふ、疎宕體を失す、甚だ不可なり、且、絶句の如き、僅に三韻のみ、而して起手、韻を用ふる能はず、何ぞ其れ贅鈍窘縮なるや、余七言發句、對起を除く外、一生韻を引きて起さざる者を作らず、亦學者の爲に之を慎むなり。

樊虞、詩賦の四過を論ず、假象、ただ過れば、則ち類と相遠し、命辭、莊に過ぐれば、則ち事と相違ふ、辯言、理に過ぐれば、則ち義と相失す、麗靡、美に過ぐれば、則ち情と相悖る、此れ誠に金科玉條なり、學者申して之を佩ふ可し。

余前に既に古樂府かきうの爲る可らざるを論ず、近り明人于無垢の説を得たり、曰、唐人、古樂府を爲らず、是れ古樂府を知るなり、辭聲相雜はる、既に辨ずるに從無し、音節未だ會せず、又歌ふに難し、故に爲らざるのみ、然るに其體に效はずして、時に其名を假り、以て出さん欲する所を達す、斯れ古を慕ひて託する者ならんか、近世一二名家、乃ち句を逐ひて形模し、以て遺響を追ふに至る、則ち唐人の吐棄する所なり、夫れ唐人能く爲り而し

吐弃矣、夫唐人能爲而不爲、今人奈何、不能爲而爲也、無垢名慎行、隆慶萬歷間名賢、當時李王之焰尤熾、故厭薄之而言也、

薛能屢譏諸葛武侯非王佐之才、遊嘉州後溪、云、山後經過滿徑蹤、隔溪遙見夕陽春、當時諸葛成何事、只合終身作臥龍、題籌筆驛云、葛相終宜馬革還、未開天意便開山、生欺仲達徒增氣、死見王陽合厚顏、流運有功終是擾、陰符多術得非姦、當初若欲酬三顧、何不無爲似有繆、又云、焚卻蜀書宜不讀、武侯無可律、余身真是蜉蝣撼大樹、何其不自知、量之甚、薛方貴時、秦宗權爲之吏、嘗坐法、苔背、薛口唱云、素脊鳴秋杖、烏鞞響暮廳、乃命決、後宗權起兵

て、爲らず、今人奈何んぞ爲る能はず而して爲るや、無垢名は慎行、隆慶萬歷の間の名賢なり、當時李王の焰尤熾なり、故に之を厭薄して言ふなり。

薛能、屢、諸葛武侯は王佐の才に非ずと譏る、嘉州の後溪に遊び、云、「山後經過す滿徑の蹤、溪を隔て、遙に見る夕陽の春くを、當時諸葛何事をか成す、只合に終身臥龍と作るべし」籌筆驛に題して云、「葛相終に宜しく馬革にて還るべし、未だ天意を開かず便ち山を開く、生きて仲達を欺き徒に氣を増す、死して王陽を見は合に厚顏すべし、流運功有るも終に是れ擾、陰符術多し姦に非るを得んや、當初若し三顧と酬めんぞ欲せば、何ぞ無爲にして有繆に似せざる」又云、「蜀書を焚却して宜しく讀まざるべし、武侯余が身を律す可き無し」云、眞に是れ蜉蝣、大樹を撼かす、何ぞ其自ら量を知らざるの甚だしき、薛、方に貴き時、秦宗權之が吏と爲る、嘗て法に坐し、背に苔たる、薛、口唱して云、「素脊秋杖に鳴る、烏鞞暮廳に響く」云、乃ち命決す、後、宗權

按薛能、  
當時此

首捕薛、令舉前詩、因續之云、乃飛三尺雪、  
 白日落文星、遂加害、其視武侯嘗罪李平、  
 免官、及侯薨、平慟哭、發病死、奚翹嘗環之、  
 隔也哉。

對偶語、一有所本、一無來處、則爲偏枯、猶  
 病非者、半身不遂也、老杜端午賜衣詩、自  
 天題處濕、當暑著來清、自天用易語、因對  
 以鄉黨籍字、鳳林戈未止、魚海路常難、上  
 句翻用、止戈爲武、故以行路難對之、山谷  
 咏猩猩毛筆、平生幾網屐、身後五車書、平  
 生二字見憲問篇、身後用晉張翰語、東坡  
 雪詩、漁蓑句好眞堪畫、柳絮才高不道鹽、  
 下三字亦皆有來歷、見良工苦心、一字不  
 苟、作詩用事、當如是稱停也、如賈浪仙過

兵を起し、首として薛を捕へ、前詩を舉げしむ、因て之を續で  
 云、又は飛ぶ三尺の雪、白日文星落つと、遂に害を加ふ、其武  
 侯嘗て李平を罪し官を免す、侯の薨するに及び、平、慟哭し病を  
 發して死するに視ふれば、奚そ翅に香環の隔のみならんや。

對偶の語、一、本づく所有り、一、來處無ければ則ち偏枯と爲る、  
 猶は癖を病む者、半身遂げざるがごとし、老杜の、端午、衣を賜  
 はる詩に、「天より題處濕ひ、暑に當て著し來りて清し」と、自天  
 は、易の語を用ふ、因て對するに鄉黨籍の字を以てす、「鳳林戈  
 未だ止まず、魚海路常に難し」、上句は、戈を止むるを武と爲す  
 を翻用す、故に行路難を以て之に對す、山谷の猩猩毛筆を咏す、  
 「平生幾網の屐、身後五車の書」、平生の二字は憲問篇に見ゆ、身  
 後は、晉の張翰の語を用ふ、東坡雪の詩に、「漁蓑の句は好し眞に  
 畫くに堪へたり、柳絮才高くして鹽を道はず」、下三字亦皆來歷  
 あり、良工の苦心、一字苟もせざるを見る、詩を作り事を用ゆ、當  
 に是の如く稱停なるべきなり、賈浪仙、「橋を過ぐれば野色分

橋分野色、移石動雲根、人多喜誦之、韻句誠佳、此必先得者、惜野色貂續、不免偏枯耳、嘗與清公續論詩及之、公續曰、詩人多以雲根爲石、以雲觸石而生也、然張協詩云、雲根臨八極、雨足灑四溟、則直指雲言也、賈詩亦然、非用典也、余曰、卽非用典、雲根有力、野色平平、終不免偏枯爾、公續曰、論誠精矣、抑責於人終無已夫、余曰、詩以律稱、不容不嚴、公續晒曰、卿可謂詩家商君矣。

羞將短髮還吹帽、笑倩傍人爲正冠、人只知吹帽爲孟嘉事、而不知正冠亦用家語子路語、伯仲之間見伊呂、指揮若定失蕭曹、伯仲之間取諸典論、因用陳平傳天下

れ、石を移せば雲根動く」の如き、人多く喜で之を誦す、韻句誠に可なり、此必ず先つ得る者、惜むらくは野色は貂續、偏枯を免れざるのみ、嘗て清公續と詩を論じて之に及ぶ、公續曰、詩人多く雲根を以て石と爲す、雲、石に觸れて生ずるを以てなり、然ら張協の詩に云、「雲根八極に臨む、雨足四溟に灑く、則ち直に雲を指して言ふなり、賈詩も亦然り、典を用ふるに非るなり、余曰、卽ち典を用ふるに非ざるも、雲根は力有り、野色は平平、終に偏枯を免れざるのみ、公續曰、論誠に精なり、抑も人を責むるに、終に已む無きかな、余曰、詩は律を以て稱す、嚴ならざるべからず、公續晒つて曰、卿は詩家の商君と謂ふ可きなり」と。

「短髮を將て帽を吹くを羞つ、笑つて傍人を倩ふて爲に冠を正さしむ」、人只、帽を吹くは孟嘉の事たるを知りて、冠を正すも、亦家語の子路の語を用ふる知らず、「伯仲の間に伊呂を見る、指揮若し定らば、蕭曹を失す」、伯仲の間は、新諸を典論に取

指揮則定對之。寵光蕙葉添多碧、點注桃花舒、小紅寵光、詩小雅語、點注見鍾會孔雀賦、五更鼓角聲悲壯、三更星河影動搖、聲悲壯本于禰衡漁陽搥、故星動搖亦取諸漢武故事、正得斤兩相稱、詩律之細如此、真無一字無來歷、杜詩豈可輕讀乎哉、盍簪喧轡馬、列炬散林鴉、途窮那免哭、身老不禁愁、此竝下句偏枯、偶失之也、邵注引孔仲年老失意、不禁愁恨、僞蘇所捏造耳、如子雲清自守、今日起爲官、用借對法、假雲對日、兩句一意、故不病偏枯、非後人所敢學也。

京師五山禪徒、好爲諧詩聯句、尤要的對、古言必以古言、俗語必以俗語、聖經佛典

る、因て陳平傳の天下の指揮則ち定るを用ひて之に對す、「蕙葉を寵光して、多碧を添へ、桃花を點注して小紅を舒ぶ」、寵光は詩小雅の語、點注は鍾會の孔雀賦に見ゆ、「五更の鼓角聲悲壯、三更の星河影動搖」、聲悲壯は禰衡の漁陽搥に本づく、故に見動搖も亦諸を漢武の故事に取る、正に斤兩相稱ふを得、詩律の細、此の如し、眞に一字さして、來歴無きは無し、杜詩豈輕讀す可けんや、「盍簪轡馬喧しく、列炬林鴉散す」、「途窮して、那ぞ哭するを免れん、身老いて愁に禁へず」、此竝に下句偏枯、偶々之を失するなり、邵注に、孔仲年老いて意を失し、愁恨に禁へざるを引く、僞蘇の捏造する所のみ、「子雲清自ら守り、今日起て官さ爲る」の如きは、借對法を用ひ、雲を假りて日に對す、兩句一意、故に偏枯を病まず、後人の敢て學ぶべき所に非るなり。

京師五山の禪徒、好で諧詩聯句を爲る、尤的對を要す、古言は必ず古言を以てし、俗語は必ず俗語を以てす、聖經佛典皆然り、

皆然蓋試才學也、如月是無量壽、山夫不  
勸尊、夢得劉夢得、寤生鄭寤生、櫻東山地  
主、梅北野天神、箬箱前住扇、舟板再來橋、  
亦可以解頤矣。

或對「天南星是藥」以「池北月非茶、人間池  
北月何物」答曰、「吾亦不知、定非茶耳、是與  
徒然草所謂白孟瑠璃、一對雅譚、又、米元  
章嘗賦曰、「飯白雲留子、茶甘露有兄、人不  
省、露兄叩之、乃曰、「只是甘露哥哥耳、亦可  
笑也。」

山谷湯婆詩、天明更傾瀉、頰面有餘燠、以  
煖足者頰面、醜醜窮措大哉、履雖鮮、不加  
于首冠、雖蔽、不以直履、君子於言、可苟焉  
而已乎。

蓋、才學を試むるなり、「月は是れ無量壽、山は夫れ不動尊」「夢  
に得たり劉夢得、寤めて生む鄭寤生」、「櫻は東山の地主、梅は  
北野の天神」、「箬箱は前住扇、舟板は再來の橋」の如き、亦以て  
頤を解く可し。

或ひに「天南星は是藥」に對するに「池北月は茶に非ず」を以て  
す、人問ふ、池北月は何物ぞ、答へて曰、「吾も亦知らず、定めて  
茶に非るのみぞ、是れ徒然草に謂はゆる白孟瑠璃、一對の雅譚  
なり、又、米元章嘗て賦して曰、「飯は白く雲は子を留め、茶は甘  
く露に兄有り」云々、人、露兄を省せず、之を叩くに、乃曰、「只、是  
れ甘露の哥哥のみぞ、亦笑ふ可きなり。」

山谷の湯婆の詩に、「天明更に傾瀉し、面を類ひて餘燠有り」云々、  
足を煖むる者を以て面を類ふ、醜醜の窮措大なるかな、履、鮮し  
かなり、雖、首に加へず、冠蔽れたり、雖、以て履に直かず、君  
子、言に於て苟もす可くして已まんや。

傾城本不詳語猶言亡國李延年歌一顧  
 傾人城再顧傾人國寧不知傾城與傾國  
 佳人難再得後世遂爲美人通稱如梁劉  
 緩詩題咏名士悅傾城是也故李白在明  
 皇前稱貴妃曰名花傾國兩相歡若講本  
 義唐突殊甚蓋猶今世城門以敵陣名自  
 稱不嫌其爲惡語也南門稱追手謂攻破其  
 軍追入于城也後門稱  
 搦手謂要其遺  
 逃擒縛于此也

杜牧詩誰家洛浦神十四五來人羅隱詩  
 中和節後奉瓊瑰坐讀行吟數月來來言  
 已來猶云許也杜光庭麻姑洞記中有約  
 五尺以來高六寸以來方二丈以來潤一  
 尺六寸以來相去三里以來等文蓋當時  
 語也揚萬里好用此字清愁舊是天來遠

傾城は、本不詳の語、猶亡國と言ふがごとし、李延年の歌に、「一  
 顧、人の城を傾け、再顧、人の國を傾く、寧ぞ城を傾くるを、國を  
 傾くるを知らざらん、佳人再び得難し」と、後世遂に美人の通  
 稱爲る、梁、劉緩の詩題に、名士、傾城を悦ぶを咏するが如き、  
 是なり、故に李白、明皇の前に在て、貴妃を稱して、「名花傾國兩  
 ながら相歡す」と曰ふ、若し本義を講せば、唐突殊に甚し、蓋、猶  
 ほ今世、城門、敵陣の名を以て自稱し、其惡語たるを嫌はざるが  
 ごごきなり、南門、追手を稱す、其軍を攻破し、追て城に入るを謂  
 ふなり、後門、搦手を稱す、其遺逃を要し、此に擒縛  
 するを謂  
 ふなり。

杜牧の詩に、「誰が家か洛浦の神、十四五來の人」、羅隱の詩に、  
 「中和節後瓊瑰を奉じ、坐讀行吟數月來」、來とは已來を言ふ猶、  
 許と云ふがごとし、杜光庭の麻姑洞記中に、約五尺以來、高さ  
 六寸以來、方二丈以來、潤一尺六寸以來、相去三里以來等の文  
 有り、蓋、當時の語なり、揚萬里、好で此字を用ふ、清愁舊は是  
 れ天來遠し、「竹扉日影針來大なり」、「西湖懷せ得て盆來大な

竹扉日影針來大、西湖瘦得盆來大、道是  
荒城斗來大、放出釣臺寸來許、諸餘不遑  
枚舉、范成大詩、新秋病骨頓成衰、不度溪  
橋半月來、本羅隱句也。

漢宣帝曰、俗儒不達時宜、賈太傅曰、俗吏  
不識大體、此二者古今之通弊、王粲儒吏  
論所云、刀筆之吏皆服雅訓、竹帛之儒亦  
通文法、噫、其難矣、抑世有以俗儒爲俗吏  
者、其弊更何如哉、太白詩曰、魯叟談五經、  
白髮死章句、問以經濟策、茫如墜雲霧、此  
尤講學家之通患也、至其甚者、如桃源中  
人、不知有漢、安問晉魏、況於資治通鑑、文  
獻通考等政教典禮之書、真混然途之人、  
乃有靦面目、傲然誇張、開口便說治國平

り、「道ふ是れ荒城斗來大」「放出す釣臺寸來許」、諸の餘枚舉  
に違あらず、范成大の詩に、「新秋病骨頓に衰を成し、溪橋を度  
らざる半月來」、羅隱の句に本くなり。

漢の宣帝曰、俗儒、時宜に達せず、賈太傅曰、俗吏大體を識ら  
ず、此二者は古今の通弊なり、王粲の儒吏論に云はゆる、刀筆  
の吏も、皆雅訓に服し、竹帛の儒も、亦文法に通ず、噫、其れ難  
し、抑世に俗儒を以て俗吏と爲す者有り、其弊更に何如んぞや、  
太白の詩に曰、「魯叟五經を談じ、白髮章句に死す、問ふに經濟  
策を以てせば、茫として雲霧に墜つるが如し」、此尤も講學家  
の通患なり、其甚しき者に至ては、桃源中の人の如し、漢有るを  
知らず、安んぞ晉魏を問はむ、況や資治通鑑、文獻通考、等の政  
教典禮の書に於てをや、真に混然たる途の人なり、乃ち靦たる  
面目有り、傲然誇張し、口を開いて便も、國を治め天下を平にす  
るを説く、理を説くときは則ち唾三尺、用に施すときは則ち手

天下、說理則噪三尺、施用則手五斤、直可、  
一棒打殺與狗子喫耳。

趙昌父曰、古人以學爲詩、今人以詩爲學、  
羅景綸曰、近時講性理者、舍六經而觀語  
錄、是舍禪而宗兄也、予見今之學者、不趨  
彼、則陷于此矣、然溺於詩者、猶可援也、頭  
巾氣習、病入膏肓、不可救藥已。

意行、蓋取意恣行、無所拘局也、劉禹錫蠻  
子歌、腰斧上高山、意行無舊路、是也、東坡  
策杖無道路、直造意所便、放翁、隨意東西  
不問途、此卽意行之義、王安石、意行卻得  
前年路、看盡梅花看竹來、翻案劉句也、宋  
史蕭注傳、王安石、意行直前、敢當天下大  
事、其義尤可見也。

五斤、直ちに一棒に打殺し狗子に與へて喫せしむ可きののみ。

趙昌父曰、古人は學を以て詩と爲す、今人は詩を以て學と爲  
す、羅景綸曰、近時、性理を講ずる者六經を捨て語錄を觀る、是  
れ禪を捨て、兄を宗とするなり、予今の學者を見るに、彼に趨  
かざれば此に陷る、然ども詩に溺るる者は、猶ほ援ふ可きなり、  
頭巾氣習、病・膏肓に入るは救藥す可らざるのみ。

意行は、蓋、意を取り、恣行、拘局する所無きなり、劉禹錫の蠻子  
歌に、「斧を腰にし高山に上る、意行舊路無し」と、是なり、東坡、  
策杖道路無し、直に造る意の便なる所、放翁「意に隨て東西途  
を問はず」と、此卽ち意行の義なり、王安石、「意行卻て得たり  
前年の路、梅花を看盡して竹を看來る」と、劉句を翻案せしな  
り、宋史蕭注傳に、王安石、意行直前、敢て天下の大事に當るこ、  
其義尤見る可きなり。

語辭文字、不易押韻、王維、幽尋得此地、詎有<sup>レ</sup>一人曾、王昌齡、借問白頭翁、垂綸幾年也、韓愈、隔絕門庭、遠擠排陞、級纒、韋應物、亭午一來尋、院幽僧亦獨、蘇軾、欲買柯氏林、茲計待君必、又苦熱、誠知處處昏、王安石、進律朝章古、疏恩物議僉、張耒、平生千金質、戒懼敢忘暫、陳造、臞鳴久欲忘、食蛙近亦稍、黃庭堅、夏扇日在搖、行樂亦云聊、蔡松年、青鏡髮蕭蕭、及此霜雪未、皆押得穩安可、則也。

古詩轉韻、初無定式、或二語一轉、或四語一轉、或數十語乃轉、韻數多少、參差、隨宜取便自在也、然非爲韻窮而轉、其處意思必轉換、是爲更端轉機也、故讀者辨解數、

語辭の文字、押韻し易らず、王維、幽尋此地を得たり、詎ぞ一人の曾する有らん、王昌齡、借問す白頭翁、綸を垂る幾年ぞや、韓愈、隔絶門庭遠し、擠排陞級纒、韋應物、亭午一たび來尋、院幽僧亦獨、蘇軾、買はんぞ欲す柯氏の林、茲の計、君を待て必ず、又「苦熱、誠に知る處處昏」、王安石、「律を進む朝章古、恩を疏す物議僉」、張耒、「平生千金の質、戒懼敢忘れんや暫も」、陳造、「鴨を臞にす久く忘れんぞ欲す、蛙を食ふは近亦稍」、黃庭堅、「夏扇日に搖に在り、行樂亦云に聊」、蔡松年、「青鏡髮蕭々、此霜雪の未なるに及ぶ」、皆押し得て穩安、則る可きなり。

古詩、韻を轉する、初めより定式無し、或は二語一轉、或は四語一轉、或は數十語にして乃ち轉す、韻數多少參差、宜しきに隨ひ便を取る自在なり、然も韻窮せるが爲に轉するに非ず、其處意思必轉換す、是れ端を更むるが爲に機を轉するなり、故に讀者解數を辨じ、須く韻に照らして分截すべきなり、若し古詩を作

須照韻分截也。若作古詩、不知斯訣、意不轉而轉韻、貽笑大方矣。

歌行換韻、平仄互取、參錯成章、音節抑揚得宜、蓋正調也。然劉廷芝公子行、第十一句、自麻轉陽、代悲白頭翁、第十五句、自東轉先、次又轉支、張若虛春江花月夜、第二十一句、自尤轉灰、次轉文、又轉麻、岑參送顏真卿、第九句、自麻轉文、少陵曹將軍畫馬引、第十三句、自微轉麻、丹青引、第五句、自元轉文、又盧照鄰長安古意、有自齊轉文、駱賓王帝京篇、有自微轉文、自支轉麻、此姑就于鱗唐詩選舉之、自餘不遑僂指、至如木蘭歌、凡韻六轉、皆以平韻承接、其不必拘可見已、有一槩泥者、故爲拈出之。

り、斯の訣を知らずして、意轉せずして韻を轉すれば、笑を大方に貽さむ。

歌行、韻を換へ、平仄互に取り、參錯、章を成し、音節抑揚宜しきを得るは、蓋、正調なり、然ども劉廷芝の公子行、第十一句、麻より陽に轉ず、白頭を悲しむ翁に代る第十五句、東より先に轉ず、次又、支に轉ず、張若虛の春江花月夜、第二十一句、尤より灰に轉ず、次は、文に轉じ、又麻に轉ず、岑參の顏真卿を送る、第九句、麻より文に轉ず、少陵の曹將軍畫馬の引、第十三句、微より麻に轉ず、丹青引、第五句、元より文に轉ず、又、盧照鄰の長安古意、齊より文に轉する有り、駱賓の帝京篇、微より文に轉じ、支より麻に轉する有り、此れ姑らく于鱗の唐詩選に就て之を舉ぐ、自餘は僂指するに遑あらず、木蘭歌、凡そ韻六轉、皆平韻を以て承接するが如きに至ては、其必ずしも拘らざる、見る可きのみ、一概に泥む者有り、故に爲に之を拈出す。

五言古詩、一韻到底を責ぶ、篇長きも肯て轉換せず、通韻を以て

五言古詩、貴一韻到底、篇長不肯轉換、以通韻自在也、然亦有逐段轉韻者、如蔡邕飲馬長城窟行、齊武帝西洲曲、蓋以音節抑揚爲妙也、又有末梢忽換韻收住者、一滾而出、戛然而止、奇警活脫、頓挫尤妙、如魏文帝西北有浮雲、上八句泰韻、末二句云棄置勿復陳、客子常畏人、陳思王轉蓬離本根、上十句東韻、末二句云去去莫復道、沈憂令人老、是也。

同訓字、見一聯中、李白、疇昔不識君、知君好賢才、杜甫、方丈渾連水、天台總映雲、王維、懸知倚門望、遙識老萊衣、綠底名愚谷、都由愚所成、錢起、不奈扁舟去、其如決計何、韓愈、縱橫乍依行、爛漫忽無次、李端、飲

自在にするなり、然も亦段を逐ひ韻を轉ずる者有り、蔡邕の馬に長城窟に飲ふ行、齊の武帝の西洲曲の如き、蓋、音節抑揚を以て、妙を爲すなり、又、末梢忽ち韻を換へて收住する者有り、一滾して出だし、戛然として止む、奇警活脫、頓挫尤も妙、魏の文帝「西北に浮雲有り」、上八句は泰韻、末の二句に云「棄置して復陳する勿れ、客子常に人を畏る」、陳思王の「轉蓬本根を離る」、上の十句は東韻、末の二句に云「去れ去れ復道ふ莫れ、沈憂人をして老い令む」は、是れなり。

同訓の字、一聯の中に見ゆ、李白「疇昔君を識らず、知る君が賢才を好む」、杜甫「方丈渾て水に連る、天台總て雲に映す」、王維「懸に知る倚門の望み、遙に識る老萊の衣」、錢起「懸に縁て愚谷の名づく、都て愚の成す所に由る」、韓愈「不奈扁舟の去る、其れ計を決するを如何ん」、李端「縱横乍依行に依る、爛漫忽ち次

馬逢黃菊離家值白雲、每見先鳴早、常驚  
後進多、崔峒曾見長洲苑、嘗聞大雅篇、朱  
慶餘、資身唯藥草、教子但詩書、許渾、務閑  
唯印吏、公退只基僧、皇甫冉、圖書唯藥籙、  
飲食止藜藿、劉禹錫、官達翻思退、名高卻  
不誇、白居易、是日孤舟客、此地亦離群、司  
空曙、仙方當見重、消疾本應便、盧綸、恐看  
新髻色、怯問故人名、杜牧、夜闌終耿耿、明  
發竟遲遲、喻鳧、竟蒙分玉石、終不離塵埃、  
僧齊己、使應過洛水、即未上嵩峰、劉廷芝、  
但看古來歌舞地、唯有黃昏鳥雀悲、杜甫、  
客來但知留一醉、盤中祇有水精鹽、即從  
巴峽穿巫峽、便下襄陽向洛陽、白居易、目  
昏思寢即安眠、足軟妨行便坐禪、豈唯不

無し、李端「馬に飲カみて黃菊に逢ひ、家を離れて白雲に値ふ」、  
「先鳴の早きを見る毎に、常に驚く後進の多きを」、崔峒「曾て見  
る長洲の苑、嘗て聞く大雅の篇」「身に資す唯藥草、子に教ふ  
但だ詩書」、許渾、「務閑唯、印吏、公退只、基僧」、皇甫冉「圖書唯  
藥籙、飲食止藜藿」、劉禹錫「官達して翻て退くを思ひ、名高く  
して卻て誇らず」、白居易「是の日孤舟の客、此地亦離群」、司  
空曙「仙方當に重んぜらるべし、消疾本應に便なるべし」、盧綸  
「看るを恐る新髻の色、問ふを怯る故人の名」、杜牧「夜闌終に耿  
々、明發竟に遲々」、喻鳧「竟に玉石を分つを蒙り、終に塵埃を離  
れず」、僧齊己「便ち應に洛水を過ぐべし、即ち未だ嵩峰に上ら  
ず」、劉廷芝「但、看る古來歌舞の地、唯、黃昏鳥雀の悲ひ有り」、  
杜甫「客來て但、知る留て一醉するを、盤中祇、水精鹽有り」、  
「即ち巴峽より巫峽を穿ち、便ち襄陽を下り洛陽に向ふ」、白居  
易「目昏して寢ぬるを思ふ即ち安眠、足軟にして行を妨ぐ便  
ち坐禪」、豈唯、清文の力を得ざるのみならんや、但、恐る空く

得清文力但恐空傳冗吏名、鬻毛遇病雙  
 如雪、心緒逢秋一似灰、許渾、一官唯買蓋  
 公室、但得身閑日月長、劉兼、蜀箋都有三  
 千幅、總寫離情寄孟光、張籍、復恐匆匆說  
 不盡、行人臨發又開封、戴叔倫、欲寄遠書  
 還不敢、卻愁驚動故鄉人、姚合、玉佩聲微  
 班始定、金函光動按初來、羅鄴、不愁世上  
 無人識、唯怕村中沒酒沽、王建、知時每笑  
 論兵法、識勢還輕立戰功、如猶尙、尤最爲  
 作、如似、多足、能解等、不必舉焉、白詩、葦血  
 屏除唯對酒、歌鐘放散只留琴、更無俗物  
 當人眼、但有泉聲洗我心、兩聯中、唯只但、  
 三字連用、各有所當、子細玩味、其義可見  
 也。

冗吏の名を傳ふるを、「鬻毛病に遇て雙つながら雪の如く、心緒秋に逢ふて一に灰に似たり」、許渾「一官唯買蓋公の室、但身閑なるを得て日月長し」、劉兼「蜀箋都有三千幅有り、總て離情を寫して孟光に寄す」、張籍「復恐る匆匆說盡さざるを、行人發するに臨て又封を開く」、戴叔倫、「遠書を寄せん」と欲し還て敢てせず、卻て愁ふ故郷の人を驚動するを、「姚合」「玉佩聲は微にして班始て定り、金函光は動て按初て來る」、羅鄴「愁へず世上人の識る無きを、唯、怕る村中酒の沽ふ没きを」、王建「時を知て毎に笑ふ兵法を論ずるを、勢を識て還て釋んず戰功を立つるを」と、猶、尙、尤、最、爲、作、如、似、多、足、能、解、等、の如き、必ずしも舉げず、白詩葦血屏除して唯酒に對す、歌鐘放散して只琴を留む、更に俗物の人眼に當る無し、但泉聲の我心を洗ふ有り、兩聯中、唯、只、但、の三字連用す、各當る所有り、子細に玩味せば、其義見る可きなり。

瀛奎律隨評李商隱隋宮詞沈香甲煎爲庭燎玉液瓊酥作壽杯云以爲字對作字作卽是爲也雍陶秋園詩晚花開爲雨殘果落因風云因卽是爲兩字相犯也姚合山中詩酒用林花釀茶將野水煎云用字將字元一般不可爲法不得已則然隨園詩話亦嫌如字與似字犯重云竹垞爲放翁摘出百餘句後人當以爲戒此雖作法過嚴然凡是類非不得已所宜避也如知對覺疑對怪亦不若省也。

杜詩斬新花藥未應飛白詩斬新蘿徑合洛浦禪師偈斬新日月特地乾坤斬字形容其新言斬焉忽新也遜齋詩話云在可解不可解之間夫明晰如是何不可解之

瀛奎律隨に、李商隱の隋宮の詞、「沈香甲煎庭燎」し、玉液瓊酥壽杯を作すを評して云、爲の字を以て作の字に對す、作は卽ち是れ爲なり、雍陶の秋園の詩に「晚花の開くは雨の爲めなり、殘果の落つるは風に因る」、云ふ、因は卽ち是れ爲なり、兩字相犯す、姚合、山中の詩に、「酒は林花を用ひて釀し、茶は野水を將て煎す」、云ふ、用の字、將の字、元、一般、法を爲す可らず、已むを得ざれば則ち然り、隨園詩話にも、亦如の字に似の字に犯重なるを嫌ふ、云ふ、竹垞放翁の爲に、百餘句を摘出す、後人當に以て戒を爲すべし、此れ法を作す過嚴なり、雖も、然も凡そ是の類已むを得ざるに非れば、宜しく避くべき所なり、知の覺に對し、疑の怪に對するが如き、亦省くに若かざるなり。

杜詩に、「斬新の花藥未だ應に飛ぶべからず」、白詩に、「斬新蘿徑合す」、洛浦禪師の偈に、「斬新日月、特地乾坤」、斬の字、其新を形容す、斬焉と忽ち新なるを言ふなり、遜齋詩話に云、解す可く、解す可らざるの間に在り、夫れ明晰是の如くならば、何ぞ

有、又、宋詩「西風一紙征鴻信、剗地催人辨  
夾衣、無端又被東風惡、剗地多添一夜寒、  
秋成苦作兼旬雨、剗地街頭米價高、剗削  
也、蓋、厓、岬、削、之、則、勢、斗、峻、矣、因、爲、忽、驟、之  
辭、有、俄、然、驚、駭、之、意、蕉、中、詩、語、解、以、爲、迫  
辭、未、盡、

詩家毎用爛漫字、而字書無明解、蓋物夥  
盛之貌、不唯稱花之歷亂、霞之灼爍、凡事  
淋漓酣足之狀、皆謂之爛漫、譯、頭、地、豎、累、  
又稱婆娑紛綸之貌、譯、地、羅、婆、累、按、古、人  
使用之例、可以會其意矣、莊子在宥篇、大  
德不同、而性命爛漫矣、列女傳、築造爛漫  
之樂、上林賦、靡爛漫于前、謝眺、聽歌賦、  
乍連延以爛漫、時頓挫而抑揚、沈約、郊居

解す可らざるここの之れ有らん、又、宋詩に、「西風一紙征鴻  
の信、剗地人を催して夾衣を辨す」、「端なく又東風に惡まれ、  
剗地多く添ふ一夜の寒」、「秋成苦に兼旬の雨を作さば、剗地街  
頭米價高し」、「剗は削なり、蓋、厓、岬、之を削れば、則ち勢、斗峻  
なり、因て忽驟の辭を爲す、俄然驚駭の意あり、蕉中の詩語解  
に以て迫辭を爲すは、未だ盡さず。

詩家毎に爛漫の字を用ふ、而も字書に明解無し、蓋、物の夥盛の  
貌、唯、花の歷亂、霞の灼爍を稱するのみならず、凡そ事の淋漓  
酣足の狀、皆之を爛漫と謂ふ、頭地豎累と譯す、又、婆娑紛綸の  
貌と稱す、地羅婆累と譯す、古人使用の例を按ずれば、以て其意  
を會す可し、莊子在宥篇に、「大徳は同せず性命爛漫たり」、列女  
傳に、「築爛漫の樂を造る」、上林賦に、「靡爛漫前に爛漫たり」、謝  
眺の歌を聽く賦に、「乍ち連延以て爛漫、時に頓挫して抑揚す」、

賦始則金石鏘鏘終以魚龍爛漫竝雜亂之貌魯靈光殿賦「流離爛漫散亂之意樂府前溪歌黃葛生爛漫誰能斷葛根繁茂之狀壽陽樂長淮何爛漫廣遠之勢要之皆夥盛意也陳子昂空濛微雨霽爛漫曉雲歸杜甫主人情爛漫持答翠琅玕衆雜爛漫睡喚起霑盤餐犬羊曾爛漫宮闕尙蕭條歸期豈爛漫別意或感激定知相見日爛漫倒芳樽已撥形骸累眞爲爛漫深爛漫通經術光芒刷羽儀如絲氣或上爛漫爲雲雨侵星驅之去爛漫任遠適李白身世殊爛漫田園久蕪沒待取明朝酒醒罷與君爛漫尋春暉韓愈開筵交履寫爛漫倒家釀縱橫乍依行爛漫忽無次前低

沈約の郊居賦に「始めは則金石鏘鏘終は以て魚龍爛漫」に、竝に雜亂の貌、魯靈光殿賦に「流離爛漫」は散亂の意、樂府前溪歌に「黃葛生じて爛漫、誰か葛根を斷たん」、繁茂の狀、壽陽樂に、「長淮何ぞ爛漫」廣遠の勢、之を要するに、皆夥盛の意なり、陳子昂「空濛微雨霽れ、爛漫曉雲歸る」、杜甫「主人情爛漫、持答翠翠琅玕」、衆雜爛漫にして睡る、喚び起し盤餐を嗜す、「犬羊曾て爛漫、宮闕尙は蕭條」、「歸期豈爛漫ならんや、別意或は感激」、「定めて知る相見の日、爛漫芳樽を倒す」、「已に形骸の累を撥し、眞に爛漫の深を爲す」、「爛漫經術に通じ、光芒羽儀を刷す」、「絲の如き氣或は上り、爛漫雲雨を爲る」、「星を侵して之を驅りて去り、爛漫遠く適くに任す」、李白、「身世殊に爛漫、田園久しく蕪沒」、「明朝酒の醒るを待ち取りて罷め、君と爛漫春暉を尋ねん」、韓愈、「筵を開いて履寫を交ふ、漫爛家釀を倒

劃開闔、爛漫堆衆斃、離思春冰泮、爛漫不可收、近憐李杜無檢束、爛漫長醉多、文辭元稹、芳遊春爛熳、晴望月團圓、飲荒情爛漫、風棹樂時拚、同年同拜校書郎、觸處潛行爛漫狂、有酒有酒方爛漫、飲酣拔劍心眼亂、白居易、今朝餐又飽、爛漫移時睡、假日無公事、爛漫不能休、六七年前狂爛漫、三千里外思裴回、甘從此後支離臥、賴是從前爛漫遊、曾經爛漫三年著、欲棄空箱似少恩、郭利貞、爛漫唯愁曉、周游不問家、又作春風爛漫晴、霜晴爛漫東窓日、一笑山坡又看梅、村市醉後作、未敢羞空囊、爛漫詩千章、僧法常、優游麴世界、爛漫枕神仙、丁鶴年、韶光淑氣遂巡退、暑雨炎風爛漫

す、「縱横乍ち行に依る、爛漫忽ち次無し」、「前低開闔を劃し、爛漫衆斃を堆す」、「離思春冰泮り、爛漫收む可らず」、「近ろ憐む李杜檢束無し、爛漫長醉文辭多し」、元稹、「芳遊春爛熳、晴望月團圓」、「飲荒情爛漫、風棹樂時拚」、「同年同く拜す校書郎、觸るる處潛行爛漫して狂す」、「酒有り酒有り方に爛漫、飲酣劍を抜て心眼亂る」、白居易、「今朝餐又飽き、爛漫時を移して睡る」、「假日公事無し、爛漫休する能はず」、「六七年前狂爛漫、三千里外思ひ裴回」、「甘んじて此より後支離して臥す、賴に是れ從前爛漫の遊び」、「曾經爛漫三年の著を經、空箱を棄てんさ欲するも少恩に似たり」、郭利貞、爛漫唯愁を愁ふ、周游家を問はず、又「春風爛漫の晴を作す」、「霜は晴る爛漫東窓の日、一笑山坡又梅を見る」、村市醉後の作に「未だ敢て空囊を羞ぢず、爛漫詩千章」、僧法常、「優游麴世界、爛漫神仙を枕にす」、丁鶴年、「韶光淑氣遂巡して退き、暑雨炎風爛漫して來る」、周水言、

漫來周永言、春愁爛漫來難遣、午夢飄蕭去莫遮、張以寧、昇平不復後庭曲、睡起漁陽爛漫聽、文徵明、胸中爛漫富丘壑、信手塗抹皆天真、王世貞與來爛漫揮毫罷、且復婆娑里社歸、皆稱十分之勢、淋漓酣足之狀也、諸集鐫本漫訛作漫、今悉改正之、

說見于前

淮南子、夏桀之時、主闇晦而不明、道瀾漫而不脩、王褒洞簫賦、悼恹瀾漫、亡耦失儔、左思嬌女詞、濃朱衍丹脣、黃吻瀾漫赤、嵇康琴賦、留連瀾漫、嗚噓終日、張協七命、瀾漫狼藉傾、榛倒壑、鮑昭詩、生事本瀾漫、張玉穀、古詩賞析、如瀾之漫、言繁多也、余謂亦與瀾漫同、猶言紛綸也。

「春愁瀾漫來て遣り難し、午夢飄蕭去て遮る莫し」、張以寧、「昇平復後庭の曲ならず、睡起漁陽瀾漫して聽く」、文徵明、「胸中瀾漫丘壑に富み、手に信せて塗抹皆天真」、王世貞、「興來りて瀾漫毫を揮ひ罷め、且復婆娑して里社歸る」、皆十分の勢、淋漓酣足の狀を稱するなり、諸集鐫本、訛りて漫に作る、今悉く之を改正す。

說前に見ゆ。

淮南子に、「夏桀の時、主闇晦にして明ならず、道瀾漫にして脩らず」、王褒の洞簫賦に、「悼恹瀾漫、耦を亡ひ儔を失ふ」、左思の嬌女詞に、「濃朱、丹脣を衍し、黃吻瀾漫赤し」、嵇康の琴賦に、「留連瀾漫、嗚噓終日」、張協の七命に、「瀾漫狼藉、榛を傾け壑を倒にす」、鮑昭の詩に、「生事本瀾漫」、張玉穀の古詩賞析に、瀾の漫なるが如し、繁多なるを言ふなりと、余謂ふ、亦瀾漫と同じ、猶紛綸と言ふがごときなり。

廻文體、人名藥名等詩、區區安排、誠出苦心、輕薄諸生、銜才所爲、殆近兒戲、苟爲人師、號稱先生者、作此伎倆、不亦失體乎、詩固遊戲耳、然苟涉輕薄者、不可不慎也。

排律、強作長篇、亦輕薄銜才、天闕剗藤耳、孰能勉強讀之、區區苦心、費力徒爲絮叨、宛言、何其不自惜耶、如及百韻、始於老杜、然僅一首、繼之者白樂天、集中凡三首、是乃大家伎倆、後人倣襲、不知量矣、清人徐增說、唐詩以十二句爲排律、正局、故其選端取六韻、末載八韻、僅一首耳、雖頗偏見、良有以也。

正德辛卯、韓使來聘也、江戸學士、就其館中、唱和相競、如高玄岱三百九十韻、室鳩

廻文體、人名藥名等の詩、區々安排、誠に苦心に出づ、輕薄諸生、才を銜ふて爲す所、殆んど兒戲に近し、苟も人師を爲り、先生を號稱する者、此伎倆を作す、亦失體ならずや、詩は固より遊戲のみ、然ども苟も輕薄に涉る者は、慎まざる可らざるなり。

排律、強いて長篇を作る、亦輕薄才を銜ひ、剗藤を天闕するのみ、孰か能く勉強して之を讀まん、區々心を苦め、力を費し、徒に絮叨宛言を爲す、何ぞ其れ自ら惜まざるや、百韻に及ぶが如き、老杜に始る、然ども僅に一首、之に繼ぐ者は、白樂天集中凡そ三首、是乃大家の伎倆、後人襲に倣ふは、量を知らず、清人徐增の説、唐詩に、十二句を以て排律の正局と爲す、故に其選端ら六韻を取る、末に入韻を載す、僅に一首のみ、頗る偏見と雖、良に以有るなり。

正德辛卯、韓使の來聘するや、江戸の學士、其館中に就き、唱和して相競ふ、高玄岱、三百九十韻、室鳩巢、二百二十韻の如き、齋

集二百二十韻、豪吟鉅構、可謂盛矣、然究無益長語、徒費紙耳。

七言排律、如杜白諸公、亦不多見、以其傷風趣也、余戲目爲鯨魚羹、海鯢膾、苟知雅味者、所不染指也。

余嘗誡人曰、歌行中作長短句、我輩未審音節、不若且放教西人獨步、偶見隨園詩話曰、七古中長短句、尤不可輕作、何也、古樂府音節無定、而恰有定、恐康昆命彈琴三分琵琶、七分箏絃、全無琴韻故也、是西人猶然、故只宜守正局耳、但短篇首二句、若四句、以五言起、似有定格、此或可擬、然亦非老手不可也。

楊仲弘云、詩要首尾相應、多見人中間二

吟鉅構、盛なりと謂ふ可し、然ども究に無益の長語、徒に紙を費すのみ。

七言排律、杜白諸公の如きも、亦多く見ず、其風趣を傷くるを以てなり、余戲に目して、鯨魚羹・海鯢膾と爲す、苟も雅味を知る者は、指を染めざる所なり。

余嘗て人を誡めて曰、歌行中長短句を作す、我輩未だ首節を審にせず、且つ放し西人をして獨歩せしむるに若かず、偶、隨園詩話を見るに曰、七古中の長短句、尤、輕しく作る可らずと、何ぞや、古樂府、音節定り無く、而して恰も定り有り、恐康昆命彈琴、三分の琵琶、七分の箏絃、全く琴韻無き故なり、是西人すら猶然り、故に只宜く正局を守るべきのみ、但し短篇の首二句、若くは、四句、五言を以て起す、定格有るに似たり、此れ或は擬す可し、然ども亦老手に非れば不可なり。

楊仲弘云、詩は首尾相應するを要す、多く見る人中間の二聯

聯儘有奇崛、然全篇湊合、如出二手、便不成家數、此一句一字、必須著意聯合也、隨園云、詩有有篇無句者、通首清老、一氣渾成、恰無佳句、令人傳誦、有有句無篇者、一首之中、非無可傳之句、而通體不稱難入作者之選、二者一欠天分、一欠工夫、必也有篇有句、方稱名手、此皆中今人之窾、真詩律要訣也、蓋有句無篇者、以鹵莽貂續也、如作律詩、專於聯上著工夫、至于起結、不甚用力、苟且湊合、故一聯半章、雖好、然前後不稱、則併其好者壞了、殊可惜也。

余嘗言、歷代之詩、各有所長、擇其善者可也、何必一概以世廢言、元享已來、明詩盛行、宋詩則棄如糞土耳、近日專主張宋詩、

儘奇崛有、然ども全篇湊合すれば、二手につ出るが如し、便ち家數を成さず、此れ一句一字、必ず須く意を著け聯合すべきなり、隨園云、詩に篇有りて句無き者有り、通首清老、一氣渾成、恰も佳句無くして、人をして傳誦せしむ、句有りて篇無き者有り、一首の中、傳ふ可きの句無きに非ず、通體稱はず、作者の選に入り難し、二者、一は天分を欠き、一は工夫を欠く、必ずや篇有り句有りて、方に名手を稱す、此れ皆今人の窾に中る、真に詩律の要訣なり、蓋、句有り篇無き者は、鹵莽貂續を以てなり、律詩を作るが如き、専ら聯上に於て工夫を著く、起結に至りては、蓋だ力を用ひずして、苟且湊合す、故に一聯半章好し、雖、然ども前後稱はざれば其好き者を併せて壞了す、殊に惜む可きなり。

余嘗て言ふ、歷代の詩、各、所長有り、其善き者を擇んで可なり、何ぞ必ずしも一概に、世を以て言を廢せん、元享已來、明詩盛行はれ、宋詩は則ち棄て、糞土の如きのみ、近日専ら宋詩を主

黃口兒皆趨彼、幾令明人無處生活、時風之所靡、好尙無定如此、不亦太甚乎、隨園詩話云、楊龜山先生言、當今祖宗之法、不必分元祐與熙豐也、國家但取其善者而行之可也、予聞人論詩好爭唐宋、必以先生此語曉之、恰與鄙說合、好而知其惡、憎而知其美、如明李王偽體及徐夜又袁波旬、亦未可全棄也。

宋詩專於風趣、明詩主於氣格、各有所宜、取不可偏廢也、學者依彼氣格、而占此風趣、便唐詩可庶幾矣、余斷宋明之獄、左右其祖以此。

宋趙子固論書曰、學唐不如學晉、人皆能言之、晉豈易學、學唐尙不失規矩、學晉不

張す、黃口兒皆彼に趨き、幾んど明人をして生活するに處無ししむ、時風の靡く所、好尙定り無き此の如し、亦太甚からずや、隨園詩話に云、楊龜山先生言ふ、當今祖宗の法、必ずしも、元祐と熙豐とを分たざるなり、國家但だ其善き者を取りて、之を行ふて可なりと、予、人の詩を論するに好んで唐宋を争ふを聞けば、必ず先生の此語を以て之を曉す、恰も鄙說と合す、好みして其惡を知り、憎んで其美を知る、明の李王の偽體、及び徐夜又袁波旬の如き、亦未だ全く棄つ可からざるなり。

宋詩は、風趣に專に、明詩は、氣格を主とす、各宜く取るべき所有り、偏廢す可らざるなり、學者彼の氣格に依りて、此風趣を占めば、便ち唐詩庶幾す可し、余宋明の獄を斷するに、其祖を左右するは此を以てなり。

宋の趙子固、書を論じて曰、唐を學ぶは晉を學ぶに如かずと、人皆之を言ふ、晉豈學び易からんや、唐を學ぶも尙規矩を失はず、

從唐入、多見其不知量也、此言眞善誘人矣、學詩以盛唐爲準、亦老生之常談、不知而易言之耳、初學宜從近人詩入、則勞省而功倍、然後盛唐可庶幾、豈可一蹴而到耶、余著續絕句類選、所以爲初學指南也、涉遠必自邇、下學而上達、又豈獨詩書然哉。

古詩題目、歌行引等、本一曲爾、見少陵作、有同名異體者、有同體異名者、不必拘局也、白石詩說、放情曰歌、體如行書、曰行、悲如畫蠶曰吟、使人思怨、委曲盡情曰曲、序先後載、始末曰引、文體明辨、猗裁遷抑以揚、永言謂之歌、步驟馳騁、疏而不滯、謂之行、聲音雜比、高下短長、謂之曲、述事始末

音を學ぶには唐より入らざれば、多に其量まを知らざるを見るなり、此言眞に善く人を誘へり、詩を學ぶに盛唐を以て、準を爲すは、亦老生の常談、知らずして易く之を言ふのみ、初學宜しく近人の詩より入るべし、勞省きて功倍せん、然る後に、盛唐庶幾す可し、豈一蹴して到る可けんや、余續絶句類選を著す、初學の指南を爲す所以なり、遠きに涉る、必ず邇きよりす、下學して上達す、又、豈獨り詩書のみ然らんや。

古詩の題目、歌・行・引等本一曲のみ、少陵の作を見れば、同名異體の者有り、同體異名の者有り、必ずしも拘局せざるなり、白石詩說に、情を放つを歌と曰ひ、體、行書の如きを行と曰ひ、悲しき畫蠶の如きを吟と曰ひ、人をして思怨せしめ、委曲情を盡すを曲と曰ひ、先後を序し、始末を載するを引と曰ふ、文體明辨に、猗裁遷抑以て永言を揚ぐ、之を歌と謂ひ、步驟馳騁、疏して滯はらざる、之を行と謂ひ、聲音雜比、高下短長、之を曲と謂ひ、事の始末を述べ、先後序有る、之を引と謂ひ、吁嗟慨嘆、悲憂沈

先後有序、謂之引、吁、嗟、慨、嘆、悲、憂、沈、思、謂之吟、此皆以臆言之、安能如此判然、曾敏行、獨醒雜志云、少陵古詩、有歌行吟歎之異名、每與能詩者求其別、訖未嘗掣然于心也、少陵其必有所祖述矣、世豈無能別之者、恨余之未遇也、是昔賢既不明、今人強求其別、亦鑿空耳。

同訓虛字疊用者、杜甫自從失詞伯、不復更論文、至今夢想仍猶在、韓愈感激生膽勇、從軍豈嘗貧、皮日休、嘯館大都偏得月、醉鄉終竟不聞雷、王貞白、豈思封侯貴、唯只待豐年、陳師道、後歸棲未定、不但只昏鴉、王維、簾前春色應須惜、陸龜蒙、釣竿猶尙枕楓汀、和凝、麻尾尙猶龍字濕、楊萬里

思、之を吟ミ謂ふミ、此れ皆臆を以て之を言ふ、安んぞ能く此の如く判然せんや、曾敏行の獨醒雜志に云、少陵の古詩には、歌行吟歎の異名有り、毎に詩を能する者ミ其別を求むるも、訖に未だ皆て心に掣然たらざるなり、少陵其れ必ず祖述する所有らん、世豈能く之を別つ者無らんや、恨むらくは余未だ遇はざるなりミ、是れ昔賢既に明ならず、今人強いて其別を求む、亦鑿空のみ。

同訓の虛字、疊用の者、杜甫、「詞伯を失ふて自從り、復た更に文を論せず」、「今に至りて夢想仍猶在り」、「韓愈、「感激、膽勇を生ず、從軍豈嘗貧せん」、皮日休、「嘯館大都偏に月を得、醉鄉終竟に雷を聞かず」、王貞白、「豈思はんや封侯の貴きを、唯只豐年を待つ」、陳師道、「歸るに後れて棲未だ定らず、但只昏鴉のみならず」、王維、「簾前の春色應に須らく惜むべし」、陸龜蒙、「釣竿猶尙楓汀に枕む」、和凝、「麻尾尙猶龍字濕ふ」、楊萬里、「今處知る

今歲知何故、秋陽爾許驕、僧惠洪、江南春思倍添增、楊基、旅懷蕭索豈堪勝、如既已、與俱、將欲等、文中數見、詩不多用。

楊升菴曰、今文語辭、竭來聿來、不知所始、楚辭、車既駕兮、竭而歸、不得見兮、心傷悲、舊注、竭去也、呂氏春秋、膠鬲見武王於鮪水、曰、西伯竭來、無欺我也、武王曰、不子欺、將伐殷也、膠鬲曰、竭至、武王曰、將以甲子日至、注、竭何也、若然、則竭之爲言、盡也、若以解楚辭、則謂車既駕矣、盡而歸乎、以不得見而心傷悲也、意尤婉至、則今文所襲用、竭來者、亦謂盡來也、非是發語之辭矣、文選注、劉向七言曰、竭來歸耕、永自疎、顏延年、秋胡妻詞曰、高節難久淹、竭來空復

何の故ぞ、秋陽爾許驕あつたて、僧惠洪、「江南の春思倍々添増」、楊基、「旅懷蕭索豈堪勝たへんや」と、既已、與俱、將欲等の如き、文中數々見ゆ、詩には多く用ひず。

楊升菴曰、今文語辭、竭來、聿來、始まる所を知らず、楚辭に、「車既に駕し、竭て歸る、見るを得ず、心傷悲す」、舊注に、竭は去なりと、呂氏春秋に、「膠鬲、武王に鮪水に見えて曰、西伯竭來、我を欺く無し、武王曰、子を欺がず、將に殷を伐たん」とするなり、膠鬲曰、竭至、武王曰、將に甲子の日を以て至らん」と、注に、竭は、何なりと、若し然らば、則ち竭の言たる盡なり、若し以て楚辭を解せば、則ち車既に駕す、盡ぞ歸るや、見るを得ざるを以て心傷悲すと謂ふなり、意尤も婉至、則ち今文襲用する所の竭來は亦盡來を謂ふなり、是れ發語の辭に非ず、文選の注に、劉向の七言に曰、「竭來歸耕、永く自ら疎なり」、顏延年の秋胡妻詞に曰、「高節久く淹り難し、竭來空しく復歸す」、皆盡字と謂て通ずと、

辭皆謂。蓋字通此說。穿鑿牽強。令人惑滋甚焉。按古琴操。曾子歸耕操。竭來歸耕。歷山盤兮。以晏父母。我心博兮。張衡思立賦。廻志竭來從立謀。獲我所求。夫何思此。與呂覽竭來不同。竭訓爰發語之辭來。到來也。洪武正韻曰。竭來猶聿來也。詩家所用。皆從此義。楚辭及劉向。顏延年。竝是也。呂覽別自一義耳。李涉有三竭來詩。起句皆用斯語。一曰釣魚竭來春日暖。二曰山上竭來採薪名。三曰採藥竭來藥苗盛。張協竭來戒不虞。挺轡越飛岑。陳子昂竭來高唐館。悵望雲陽津。張九齡竭來彭蠡澤。載經敷淺原。李白竭來遊閩荒。捫蘿窮禹鑿。李紳竭來遠志默默存。天和吳筠竭來

此說。穿鑿牽強。人をして惑ひ滋。甚しからしむ。按するに。古琴操。曾子歸耕操に、「竭來歸耕す歷山の盤。以て父母を晏せしむ。我心博し」。張衡の思立賦に「志を廻し竭來立謀に従ふ。我が求むる所を獲て夫れ何ぞ思はん」と。此れ呂覽の竭來と同じからず。竭は爰ニ訓す。發語の辭。來は到來なり。洪武正韻に曰。竭來は猶ほ聿來のニきなりと。詩家の用ふる所。皆此義に従ふ。楚辭及び劉向・顏延年。竝に是なり。呂覽は別に自ら一義のみ。李涉。三竭來の詩有り。起句皆斯語を用ふ。一に曰。一「釣魚竭ニ來て春日暖なり」。二に曰。一「山上竭ニ來て新を採て名づく」。三に曰。一「藥を採て竭ニ來て藥苗盛なり」。張協「竭ニ來て不虞を戒む。轡を挺して飛岑を越ゆ」。陳子昂「竭ニ來て高唐館ニ來り。悵望す雲陽の津」。張九齡「竭ニ來る彭蠡澤。經を載す敷淺原」。李白「竭ニ來て閩荒ニに遊ぶ。蘿を捫して禹鑿を窮む」。李紳「竭ニ來て遠志を採く。默默天和を存す」。吳筠「竭ニ來て舊遊ニに従ひ。式に鑿門の計を保す」。蘇軾「竭ニ來る東觀ニ來り丹臺を弄す。聊か舊史を

從舊遊、式保羨門計、蘇軾、竭來東觀弄丹  
墨、聊借舊史誅姦彊、長陵竭來見大姊、仲  
儒豈意逢將軍、朱熹、竭來空老淚、無地別  
輜車、是其義可見也、又張麟之韻鏡序、竭  
來富塗得、歷陽所刊切韻心鑑、蕉中詩語  
解、引之以爲猶向來謬矣。

聯中有兩句一連流走直下者、謂之流水  
對、老杜好用此法、喜無多屋宇、幸不礎雲  
山、直愁騎馬滑、故作泛舟回、所向無空濶、  
真堪託死生、花徑不曾緣客掃、蓬門今始  
爲君開、竹葉於人既無分、菊花從此不須  
開、憶昨賜露門下省、退朝聲出大明宮、悵  
望千秋一酒淚、蕭條異代不同時、但遣閭  
閻還揖讓、敢論松竹久荒蕪、皆直述其事、

借りて姦強を誅す、「長陵竭に來て大姊を見る、仲儒豈はん  
將軍に逢はん」とは、「朱熹、竭に來て空く老淚、輜車に別るゝに  
地無し」と、是れ其義見る可きなり、又、張麟之の韻鏡の序に、  
「竭に富塗に來り、歷陽、刊する所の切韻心鑑を得たり」と、蕉中  
の詩語解に之を引き以爲く、猶ほ向來の謬れり。

聯中、兩句一連流走直下する者有り、之を流水對と謂ふ、老杜好  
で此法を用ふ、「喜ふ屋宇多き無きを、幸に雲山を礙へず」、「直  
に騎馬の滑を愁ふ、故に泛舟の回るを作す」、「向ふ所空濶無し、  
真に死生を託するに堪へたり」、「花徑曾て客に緣て掃はず、蓬  
門今始めて君の爲に開く」、「竹葉人に於て既に分無し、菊花此  
より開くを須ひず」、「憶ふ昨賜、門下省に聲ふ、退朝聲て大明宮  
を出つ」、「悵望千秋一たび涙を酒き、蕭條異代時を同うせず」、  
「但、閭閻をして揖讓に還らしめば、敢て論ぜん松竹久しく荒

意脈一貫、昔人所謂作文字如寫家書者、又羞將短髮遺吹唱、笑倩傍人爲正冠、將一事翻騰作兩句、融化妙絕、澗道餘寒歷冰雪、石門斜日到林邱、倒裝而流水對、法尤妙。

飢梁肉之餘、悅蔬茹之食、酌耐醴之後、喝清冷之漿、王子安滕王閣詩、能領此意者、序作長文、寫景盡致、綺章繪句、光彩眩人、於是詩則短篇淡意、令讀者爽然、坡公所謂厭厭芻豢、反思螺蛤者也、王阮亭評陳臥子詞、如香車金轎、流連阡陌、反令人思草頭一點之露、此亦爲作文字、不知變化者言也、因憶五代蜀主王衍、奢縱、諸香晝夜不絕、久而厭香、更蒸皂莢、以亂其氣、

蕪するを」と、皆直に其事を述ぶ、意脈一貫す、昔人の謂はゆる文字を作る、家書を寫すが如き者、又「短髮を落して遺つて帽を吹くを羞つ、笑つて傍人を倩ふて爲に冠を正さしむ」、一事を將て、翻騰して兩句を作す、融化妙絶なり、「澗道餘寒冰雪を歷、石門斜日林邱に到る」、倒裝にして流水對なり、法尤も妙なり。

「梁肉に飢く之餘、蔬茹の食を悦ぶ、耐醴に酌ふの後、清冷の漿を喝る」、王子安の滕王閣の詩は、能く此意を領する者、序、長文を作し、景を寫し致を盡す、綺章繪句、光彩人を眩す、是に於て詩は則ち篇を短くし意を淡くし、讀者をして爽然たらしむ、坡公の謂はゆる「芻豢に厭厭し、反て螺蛤を思ふ」者なり、王阮亭、陳臥子の詞を評す、「香車金轎、阡陌に流連するか如し、反て人をして草頭一點の露を思はしむ」、此れ亦、文字を作り變化を知らざる者の爲に言ふなり、因て憶ふ、五代蜀主王衍、奢縱、諸香を蒸く、晝夜絶えず、久くして香に厭き、更に皂莢を蒸き以て

良可笑也。

作詩、審於用事、不可貂續偏枯、余既詳言之於前矣、西清詩話載熙寧初、張揆以二府初成、作詩賀荆公、公和曰、功謝蕭規、慙漢策、恩從隗始、初詔燕臺、以示陸農卿、農卿曰、蕭規曹隨、高帝論功、蕭何第一、皆撫故實、請從隗始、初無恩字、公笑曰、子善問也、韓退之鬪雞聯句、感恩慙隗始、若無據、豈當對功字也、乃知前人以用事、一句偏枯、爲倒置眉目、反易巾裳、蓋謹之如此、又漁隱叢話、宋子京落花詩、將飛更作迴風舞、已落猶成半面妝、議者或謂半面妝、用宋元帝妃徐氏事、若迴風舞、無出處、則對偶偏枯、不爲佳句、殊不知李賀詩云、花臺欲

其氣を亂だす、良に笑ふ可きなり。

詩を作る、事を用ふるに審にす、貂續偏枯なる可らず、余既に詳に之を前に言へり、西清詩話に載す、熙寧の初、張揆、二府初めて成るを以て、詩を作りて荆公に賀す、公和して曰、功は蕭規を謝し漢策に慙つ、恩は隗より始め燕臺に託る、以て陸農卿に示す、農卿曰、蕭規り曹隨ふ、高帝功を論する蕭何第一、皆故實を撫ふ、請ふ隗より始めよは、初めより恩の字無しと、公笑つて曰、子善く問ふなり、韓退之の鬪雞聯句に、恩に感じ隗始に慙つと、若し據無れば登功の字に對すべんや、乃ち知る前人以て事を用ふる、一句偏枯なれば、眉目を倒置し、巾裳を反易すと爲す、蓋之を謹むと此の如し、又、漁隱叢話に、宋子京の落花の詩に、將に飛ばんとして更に迴風の舞を作す、已に落ちて猶ほ半面の妝を成すと、議者或は謂ふ、半面妝は、宋の元帝の妃徐氏の事を用ふ、迴風の舞の若きは、出處無し、則ち對偶偏枯、佳句と爲さずと、殊に知らず、李賀の詩に云、花臺暮れんこ

暮春辭去、落花起作迴風舞、前輩用事、必有來處、又精確如此、誠可爲法也、丹鉛錄亦云、少陵滕王亭詩、春日鶯啼修竹裏、仙家犬吠白雲中、修竹用梁孝王事、犬吠雲中、用淮南王事、人皆知之矣、但怪修竹本無鶯啼字也、偶見孫綽蘭亭詩、鶯啼吟修竹、游鱗戲瀾濤、乃知杜老用此也、讀書不多、未可輕議古人、此皆至論精密、爲後進合錄之。

吾邦、中古尙昭明文選、當時學者專意此書、勸學院集飲、或曰、今日之會、不問齒序、乃以才高下爲席、藤隆賴、便直進居上頭、諸人爭之、隆賴曰、文選三十卷、四聲切韻、有暗誦者邪、身座乃應讓耳、其通文選爲

欲して春辭し去る、落花起て迴風の舞を作す、前輩事を用ふる、必ず來處有り、又精確此の如し、誠に法に爲す可きなり、丹鉛錄に亦云、少陵の滕王亭の詩、「春日鶯は啼く修竹の裏、仙家犬は吠ゆ白雲の中」、修竹は梁の孝王の事を用ふ、犬、雲中に吠ゆるは淮南王の事を用ゆ、人皆之を知れり、但、怪む修竹本に鶯啼の字無きなり、偶、孫綽の蘭亭の詩を見るに、「鶯啼、修竹に吟じ、游鱗、瀾濤に戯る」、乃知る老杜此を用ふるなり、書を讀むこと多からざれば、未だ輕しく古人を議す可らず、此れ皆至論精密なり、後進の爲に之を合せ録す。

吾邦、中古、昭明文選を尙ふ、當時の學者、意を此書に專にす、勸學院の集飲に、或ひて曰、今日の會は、齒序を問はず、乃ち才の高下を以て席を爲さん、藤隆賴、便ち直に進んで上頭に居る、諸人之を争ふ、隆賴曰、文選三十卷、四聲切韻、暗誦する者有らんか、身が座、乃ち應に讓るべきのみ、其の文選に通ずるを

能事如是唐人亦然故少陵有熟精文選  
 理之句李德裕曰吾家不畜文選蓋惡其  
 浮靡激反時俗而言也至宋尤甚時諺云  
 文選爛秀才半又云文選熟秀才繞東坡  
 因罵文選曰小兒強作解事亦矯激之言  
 也唐鄭奕嘗以文選教其子其兄曰何不  
 教他讀孝經論語免學沈謝嘲風詠月汚  
 人行止茲言誠有識矣如雨航雜錄所云  
 唯文選是尙枕席沈醉其間而六經如甲  
 乙簿者固鳴鼓而攻之可也然途廢而不  
 讀者亦不免於面墻爾

杜詩讀書破萬卷破猶過也公詩二月已  
 破三月來李義山新正未破剪刀冷亦皆  
 訓過舊說識破萬卷之理或謂猶韋編三

能事爲すこ是の如し唐人も亦然り、故に少陵、「文選の理  
 に熟精する」の句有り、李德裕曰、吾家、文選を畜へず、蓋、其  
 浮靡を惡み、激して時俗に反して言へるなり、宋に至り尤甚し、  
 時諺に云、「文選爛れて秀才半なり」ミ、又云、「文選熟して秀才  
 練なり」ミ、東坡因て文選を罵りて曰、小兒強いて解事を作す  
 也、亦矯激の言なり、唐の鄭奕、嘗て文選を以て其子に教ふ、其  
 兄曰、何ぞ他に孝經、論語を讀ましめ、沈、謝が風を嘲り、月を  
 詠じて、人の行止を汚すを學ぶを免れしめざるや、茲の言、  
 誠に識有り、雨航雜錄に云ふ所の、唯、文選のみ是れ尙じ、其間  
 に枕席沈酔して、六經を甲乙簿の如くする者の如きは、固より  
 鼓を鳴らして之を攻めて可なり、然れども遂に廢して讀まざる  
 者も、亦面墻を免れざるのみ。

杜詩に「書を讀んで萬卷を破す」ミ、破は猶ほ過すのミミキなり、  
 公の詩に、「二月已に破し三月來る」ミ、李義山「新正未だ破せず  
 剪刀冷なり」ミ、亦皆過ミ訓す、舊說に、萬卷の理を識破すミ、或

絶、竝非。

李瀚蒙求、協以韻語、以便課誦、蓋倣周興嗣千字文、故全唐詩收爲詩類、近世往往有綴貂者、徒倣其體裁、而不知押韻、殊可笑也。

肥後本田正卿、天才俊逸、爲詩敏絶、一揮數十篇、人莫擾其鋒、嘗遊長崎、過佐賀學館、諸生素聞其驕傲、頗憎忌之、試卽席贈詩、要和、欲俟其成、更又次韻、仍請再和、必令詞鋒剋、蓋皆具腹稿云、生見幾領意、便卻贈各一首、附次韻、併示揮筆如飛、略不構思、又手擊鉢、風生雨集、衆瞻若自失、謀折而罷、於是延畫手三人、曰、嘉賓辱臨、無以供興、聊奏薄技、敢請高詠、蓋亦所預謀、

は謂ふ、猶ほ章編三絶のまじしと、竝に非なり。  
李瀚の蒙求、協するに韻語を以てし、以て課誦に便にす、蓋、周興嗣の千字文に倣ふ、故に全唐詩收めて詩類と爲す、近世往々綴貂の者有り、徒に其體裁に倣ひて、韻を押すを知らず、殊に笑ふ可きなり。

肥後の本田正卿は、天才俊逸、詩を爲る敏絶、一揮數十篇、人其鋒に擾るゝ莫し、嘗て長崎に遊び、佐賀學館に過る、諸生素より其驕傲を聞き、頗る之を憎忌す、試に卽席に詩を贈り和を要む、其成るを俟ちて更に又次韻し、仍て再和を請ひ、必ず詞鋒を剋せしめんを欲す、蓋皆、腹稿を具す云ふ、生、幾を見て意を領し、便ち却て贈る、各一首、次韻に附し、併せ示す、筆を揮ふこゝ飛ぶが如く、略、思を構せず、又手擊鉢、風生雨集す、衆瞻若きして自失す、謀折けて罷む、是に於て、畫手三人を延きて曰、嘉賓辱臨す、以て興に供ふる無し、聊か薄技を奏し、敢て高

云生隨畫便題多多益辨畫漸奇僻題愈敏捷三人者不遑給生則綽有餘力矣既而舌戰鬪智詞辯注射務欲壓倒生機鋒捷給八面受敵游刃有餘生徒終不能克因詰曰有所敢演不知許否貴藩儉制殊嚴如夫禪帶舉國必用所謂越中者蓋國初三齋公所創世俗故稱云竊惟蔽屨之具敢冒君侯之稱爲之臣者不可不避未審易以何名若向他邦人將稱寡君禪乎生笑曰僕亦欲有請問憚唐突未敢世俗所謂肥前瘡多是卑賤所患然士大夫動或傳染卽座中諸君亦有有其痕者世傳此瘡初自貴國始行故因其號遂爲名抑不知在內云何其稱諸異邦無乃曰敝邑

詠を讀はんこ蓋亦預め謀る所云ふ生畫に隨ひ便ち題す多々益辨す畫漸く奇僻題する愈敏捷三人の者邊給せず生則ち綽として餘力有り既にして舌戰智を鬪はず詞辯注射務めて壓倒せんを欲す生機鋒捷給八面敵を受け游刃有餘り生徒終に克つ能はず因て詰りて曰敢て演す所有らん知らず許すや否や貴藩儉制殊に嚴なり夫の禪帶の如き舉國必ず謂はゆる越中さいふ者を用ふ蓋國初三齋公の創むる所世俗故に稱して云ふ竊に惟ふ蔽屨の具敢て君侯の稱を冒す之が臣たる者避けざる可からず未だ審にせず易ふるに何の名を以てするや若し他邦の人に向へば將た寡君禪と稱せんかこ生笑つて曰僕も亦請ひ問ふ有らんを欲す唐突を憚りて未だ敢てせず世俗の謂はゆる肥前瘡多くは是れ卑賤の患ふる所然ども士大夫動もすれば或は傳染す卽ち座中の諸君にも亦其痕有る者有り世に傳ふ此の瘡初め貴國より始めて行はる故に其號に因て遂に名を爲すこ抑も内に在りては何こ云ふを知らず其れ諸を異邦に稱して乃ち敝邑と云ふ

瘡乎、一座服其機警、無復敢嘲諷者、真曠世之奇才也。惜風流自傲、不事操修、浪跡漂蕩、屢變易姓名、嘗在京師稱菊池某者、卽是也。余見其詩、儻有佳句、今不知流落何所、殆坎墮以歿矣。

西清詩話載吳越王時、宰相皮光業、每以詩爲樂、嘗得一聯、云、行人折柳和輕絮、飛燕啣泥帶落花、自負警策、以示同僚、衆爭嘆譽、裴光約曰、二句偏枯、不爲工、柳當有絮、泥或無花、歐公詩話稱此論乃得詩之膏肓矣、又元厚之作王介甫再相麻、世以爲工、然未免偏枯、其云、忠氣貫日、雖金石而爲開、讒波稽天、孰斧戕之敢闢、上句忠氣貫日、則可以觀、雖金石而爲開、下句讒

無からんかき、一座其機警に服し、復た敢へて嘲諷する者無し、眞に曠世の奇才なり、惜むらくは風流自傲、操修を事せず、浪跡漂蕩、屢々姓名を變易す、嘗て京師に在りて、菊池某と稱する者、卽ち是なり、余、其詩を見るに、儻佳句有り、今何れの所に流落するを知らず、殆んど、坎墮にして以て歿せしならん

西清詩話に載す、吳越王の時、宰相皮光業、毎に詩を以て樂と爲す、嘗、一聯を得たり、云、行人柳を折りて輕絮に和し、飛燕泥を啣んで落花を帶ぐ、此、警策を自負し、以て同僚に示す、衆爭ふて嘆譽す、裴光約曰、二句偏枯、工と爲さず、柳には當に絮有るべし、泥或は花無し、歐公詩話に稱す、此論乃ち詩の膏肓を得たり、又、元厚之、王介甫の再相麻を作る、世以て工と稱す、然ども未だ偏枯を免れず、其、忠氣、日を貫き、金石と雖、而かも爲に開かん、讒波天に稽り、孰か斧戕之れ敢て闢かん、云ふ、上句、忠氣、日を貫くは、則ち以て金石と雖、而かも爲に開くに觀す可し、下句、讒波天に稽るは、則ち斧戕に於て了に干渉無し、

波稽天、則於斧戕、了無干涉、此四六之病也、吾輩作詩、動有此失、故每句吟味、宜審語脈、以煉字法也。

沈雲卿嵩山石淙前聯、云行漏香爐、次聯云神鼎帝壺、俱壓句末、岑嘉州和杜相公、雲隨馬雨洗兵花、迎蓋柳拂旌、四言一法、王右丞九成宮避暑、三四衣上鏡中、五六林下巖前、皮日休送圓載上人、紙上餅中、影邊宮裏、亦與王同病、王敬美嘗言其失矣、作詩容易下筆、不覺多有此弊、其不可不用心也、如孫逖和左司張員外、雲間山上、河邊林下、府中署裏、句句相犯、不尤甚乎。

王勃披襟乘石磴、列席俯春泉、杜甫峽東

此れ四六の病なり、吾輩詩を作る、動すれば、此失有り、故に句毎に吟味し、宜しく語脈を審にし、以て字法を煉るべきなり、

沈雲卿の嵩山石淙の前聯に、「行漏香爐」云ひ、次聯に「神鼎帝壺」云ふ、俱に句末を壓す、岑嘉州の杜相公に和すに、「雲は馬に隨ひて雨、兵を洗ふ、花は蓋を迎へて柳、旌を拂ふ」云、四言一法、王右丞の九成宮に暑を避く、三四に「衣上鏡中」、五六に、「林下巖前」云、皮日休の圓載上人を送るに、「紙上餅中、影邊宮裏」云、亦、王同病、王敬美嘗て其失を言へり、詩を作りて容易に筆を下せば、覺へず多く此弊有り、其れ心を用ひざる可らざるなり、孫逖の左司張員外に和するが如き、雲間山上、河邊林下、府中署裏、句々相犯す、尤も甚しからずや。

王勃、襟を披いて石磴に乗じ、席を列ねて春泉に俯す、杜甫、

滄江起巖排石樹圓許渾晒書秋日曉洗  
 藥石泉清任鶴魚躍晴波動龍歸石洞腥  
 僧貫休微月生滄海殘濤傍石城李攀龍  
 大麓夏雲當檻出石門寒雨過城踈曳履  
 春雲高北斗廻車秋色照鐘山石鍾竝量  
 名用假對也戴叔倫遠林生夕籟高閣起  
 鐘聲劉長卿晚光臨仗發春光共西歸鐘  
 鐘同仗丈通亦借聲取對也。

天厨禁樹云根非生下土葉不墜秋風五  
 峰高不下萬木幾經秋以下對秋蓋夏字  
 聲同也此不必借聲對上下春秋固自相  
 對覺範未之知耳。

芥子園畫傳曰筆墨間俗氣尤不可侵染  
 去俗無他法多讀書則書卷之氣上升市

「映は滄江を束ねて起り、巖は石樹を排して圓なり、許渾の書を晒すに、「秋日、晚く藥を洗し、石泉清くして鶴に任す」、「魚躍りて晴波動き、龍歸りて石洞腥し」、「僧貫休、「微月滄海に生じ、殘濤石城に傍ふ」、李攀龍、「大麓の夏雲檻に當りて出で、石門の寒雨城を過ぎて疎なり」、「履を曳けば春雲北斗より高く、車を廻せば秋色鐘山を照す」、「石鍾竝に量名、假對を用ふるなり、戴叔倫、「遠林夕籟生ず、高閣鐘聲起る」、劉長卿、「晚光仗に臨んで發し、春光共に西に歸る」、鐘鐘同じ、仗丈通ず、亦聲を借り對を取るなり。

天厨禁樹に云、「根、下土より生ずるに非ず、葉、秋風に墜らず」、「五峰高くして下らず、萬木幾たびか秋を經」、下を以て秋に對す、蓋、夏の字と聲同じければなり、此れ必ずしも借聲對ならず、上下春秋、固より自ら相對す、覺範、未だ之を知らざるのみ。芥子園畫傳に曰、筆墨の間、俗氣、尤も侵染す可からず、俗を去る他法無し、多く書を讀まば、則書卷の氣上升し、市井の氣下降

井之氣下降矣。朱象賢印典曰：古人有言、唯俗不可醫、人有服飾鮮華、輿從絡繹、而狙獠之氣令人不可耐者、俗故也。篆刻家、諸體皆工、而按之、少士人氣象、終非能事、惟胸饒卷軸、遺外勢利、行墨間、自然爾雅、要恐賞音者希、此中人語、不堪爲外人道也。夫繪事篆刻猶爾、況於風騷之藝乎、務用書籍洗滌俗腸、學者其勉旃哉。

崔惠童「一月主人笑幾回、第四字犯孤平、文苑英華、唐詩紀事、竝作「人生、律正意優、蓋用「莊子語、泛歎缺陷世界、而第二句相逢相值且啣杯、亦兼賓主之語、乃首句何必偏指主人、其爲誤寫、的然無疑、白香山詩、人生閑口笑、百年都幾回、亦可以見矣、

せん、朱象賢の印典に曰、古人言へる有り、唯俗醫す可らず、人、服飾鮮華、輿從絡繹、而して狙獠の氣人をして耐ふ可らざらしむる者有り、俗なるが故なり、篆刻家、諸體皆な工なり、而して之を按ずるに、士人の氣象少し、終に能事に非ず、惟だ胸に卷軸饒く、勢利を遺外せば、行墨の間、自然に爾雅ならん、要するに恐らくは賞頤の者希ならん、此れ中人の語、外人の爲に道ふに堪へざるなり、夫れ繪事篆刻、猶ほ爾り、況んや風騷の藝に於てをや、務めて書籍を用ひ、俗腸を洗滌す、學者其れ旃を勉めよや。

崔惠童「一月主人笑幾回ぞ」、第四字、孤平を犯す、文苑英華、唐詩紀事、竝に人生に作る、律正しく意優なり、蓋、莊子の語を用ひ、泛に缺陷世界を歎す、而して第二句相逢ひ相値ふて且杯を啣む亦賓主を兼ねるの語なり、乃ち首句何ぞ必ずしも偏に主人を指さん、其の誤寫たる、的然疑ひ無し、白香山の詩に「人生口を閑いて笑ふ、百年都て幾回ぞ」、亦以て見る可し、「愛す汝

如愛汝玉山草堂靜、借問故園隱君子、則句脚挾平、以變調行之、亦千百中之一二耳。

不作奇險之語、不廢尋常之言、是詩家金科玉條、舍布帛菽粟、而好異服異味、豈不甚僻乎、狐穴詩人、妄好詭異、務用前人未使之奇字、以炫己之廣博、而聳人之視聽、聲調侷屈、意匠怪僻、風雅掃地、寔詩之極弊也。

詩社夜集、時丁晚夏、某生一聯、炎蒸未改、朱明節、淡薄先含白露風、有惡喙薄徒、拊掌曰、古人嘗竊此句、人皆失笑、蓋與漠漠水田、陰陰夏木、同一狡黠也、昔僧惠崇詩、河分岡勢斷、春入燒痕新、徒弟嘲其蹈襲

「玉山草堂の靜なるを」借問す故園の隱君子の如き、則ち句脚に平を挾み、變調を以て之を行ふ、亦千百中の一二のみ。

奇險の語を作さず、尋常の言を廢せざるは、是れ詩家の金科玉條、布帛菽粟を舍て、異服異味を好む、豈甚だ僻ならずや、狐穴詩人、妄に詭異を好み、務めて前人未だ使はざるの奇字を用ひ、以て己の廣博を炫し、而して人の視聽を聳かす、聲調侷屈、意匠怪僻、風雅地を掃ふ、寔に詩の極弊なり。

詩社夜集、時に晚夏に丁る、某生の一聯に、炎蒸未だ改まらず、朱明の節、淡薄先づ含む白露の風、惡喙の薄徒有り、掌を拊つて曰、古人嘗て此句を竊あり、人皆失笑す、蓋漠々水田、陰々夏木、同一狡黠なり、昔、僧惠崇の詩に、「河は岡勢を分ちて斷え、春は燒痕に入て新なり」、徒弟其蹈襲を嘲りて云、「河は岡勢を分つ司空曙、春は燒痕に入る劉長卿、是れ師兄が古句を

云、河分、岡勢、司空曙、春入、燒痕、劉長卿、不、  
 是師兄、儻古句、古人詩句犯師兄、又、魏周  
 輔作詩上陳亞、犯古人一聯、亞不作禮、周  
 輔又上絕句云、無所用、心唯飽食、爭如窓  
 下作新詩、文章大抵多相犯、剛被、人言愛  
 竊詩、亞乃次韻云、昔賢自是堪加罪、非敢  
 言君愛竊詩、叵耐、古人多、意智、豫先、儻子  
 一聯詩、皆可解頤一笑也。

## 夜航詩話卷之六 終

儻みにあらず、古人の詩句師兄を犯せり」云、又、魏周輔、詩を  
 作り陳亞に上るに、古人の一聯を犯す、亞、禮を作さず、周輔又  
 絶句を上りて云、「心を用ふる所無く唯、飽食す、争で如かんせ  
 ん窓下に新詩を作るを、文章大抵多くは相犯す、剛に人に詩を  
 竊むを愛す」と言はる、云、亞乃ち次韻して云、「昔賢自らはれ罪  
 を加ふるに堪へたり、敢て君が詩を竊むを愛す」と言ふに非ず、  
 叵耐、古人意智多し、豫め先づ子が一聯の詩を儻む」云、皆頤を  
 解いて一笑す可きなり。

大正九年四月廿八日印刷  
大正九年五月一日發行

日本詩話叢書卷二

非賣品

編輯者 池田四郎次郎

東京市神田區小川町一番地

立田義元

東京市麹町區有樂町二丁目一番地

吉原良三

右同所

印刷所 報文社



發行所

東京市神田區  
小川町一番地

文會堂書店

電話神田三二一六番  
張替東京三五一三番